
バカとひねくれ男と召喚獣

14日は土曜日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとひねくれ男と召喚獣

【Nコード】

N5555W

【作者名】

14日は土曜日

【あらすじ】

吉井明久達が文月学園に入って二年目。振り分けテストの結果Fクラスにはバカ達が集まった。そんなバカ達にあるひねくれた男が加わった。

その男の名は猪俣英才。

身長2mに迫る大男でそのたくましい外見から脳みそ筋肉だと思われるが、それに反して文武両道。だが性格に難あり。

バカとひねくれた男が出会い、何かが変わるのか・・・

初めて書くので文才は期待しないでください。

なお、原作キャラに対してアンチ要素があります。

プロフィール

名前：猪俣英才 いのまたひでとし

性別：男

年齢：16

身長：198cm

容姿：戦国バサラの黒田官兵衛に似てる。幼い頃の火傷の為に右目を失明しており、大きめの眼帯をしている。

性格：ひねくれている。
ドライ。

その他：木下姉弟とは付き合いが長い。唯一この2人に心を開いている。両親は幼い頃に他界。過去を知っているのは鉄人と木下姉弟だけ。

得意科目：文系科目

苦手科目：理系科目（苦手といっても点数は高い）

召喚獣：見た目は戦国バサラの黒田官兵衛。武器は鉄球。
腕輪：戦国バサラの黒田官兵衛のバサラ技（鉄球を振り回して竜巻を発生させる）

追加

・愛用のアイマスクの左目部分には小さな穴があり、つけていても

左目を開ければ前が見える

クラス発表

「おはようございます、にし・アイアンマン先生」

「おはよう、猪俣。言い直す必要はないぞ」

「冗談ですよ28号先生。」

「まったくお前は・・・」

文月学園補修担当兼生活指導担当教師西村宗一はため息をつく。

「ほら、振り分けテストの結果だ」

差し出されたのは一枚の封筒。鉄人西村の持つ箱にまだ大量の封筒があるのを見る限り、まだ生徒はほとんど来ていないようである。

「こんなものもらわなくても分かっとなるんですけどねえ」

「そう言っな。それでいいのか？真面目に受ければ良かっただろうに」

「どうせどこに行っても変わりやしませんっ

て」

英才はそう書かれた紙を手に見ていた。

「それじゃ、行きますんで。」

だるそうにしながら英才は教室に向かった。

「あいつもあの性格さえなければな・・・」

自分と同じぐらいの大男である教え子の背を見て呟く西村だった。

Fクラスへ

「ほう、これじゃあどこぞの廃屋といい勝負じゃねえ」

Fクラスに着いた英才は他クラスとのギャップに驚いた。

文月学園では、世界初の教育システムとして『試験召喚システム』が導入されている。科学、偶然、オカルトなどの要因から成るこのシステム。

これによって生徒は試験の点数に比例して強化される召喚獣を駆使することができ、これを用いて主にクラス単位行うのが試験戦争である。下位クラスは設備向上のため、上位クラスは設備維持のために試験戦争を行う。そのためには必然的に試験で好成績をとらねばならず、そのための学習意欲の向上を促すという狙いがある。

しかし、まるでホテルのような豪華仕様のAクラスと最下位クラスのFクラスの設備の差はまさに雲泥の差であった。

床には腐った畳、机はボロボロの卓袱台、隙間風を通し機能を果たしていない割れた窓ガラス。果てにはチョークさえ支給されていない。

「まあ、ええか。住めば都やが」

まだ英才以外の生徒は登校していないため、適当な席に座ることにした。

「やっぱ早よ来すぎたわ。まあ、ひと眠りしときゃ誰か来っじやろ」
英才はカバンから取り出したアイマスクをつけて卓袱台に突っ伏した。

自己紹介（前書き）

Fクラスやつと登場です

自己紹介

「英才、お主の番じゃぞ。起きるのじゃ！」
「あ？」

英才は聞き慣れた爺言葉に目を覚ました。

「なんや、秀吉はこのクラスやったんか」

「ワシはお主がFクラスということが信じられぬがな。それはそうと、自己紹介はお主の番じゃぞ。」

「え？しゃあねえなあ」

めんどくさそうに立ち上がり、アイマスクを外す。

「猪俣英才。好きなことは情眠を貪ることです。若干訛ってますが眼帯と一緒にスルーしてください」

首をコキコキ鳴らしながらいい終わると、再びアイマスクを装着し眠り始めた。

「「「大ありじゃー！！」」」

「ん？」

Fクラスの魂の叫びに目を覚ました英才。

「だろう？俺だってこの状況は大いに不満だ」

（誰や？あんゴリラは？）

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまり！』

『Aクラスだって同じ学費だろ？改善を要求する？』

不満を爆発させるFクラス。

「そこで代表としての提案だが

FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思っつ？」

（何ぬかしよるんか、こんゴリラは……）

勝算

『そんなの勝てるわけがないだろ？』

『これ以上設備を落とされたらどうなるんだ？』

『姫路さんがいれば何もいらぬ』

（こんバカどもが勝てるわけないやろうが）

ボスゴリラ、もといFクラス代表坂本雄二の言葉に否定的なFクラスメンバーと英才。

文月学園で行われている試験は一般のがつこうのそれと異なるものである。点数に上限というものが無く、制限時間内であれば生徒の能力次第でいくらかでも問題を解くことができ、点数に比例して召喚獣が強くなる。そのためAクラスとFクラスの点数では差が開き過ぎていてまるで話にならない。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや俺が勝たせてみせる」

『無理に決まってるじゃん』

『そう言われても何の根拠も無いしなあ・・・』

（根拠有ってん勝てんて）

「根拠なら有るさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃って

いる。それを今から説明してやる」
雄二は自信ありげにいう。

「おい庚太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ？」
「……………？（ブンブン）」

雄二に指名された少年、土屋庚太は顔を上げると必死に否定をする。

「土屋庚太、こいつがあ有名な寡黙なる性識者だ」
ハツリーニ

「馬鹿な！奴がそうだというのか？」

「見る！まだ顔の畳の跡を隠そうとしているぞ！」

「ああ、ムツツリの名に恥ない姿だ」

（ただの公然わいせつの現行犯やろうが）

「そして姫路のことは皆その実力をよく知っているはずだ」

「え？わ、私ですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

「そうだ！俺たちには姫路さんがいる！」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

「ああ、彼女さえいれば何もいらなないな」

（ああ、ゴリラが強気なんはこいつんせいか）

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

「演劇部のホープ！」

「確かAクラスに双子の姉がいたな」

（何も努力しとらんお前らバカと一緒にとは……）

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんかやってくれそうな奴だな』

『坂本って小学生のころ神童とか呼ばれてなかったか?』

『じゃあ試験は姫路さんと一緒に体調不良だったのか?』

（んなわけないやろうが。どこのクラスの代表やと思うちよるんか?）

『これはいけるんじゃないか?』

『よし? やってやろうぜ?』

「それに吉井明久だっている」

シーン……

それまで最高潮に達していたFクラスのボルテージは一気に下がった。

「ほら! せっかく上がった士気が台無しじゃないか?」
名指しされた少年、吉井明久。その実態は

「そうか、知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ?」

『それってバカの代名詞じゃ?』

「ち、違っよ! ちよっとお茶目な十六歳の愛称で・・・」

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二!」

明久の言い訳は虚しく一蹴された。

・
・
・
・

「気にするな! いてもいなくても対して変わらん雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフロアするところだよな?」

(まあ、操作能力からしてそこのバカどもよりは断然マシやろ)

「そして最後だ。このクラスには今の学年首席をはるかに凌駕する奴がいる?」

『が、学年首席ってあの霧島翔子をか?』

『そんな奴がなぜFクラスに?』

「理由は本人に聞くんだな。おい、猪俣英才? 起きているんだろ? アイマスクを取れ?」

全員の視線が狸寝入りを決め込んでいた英才に集まる。

（面倒やなあ・・・俺も頭数に入っとったんかい）

英才は渋々アイマスクを外した。

昼行灯

『こんな大男が天才だと？』

『しかし、猪俣って名前なんて聞いたこともないぞ』

『姫路さんみたいな美少女だったらなあ』

英才を知らない者たちは騒ぎ始めた。

「まあ、ムツツリー二と同じで猪俣英才という本名はあまり知られていないからな。皆、昼行灯^{ひるあんどん}って言ったらわかるだろ？」

『な？昼行灯だと！？』

『昼行灯と言ったら、普段目立たないけど部活の助っ人として勧誘が絶えない、そして中学生の塾のバイトで先生をやって何人も名門校に通したって聞いたことがある！』

『坂本の話が本当ならこいつ最強じゃねえか！！』

先ほどの明久ショックで大暴落したFクラスのボルテージが再び上昇していく。

「あのさあ、盛り上がってるとこ悪いんやけどよ、代表に聞きたいことがあるんよ」

「ん？なんだ？」

英才はゆっくり話出した。

「なんでAクラスに仕掛けるんや？」

「ああ。俺は世の中学力が全てではないと思っている。それを証明してやりたいからだ。それに明久がひ」

「あああ！！そ、そんなことよりそれがどうしたの！？」

明久は雄二の言葉を遮った。

「確かに世の中学力が全てじゃあないやろ、一理あるわそら。でも

なあ、考えてみ？俺らは実業系の高校と違って普通科の高校の学生やぞ？実業系やったら結構資格が取れたり専門的なことが学べるやろ。でん俺らはそんなことはできん。そうなたら俺らには勉強して進学をするか秀吉みたいに何か秀でとらんといかんのと違うか？

大学や専門学校への進学は就職には欠かせん。それをほっぽり出してしとらんでそのまま社会に出てん資格もスキルもない俺らは何もできんやろ。

まあ、設備向上の権利を求めるならまずは勉強という義務を果たせつちゆうこつちやが。それができとらんからこのクラスになったんやろうが」

「だ、だったら姫路さんはどうなるんだよ！？熱が出たからってあんまりじゃないか！！」

「よ、吉井君・・・」

明久は拳を握りしめ、英才を睨む。

「あ？まあ、俺もわざとなった身だからあまり人んこと言えんけどな、体調管理も実力のうちやろ。熱が出たから、とかいう理由が通じるのは社会ではあまりないんだよ」

「な、なんだとぉ！」

英才の言葉に納得のいかない明久。それを止めるゴリラがいた。

「待て明久。そいつの言うことも間違ってはいない。」

「でも！！」

「なあ、猪俣。俺たちはおまえの説教なんてどうでもいい。ただ、お前はこの話に乗るか反るかを聞きたいんだ」

雄二の目が鋭くなる。その迫力にも動じない英才。

「ま、不本意やけん、俺かて良い環境で寝たいしのう。最小限の協力はしたるわ。」

じゃけん、大將が無能のバカやと分かったときは別やぞ?」

英才は冷たい視線を返す。その迫力は雄二を上回り、誰もが冷や汗を流すほどだった。

「ま、これくらいにしといたるから後は勝手にやれや」
そう言つて英才はアイマスクをつけて眠り始めた。

昼行灯（後書き）

主人公の説教は作者が親や先生にされたものです。

バカテスト問1（前書き）

オリジナルです

バカテスト問1

問：「他人のものは何でも良く見える」という意味の慣用句を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『隣の芝生は青い』

教師のコメント

正解です。易しすぎましたか？

吉井明久の答え

『隣の家計は黒い』

教師のコメント

あなたの家計は赤いんですね。

猪俣英才の答え

『隣の芝生が青かったので除草剤を捲く』

教師のコメント

嫉妬しないでください。

あるFクラス生徒の答え

『隣の男は彼女持ち』

教師のコメント

あなたも嫉妬しないでください。あとで吉井君と猪俣君と一緒に職員室にくるように。

嫉妬（前書き）

グダグダです

嫉妬

「ちょっと何なのよあいつ！！ウチ達のことをバカにして！！」

英才が眠り始めたのを見て怒りをあらわにする島田美波。ポニーテールがトレードマークだ。

「・・・・・・心外」

「あまり好感を持ってないのは確かだな」

美波にムツリ―二と雄二が続く。

「皆の気持ちも分からんでもないのじゃ。じゃがあやつは根は良い奴なんじゃ。」

「？ねえ、秀吉。猪俣君のことを知ってるの？」

秀吉のフォローに首を傾げる明久。

「知ってるもなにも、英才とワシと姉上は幼い頃からの付き合いじや。英才は途中で宮崎に行ってもうたがの。2、3年前に戻って来たばかりじゃ」

「総員攻撃用意！！」

秀吉が言い終えてコンマ一秒で明久の号令が響き渡る。雄二、瑞希、秀吉、美波以外の全員が上履きの片方を投擲しようと構えている。狙いは英才ただ1人である。

「ちょ、アンタ達！なにしてるのよ！！」

「吉井君達は何で統制がとれているんでしょうか？出会って間もないはずですよね？」

一系乱れぬ軍隊のような集団（後のFFF団）に顔を引きつらせる二人。

「や、やめるのじゃ、明久！！」

「止めないで秀吉！！僕らはこのアイマスクを被った狼を抹殺しなければならんだ！！」

「殺したいほど妬ましい・・・・」

『生かしておけるかあ！！！！』

『羨ましいんじゃないやあああ!!』

彼女いない歴〃年齢の暴徒達は嫉妬を口にする。

「英才は鉄人と同等の強さを持つておる。暴走族を潰して感謝状をもらったこともあるのじゃ。お主らが勝てるとは」

「総員止め!!・・・くつ、命拾いしたね猪俣君!」

「・・・また日を改める」

人外の強さを誇る鉄人の世話になることの多い面々は何事もなかったかのように席に戻って行く。

FFF団が生まれたのはまた別の話である。

バカテスト問2（前書き）

バカテストが難しいです

バカテスト問2

問：「弱り目に祟り目」と同じような意味を持つことわざを答えなさい。

姫路瑞希の答え

『泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも『踏んだり蹴ったり』などもありますね。

土屋庚太の答え

『踏まれて悦んだり蹴って悦んだり』

教師のコメント

それは一部の人だけです。

吉井明久の答え

『泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

猪俣英才の答え

『泣きつ面にアバダケタブラ』

教師のコメント

それはとどめです。あと、ここは魔法^{ホクワーツ}魔術学校ではありません。あ
なたと土屋君と吉井君は後で補習室^{アスカバン}に行ってもらいます。

Dクラス戦に向けて

「おい、起きろ猪俣」

「ああん？」

突然アイマスクを外された英才は夢の世界から呼び戻された。

「なんや、代表」

「これからDクラス戦についてミーティングをやるからお前もこい。」

「どこでや？」

「屋上だ。先に行くからサボるなよ」

「面でえな。ま、後から行くわ」

英才は寝起きで少し機嫌が悪いらしく、いぶかしげに言う。

（吉井のバカがボロボロやが、宣戦布告したみたいやな。しかも、こん学校には秩序っちゅうもんが無いんかねえ）

雄二達を見送り、首を鳴らしながら思う英才。

（まあ、どんげでんええわ。飯食ってから行くか。）

巨体を起こし、英才は学食へと向かった。

「来たで、代表」

手早く食事を済ませた英才は屋上のドアを開けた。

「やっと来たか。じゃあ、話を戻すぞ」

英才を見てコホンと咳払いをする雄二。吉井が慌てているところを見ると、話が脱線していたらしい。

「昼行灯^{いのまた}がいて姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「Eクラス言うてん、Fクラスに毛が生えたぐらいの点やからな」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

（アホかい。こんままやったら、軍艦に対して手漕ぎボートで応戦するようなもんやぞ）

ため息が出る英才。

「吉井、何の策や布石も無しに勝てるわけないやろうが。物には順番うちゅうもんがあるんや」

「猪俣の言う通りだ。初陣だし、派手にやって今後の景気付けにしたいというのもあるからな」

呆れながら言う英才に同調する雄二。

「で、でもさ、Dクラスに勝てなかったら意味が無いよ」

「負けるわけないさ」

明久の杞憂を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは

最強だ！」

（えらいこつぬかしよるのお。まあ、今の状況じゃ煽るに越したこ

とはないか)

「いいわね。面白そうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

(秀吉、優子んこつわすれとりやせんか?)

「・・・(グッ)」

「が、頑張りますっ!」

雄二の言葉にやる気になった一同。

1人を除いて。

(さて、元神童とバカ共はどこまで行くかねえ。見ものやな)

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

雄二は自信に溢れる表情で説明を始めた。

V S Dクラス

時間は進んで午後。

英才と瑞希は持ち点が無いために教室で試験を受けていた。教室にはクラス代表の雄二とその護衛数人、そして二人しか残っておらず、後は全員戦線に出ていた。

カリカリカリカリ・・・

ひっきりなしにシャーペンを動かす瑞希。本来ならばAクラス相当の成績を持つ彼女は、当然答えを書くスピードは常人よりもはやい。

（い、猪俣君、すごいです・・・）

瑞希は手を動かしながら英才の方をみる。瑞希は自分の解く早さがある程度は自負している。しかし、英才はそれをはるかにうまわっていた。

英才は両手にシャーペンを持ち、左右の手は別々の問題の解答を記しているのだ。それだけではない。いくら瑞希は解答が早いといっても、シンキングタイムのために少し手を止める。しかし、英才にはそれが無い。故に瑞希の二倍、三倍以上のスピードがある。

（何でFクラスにいるんでしょうか？）

考えながらも問題を解いていった。

「あら？先生、もうテスト問題はないんですか？」

「まさか君がここまでやるなんて知りませんでしたからね。まあ、もう十分でしょう？」

さらに時間はたち下校時刻に。途中で須川の放送や明久の断末魔などがあつたのだが、集中しきっていた英才には全く聞こえていなかった。

「そうですかい。代表、補給終わったで。」

「姫路はあと少しのようだがいいか。あとは手筈通り頼むぞ。おつしゃ、皆！Dクラス代表の首級を獲りにいくぞ！」

『おうつ！』

坂本を先頭に教室にいたFクラス生徒が出て行く。

「あー、明久。船越先生が来たっていうのは嘘だ」
遠くから聞こえる雄二の声。

「逃がすか、雄二いつ！」

なぜか掃除用具いれから飛び出して来た明久。血走った目から殺意をだだ漏れにしながら走り去っていった。

（何があつたかは知らんが、早よ行かんとな）

「姫路、おわつたんか？」

「はい、採点もして貰いました」

「そんじゃ行こか」

英才は教室を出ようとする。

「あ、あの！猪俣君はどうしてFクラスに？」

先の疑問をぶつける瑞希。

「ん？ああ、まだ言うたらなかったか。振り分けテストの前日夜にAからFまで紙に書いてクジを作ったんや。それで、クジを引いた結果最初にFが出たからFクラスに行こうと思ってな。当日は解答は書いても名前は書かんかったんや。だから0点でFクラスや。」

「え！？」

瑞希は驚愕した。自分と同じように体調不良か何かだと予想をしていたのだが、英才の答えはその斜め上をいくものだった。

「どうしてそんなことを？」

「どんげでんええやろ。ほら、行くで」

「ま、待ってください！」

こうしてFクラス最強コンビは戦地に赴いた。

「雄二、どこだ！」

下校中の生徒の間を縫って走る明久。本来ならばDクラス代表を目指すしなければならぬのだが、彼だけはそのベクトルが違っていた。

「（見つけた！！）雄二、首を洗ってー」

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

雄二えものを視界に捉えた矢先に、Dクラス代表の本隊が現れた。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバーは囲まれている奴をたすけるんだ！」

『おおー！』

Dクラス代表平賀源二の号令で7人が援護に向かった。平賀源二の周りにいるのは10人。近衛部隊を除く7人は指示通り雄二の部隊を取り囲みに向かう

はずだった。

「お、ここにおったんか。向井先生、Fクラス猪俣がDクラス代表以外の10人に仕掛けますんで。試獣召喚サモン」

現れたのは右目に眼帯をした大男。全くやる気のなさそうに片手で肩を揉んでいた。

『は？な、なんだあの大男は！？』

『誰かは知らんがあわてるな！試獣召喚サモン！』

『そうだ、相手は1人なんだ！』

Dクラスの生徒達も召喚を始める。

「慌てるんじゃない！相手はFクラス！そしてあの装備からしてたいてい動けないハズだ。落ち着いて討ち取るんだ！」

平賀が激をとばす。平賀が言うように、英才の召喚獣の装備は変わっていた。ケモノ皮の羽織、そして手には武器ではなく手枷。手枷からのびる鎖の先には巨大な鉄球がついていた。

『Dクラス舐めんじゃねえぞ!!』

1人を先頭に一齐に英才の方に突っ込んで来た。

「・・・Dクラス代表。ええこと教えたるわ」
迫るDクラスにも動じず落ち着いて言う英才。

遅れて点数が表示される。

『Fクラス 猪俣英才 VS Dクラス ×10人
古典 985点 VS 平均92点』

「固定観念は視野を狭め、身を滅ぼすで？」

英才の召喚獣が腕を振るう。すると鉄球が勢いよく相手の軍団めがけて飛んでいく。

『な、なんだと!!』

『何であんなのがFクラスに!?!』

人海戦術で圧倒的勝利を確信し油断しきっていた10人は避けられず鉄球の餌食となった。

「!?!まずい、Dクラス、てった」

「あ、あの・・・」

撤退の号令を出そうとした平賀だったが、1人の少女が立ちはだかる。

「え？あ、姫路さん。悪いけど邪魔しないでくれるかな？Aクラスはこつちじゃないだろう？」

立ちはだかったのはピンクのロングヘア、学年トップクラスと名高い姫路瑞希。平賀は少し苛立っていた。

「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラスの姫路瑞希です。えつとよろしく願います」

「え？」

「その・・・Dクラス平賀君に現代国語を申し込みます」

「・・・は？」

「あの、えつと・・・さ、試験^{サモン}召喚です」

『Fクラス 姫路瑞希 VS Dクラス 平賀源二』

現代国語 339点 VS 129点『

「う、嘘だろ！？」

「こ、ごめんなさいっ」

瑞希の召喚獣が素早い動きで大剣を振るい、その一撃で平賀の召喚獣を両断した。

「だから言つたやろっが」

英才は呆れたように眺めていた。

Dクラス戦後

Dクラス代表平賀源二討死の一報は瞬く間に広まった。Fクラスからは勝利の雄叫び、Dクラスからは悲鳴があがる。

『すげえよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだ！』

『坂本雄二サマサマだな！』

『猪俣もだ！あいつらはすごい奴だったんだな！』

『姫路さん愛してます！』

Fクラスからはさらに歓喜の声。なぜかラブコールも含まれていたが。

（なんで奴らは平然と犯罪行為をやったのけるんや？）

包丁を持ち出した明久を制する雄二を見て思う英才。殺人未遂など余罪がたくさんある彼らだが、自覚はしていないらしい。

明久が生爪の危機を脱したのを見はからって英才は雄二に歩み寄る。
「代表」

「おう、猪俣か。今日は助かったぞ。後でDクラスと交渉するからお前も残ってくれ」

「いや、俺は帰るわ。どうせ設備交換なんでせんのやろ？面白くもないから先帰るわ」

「!?!?・・・まったく、どこまでみてやがるんだ？」

驚く雄二をよそに英才は教室に戻っていった。

「想像以上に酷い設備ね・・・」

「おお、優子か」

英才が教室から鞆をとって出て来ると、幼馴染で秀吉の双子の姉、木下優子がいた。顔を引きつらせているところを見ると、自分のAクラスとのあまりの差に驚いたようだ。

「んで？どうしたんや？」

「どうしたんや、じゃないでしょ！何で英はFクラスにいったのよ！！」

頬を膨らませ、廃屋、もといFクラス教室を指差す。

「何でって言われてんなあ・・・気まぐれ？」

「もう！英のバカ！」

優子はポカポカと英才の胸を叩く。

「まあまあ、俺ん気まぐれは今に始まったことやないやろ？今度何か奢ったるから」

笑ながらたしなめる英才。

「（えっ!?ま、まさかこれってデートのお誘い!?）べ、別にいいけど、そんなのじゃ許してあげないんだからね!？」

「はいはい。じゃ、帰るか」

「ま、待つて！」

優子は顔を赤くしながら英才の後について行った。

「姉上も素直じゃないのう」

戦争が終わって開放された秀吉は隠れてこのやり取りを見ていた。その顔はどこか嬉しそうだった。

Dクラス戦後（後書き）

やっと優子登場。

次回、姫路の弁当が登場しますが、はじめに言うておきます。姫路ファンのみなさん、ゴメンなさい。

FFF団登場（前書き）

やっぱ弁当騒動はもう一つ先にのびします。

FFF団登場

『これより異端審問会を開催する』

翌朝、英才は教室に入ると覆面を被った怪しげな集団に囲まれた。手にはカッターナイフなどの凶器を持ち、その全員が殺気立っていた。

「・・・秀吉、何やこれは？新興宗教か何かか？」

「ワシに聞かれてもの・・・」

秀吉は困ったような顔をする。

『見苦しいぞ猪俣！こいつの罪状を読み上げろ！！』

『はっ、須川会長！昨日夕刻、被告人猪俣英才（以下甲とする）はAクラスの木下優子と不順異性交遊に及び』

『ご託はいらん。結論を述べる』

『はっ！木下姉妹を独り占めなど、羨ましいこと山の如しであります！！』

『うむ、分かりやすくて宜しい。被告人、判決の前に言い残すことはあるか？』

「ワシは男じゃ！！」

「まあ落ち着いや秀吉。要するにこいつらは嫉妬にまみれた彼女いない歴〃年齢の負け犬集団なんや」

英才は余裕をみせる。

『なんだと！？諸君、ここに被告人の死刑が確定した！！異端者には？』

『『死の鉄槌を！！』』

FFF団団長、須川の号令で団員が一斉に襲いかかる。

『死ねえ！！』

『独り身の辛さ、思い知らせてやる！！』

『羨ましいぞ！ちくしょう！！』

それぞれが手にした凶器と目をギラつかせながら英才めがけて突撃

して来た。

「あらら、明確な殺意が認識できるうえに、素手に対して凶器の使用かい。なら、何されてん文句は言えんよな？」

英才は鞆をおろすと指をゴキゴキと鳴らし始める。

「秀吉、代表。万が一んときや証言頼むで？」

そう言うのと軍団めがけて突っ込んでいく英才。

「うむ、任せるのじゃ！」

「なあ、秀吉。いくらなんでもこの人数は」

「雄二よ、見ておればお主も分かる」

英才はまず1人の両脚をとりそのまま脇に抱えジャイアントスイング。この攻撃で15人を巻き込み鎮圧。さらに後ろから襲いかかって来た横溝をベリートウーベリーの要領で投げさらに6人を巻き込む。

・
・
・
・
・

数分後、英才の前に立っていたのは1人だけだった。

「くつ、猪俣君がこれほどとは！！」

「その声は吉井け？降伏するんか？」

「黙れリア充！！貴様は雄二よりも先に抹殺してやる！！」

カッターナイフを構え直して再度突撃をする明久。

「降伏勧告を無視か。馬鹿やのう」

英才は呆れながらもカッターナイフの突きを交わし明久の背後にまわる。そしてそのまま明久の腰に手をまわす。

「な！？ま、まさか！！」

「大丈夫や、死にやあせんよ」

そのまま明久を持ち上げ背後に叩きつける。そのジャーマンスープ

レックスは美しいアーチを描いていた。

「なんや、もう終わりかい」

英才は明久を解放すると首を鳴らしながら秀吉と雄二の方に歩み寄る。

「お疲れ様なのじゃ、英才！」

秀吉は幼馴染の活躍ぶりに目を輝かせる。

「お前、喧嘩強いんだな」

「こいつらが無傷で片付けるなんて・・・」

「勉強だけじゃないんですね・・・」

秀吉とは対照的に顔を引きつらせ苦笑いをする雄二、瑞希、美波だった。

食材への冒流（前書き）

弁当騒動。

姫路ファンの皆さん、すみません

食材への冒瀆

「うう・・・鉄人の拳より痛いよ」

英才のジャーマンスープレックスから復活した明久。痛そうに背中をさすっている。

「これは正当防衛や。本来やったら警察に突き出すところなんや。それぐらいで済んだことを感謝しいや」

「くっ！！何も言い返せない！」

明久は悔しさに唇を噛みしめる。

「よ、吉井、大丈夫？」

「明久君・・・」

心配そうに歩み寄る美波と瑞希。

「あはは、なんとかね」

「そう、ならよかった。吉井、歯を食いしばりなさい！！」

「ごぶああ！！」

表情を一変させ、般若のような顔で明久にストレートを放つ美波。

「し、島田さんっ！何をっ！」

「何って、まさか忘れたとは言わせないわよ！！アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね！！おかげで彼女にたくない女子ランキングに上がったちゃったじゃない！」

「いや、普通こんな暴力的な女なんざ彼女にしたくないやろ。器物損壊があるうがなかるうが、吉井に暴力振るつとるところ見りや

そんなランキングにランクインすんのは時間の問題やったんとちゃうか？」

すごい剣幕でまくしたてる美波を見て呆れたように言う英才。そのまま自分の席に向かって行った。

「な、何よ猪俣！ウチに喧嘩売ってるの！？」

標的を英才に切り替えて後を追う美波。

「た、助かった・・・」

「明久、安心するのはまだ早いぞ」

安堵する明久の肩にポンと手を置く雄二。

「え？」

「一時間目の数学のテストの監督は船越先生だ」

爽やかな笑みをうかべ言い放つ雄二。それを聞いた瞬間、明久は廊下を疾駆していた。

「うあー・・・づがれだー」

四科目のテストが終わり昼休み。船越先生への対応で余計に疲れた明久は机に突っ伏していた。

「うむ、疲れたのう」

「・・・（コクコク）」

同意する秀吉と庚太。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼とチャーハンとカレーにすつかな」

一方で元気な雄二。^{ゴリラ}

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「・・・（コクコク）」

「じゃ、僕もきょうは贅沢にソルトウォーターあたりを」

「あ、あの。皆さん・・・」

一行が学食に行こうとしたところを呼び止める瑞希。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お昼前なんですけど、その、昨日の約束の……」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

身体の後ろに隠していたバッグを出す瑞希。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？よかつたあゝ」

胸を撫で下ろして喜ぶ瑞希。

「むー……。瑞希って、意外と積極的なのね……」

瑞希と対照的に明久を睨みつける島田。

「あ、猪俣君もどうです？」

瑞希は振り返って目で英才に尋ねる。英才は愛用のアイマスクを付けて眠ろうとしていた。

「悪いけん、俺は遠慮す」

「英才も来るのじゃ」

「じゃあない、好意に甘えるわ」

「猪俣君って、秀吉には甘いんだね」

英才の手のひら返しに苦笑いする明久。美波は朝のことを思い出したのか、英才を明久以上に睨みつけていた。

ジュースを買いに行った雄二と美波を除く一行は屋上にあがった。姫路が持ってきたビニールシートに座り、弁当を心待ちにしていた。「あの、あんまり自信がないんですけど・・・」

瑞希は恥ずかしそうに重箱の蓋を明けた。

『おおっ！』

英才以外から歓声があがる。中にはおにぎり、エビフライ、から揚げ、肉じゃがなどか詰められており、育ち盛りの面々にとってまさにご馳走だった。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先にー」

「・・・（ヒョイ）」

「あ、ずるいぞムツツリーニっ」

庚太がフライングしてエビフライを口に運んだ。

「・・・（パクっ）」

ボタン

ガタガタガタ

口にした瞬間、倒れて小刻みに震え出す庚太。

「・・・」

秀吉と明久は啞然とし顔を見合わせる。

「つ、土屋君!？」

庚太の様子に慌てる瑞希。

「……………(グツ)」

しかし、庚太は何事もなかったかのように立ち上がり、瑞希に親指を立てて見せる。ただ、膝はまだガクガクと震えていたが。

「あ、お口に合いましたか？良かったらどんどん食べてくださいね」
天然なのかまったく気づかない瑞希。天使のような微笑みが明久たちには悪魔の嘲笑に見えたのは言うまでもない。

昭久と秀吉が策を練っていた時だった。

「なあ、姫路。さっきのエビフライに何か隠し味入れたん？」

ここでもうやく口を開いた英才。だが、顔は笑っていたが目はそうでなかった。

「はいっ！塩酸を少々」

「ほ、こん肉じゃがは？」

「たしか、酢酸を」

問答で次々と出てくる劇薬の数々。調味料とはほど遠いものだった。明久と秀吉は笑顔を強張らせながらフロアの仕方を考えていた。
だが――

「ふざけとんのかおどれはああああ！！！」

いつも眠たそうに半開きにしている目を身ひらき、立ち上がって怒鳴る英才。

（ビクッ！！）

あまりの迫力に飛び上がる瑞希、明久、秀吉、庚太。

「料理ん調味料に薬品やと！？自分、頭おかしいんと違うか！？好きな奴ん為何か知らんが、くだらん欲と自己満足のために食いもんで遊びやがつて！！」

怒鳴り続ける英才。瑞希の目には涙が溜まって行く。

「料理が美味い不味の次元やない！！別に不味いだけなら何も言わん！それはその人にしかだせん味わいや！！じゃけん、お前はどうや！？・・・してお前、肉や野菜の生産がどんなに大変か知らんやろ？最近じゃ価格の安い大量に輸入される食材に対抗するために、どうしても質を高めて対抗せんといかん！！せやから余計に手間暇かけるんや！朝はよから晩まで働いて、ほとんど休みなしや！畜産や栽培を兼業しとるんならなおさらや！！お前はそんな血と汗の結晶を土足で踏みにじったんやぞ！！」

「うう・・・」

ついに瑞希は泣き出した。

「い、猪俣君！そんな酷いことを」

「なんや、吉井！！俺が悪い言うんか！？じゃったらこん毒物を保健所みてえな第三者機関に持ち込んでみるか！？最悪こん女は逮捕やぞ！！」

明久の反論は許さんと言わんばかりに睨みつける英才。

「おい、買ってき・・・何があつた!？」

「ちよつ!! 瑞希! どうしたの!？」

買い出しから戻った雄二と美波は、瑞希が泣き英才が鬼のような表情でいるのを見て驚く。

「猪俣!! アンタがなかせたのね!? 女の子を泣かせるなんて最低よ!!」

「島田、俺が最低や言っんならこいつん弁当食ってみいや!」

「だ、だめだよ!! そんなことさせたら死んじゃ・・・あ!」

しまった! という風に口を押さえる明久。だが、時すでにおそし。

「あ、明久君まで・・・」

さらに涙を流す瑞希。横で慌てふためく明久。

「これが事実や!!」

英才は瑞希を一瞥すると階段へと向かう。

「代表、気が変わったわ。次ん戦争は俺は出らん!!」

「なっ!! おい、待て猪俣!!」

英才は雄二の静止を無視して階段を降りて行った。

食材への冒流（後書き）

自分は親の実家が農家です。農家の苦勞も知っていますし、祖父から荒地を借りて鍬やシャベルを使って畑を作り野菜を栽培したこともあります。ですから原作を読んでいてもゆるせなかつたんです。ファンの皆さん、本当にすいません。

昼行灯去りて

「そうだったのか・・・」

昼行灯ひらこが屋上から姿を消してから10分後、明久や秀吉、そして被害者である庚太の話を聞いて雄二はようやく理解した。だが、瑞希は未だに泣き止まない。

「だが、冷静そうなあいつがあんな顔をするとはな」

「・・・鬼がいた」

「僕も睨まれたときは怖くてたまらなかったよ」

「でも瑞希を泣かせるくらい怒らなくてもいいでしょ！？女の子が一生懸命作ったのよ！ホント最低よ！！」

美波は瑞希の背を優しくさすりながら英才の行いを非難する。

「でも、ワシは英才の言い分は間違っておらんと思うのじゃ」

「？何か知ってるの？秀吉」

「ぐすつ・・・き、木下君まで・・・」

秀吉の言葉に反応する瑞希。同時に美波が秀吉を睨みつける。

「昨日も少し言ったと思うのじゃが、英才は事情があつて宮崎の田舎で暮らしていたことがあつてのう。そこで農家の手伝いをして牛を飼育したり、野菜や米を作っておつたのじゃ。収穫の時期になるとワシの家にダンボールいっぱい野菜を送って来るくらい熱心じやったわい。おそらく、英才はそこで食について学んだのじゃろう。姫路よ、あやつはああ言つておつたが、お主の全てを心から否定したわけじゃないのじゃ」

姫路に秀吉は語りかけた。

「そ、そうだよ姫路さん！それに、僕はこう見えて料理が得意だからさ、いつか教えてあげるよ！だからさ、元気をだしてよ、ね？」

「ほ、ホントですか吉井君！！」

明久の申し出に泣き止み表情を明るくする瑞希。

「（ぬ、抜け駆けわ許さないわよ！）じ、じゃあ、吉井！そのとき

はウチにも教えてよね？」

「わ、分かったから腕を捻りあげるのはやめてええええ!!」

「…………許すまじ」

「庚太、異端審問会ヘリークだ」

「まったく……お主らは。」

重い空気はいつのまにか消え去り、いつも通りに戻っていた。

「ところでさあ、雄二。次の戦争、猪俣君がいなくて大丈夫なの？」

「英才は頑固じゃからのう。啖呵をきった以上、撤回することはま
ずないじゃろう」

美波から解放された明久と秀吉は次の戦争を危惧する。

「その心配はない。昼行灯がFクラスにいるということは他のクラ
スにも広まったからな。それだけでも牽制になる。それにまだ姫路
がいるんだ。火力はまだある」

「はいっ！がんばります！」

活躍で汚名返上を決めたのか瑞希には気合いがみなぎっている。

「あんな奴いなくなつて大丈夫よ。」

「ところで、次はBクラスを攻めるんだつたよね？」

「ああ、作戦はだなー」

雄二は八重歯を見せ笑みを浮かべると説明を始めた。

任命

「で？何の用ですか先生方？バカ共と違って俺はなんもしとらんと
思っんですがね」

英才は屋上から降りて教室に戻ろうとしていたのだが、出くわした
鉄人に呼び止められしびしび学園長室に連れてこられた。いかにも
だるそうに首をもみながら話す英才だった。

「猪俣君、今回はそのような件ではありません」

「何、悪い話じゃない。心配はいらん」

同室しているのは英才を連れて来た補習担当教師西村宗一と学年主
任にしてAクラス担任高橋洋子。そして、
アイアンマン

「まあ、黙って聞きなでかじやり。」

口を開いたのは学園長藤堂力オル。文月学園のトップにして試験召
喚システムの研究者でもあり、一部の生徒からは妖怪などとも言わ
れている。

「ならばよしてくださいや。俺の貴重な睡眠時間が無くなるでしよ
うが」

「はあ・・・変わらないねあんたは。今日来てもらったのはこれ
のためだよ」

ため息混じりに一枚の紙を差し出す。

『21F猪俣英才を特別講師に任命する。』

学園長

藤堂力オル』

「は？」

内容を見て呆気にとられる英才。

「何です？特別講師って？」

「特別講師とは簡単に言えば我々教師の代理のようなものだ。昨日、お前たちはDクラスに戦争を仕掛けただろう？その戦争の間は教師も駆り出されてしまったために戦争に関係ないクラスの授業は自習にしなければならぬ。」

「それならそれでいいでしょうに」

「そうはいかん。実は昨日の自習の際に、Aクラスを中心に苦情が出てな。授業をして欲しいとの要望が多数寄せられた」

「はあ・・・Fクラスとは大違いやなあ」

Aクラスの優等生ぶりにおもわずFクラスと比較をしてしまう英才。

「で？俺に授業をしろと？」

「そうさね。昼行灯の伝説は有名だね。あんたならできるはずさね。それにこれだよ」

そう言つて力オルは紙束を取り出した。

「それは？」

「猪俣君が午前中に受けたテストです。採点も済ませてあります。」

「文系四科目だけで学年首席（霧島翔子）の総合点を上回るなど教師でもできん」

「ま、別にやってもいいんですけどね、俺にメリットが無いやないですか」

「そのことなら心配いらないよ。あんたにも、教師と同じ権限をやるつもりさね」

「つまり、フィールドの展開とか？」

「そうさね。あんたの点数なら全科目展開できるようにできるよ」

「……ええでしょう。そんな話乗りますわ。でん、物理干渉はOFFにしてください。俺ん武器じゃ学校が大変なことになりますよ」

「わかったよ」

「しっかしねえ、ホントにええんですか？」

「その心配はいらんぞ。これはもう職員会議で満場一致で決まったことだ」

「さいですか……じゃ、これで失礼しますよ？」

英才は学園長室を後にした。

Bクラス戦へ（前書き）

短いです

Bクラス戦へ

「さて皆、総合科目テストごろうだった」

翌日、残りのテストを終えると雄二は教壇に立ってねぎらいの言葉をかける。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

『こつちには姫路さん、そして特別講師がいるんだ！』

Fクラスの士気は上がっていた。それには英才が特別講師に任命され、その内容も一緒に学年中に公表されたことも一因している。

猪俣英才という名前がでると、雄二は少し顔をしかめた。

「勝手に頭数に入れんなや。俺はこん戦争にや出らん。お前らだけで勝てや。文句言われてん代表にはもう話してあるんや」

英才は昨日の昼休みを思い出したのか瑞希の方を横目で見ながら反論する。

『な、なんだと！？』

『ふざけるな！逃げんじゃねえぞ腰抜け野郎！！』

英才に降りかかるブーイング。

「どんげでん曲解されてん構わん。俺抜きで勝てんかったらお前らがただのバカやったってことや。それがいやなら勝てや」

そう言うた英才は筆記用具と教科書数冊を持って教室を出た。

『おい、坂本！！どうなってるんだ！！』

『これで勝てるのか！？』

『ヤツを連れ戻せ！！』

英才が出て行きさらに抗議の声が上がる。

「ま、待て！！それよりもだ、皆！猪俣英才は異端者だ！！昨日、

姫路を泣かせただけではなく、姫路がせっかく作った弁当を足蹴にしたんだ!!」

『『『『なんだとおおお!!!!』』』』』

雄二の言葉で士気が一気に上昇した。

「いますぐにでも殺りに行きたいところだが、俺たちはこれから戦争だ!まずは目の前のBクラスを倒し、そしてその後で乙女の純情を踏みにじった男の風上にもおけないS級異端者猪俣英才を処刑するんだ!!」

『おうよ!!!!』

『Bクラスも異端者も殺せー!!!!』

『姫路さん!ラー!ーブ!!!!』

雄二の扇動で昨日の事情を知る者以外が瞬時に覆面姿になった。

「雄二、後で猪俣君に殺されないかな?」

「一応、ヤツは英才に助けられた身なのじゃがのう。恩を仇で返すとは」

「……猪俣英才は命の恩人」

「別にいい気味じゃない!ね、瑞希」

「え、ええーつと……」

殺気に満ちたFクラスとBクラスとの戦争が始まろうとしていた。

特別講師

「それでは皆さん、臨時のHRを始めます」

最新の電子黒板の前に立っているのはクールビューティー、才女として名高いAクラス担任高橋洋子。召喚獣の操作にも長けている学年主任である。

「これから私たち教師は、BクラスとFクラスの試召戦争に立ち会わなければなりません。皆さんには前回同様、自習をしてもらう予定だったのですが、今回から特別講師の方に授業をしていただくことになりました。」

Fクラスならば様々な野次がとんだだろうが、流石Aクラス。皆話を聞こうと静かにしている。

（ま、まさか！あれって嘘じゃなかったのね！？）

ただ、木下優子はどこか落ち着きがなかったが。

「それでは紹介します。特別講師、2年Fクラスの猪俣英才君です」
ガラッとドアを開けて登場したのは優子の幼馴染。相変わらずやる気のなさそうな眼帯大男である。

「えー、ご紹介いただきました、Fクラス猪俣英才です。今日からちよくちよく自習時間に授業をすることになりました。よろしくお願いします」

ぎこちない敬語で自己紹介を終える。

（ひ、英が先生・・・）

優子は英才から視線を外し恥ずかしそうに下を向く。

「ねえねえ、優子！」

そんな優子を見て隣りの工藤愛子が話しかけてくる。緑色のショー

トヘアーでボーイツシュな少女である。

「さつきから顔が赤いよ？」

「な、何でもないからっ」

「もう、正直に言いなよ！猪俣君が気になるんでしょ？」

得意げな笑みを浮かべる愛子。

「そ、そんなんじゃないわ！ただの幼馴染よ！！」

「あれえ？ただの幼馴染相手に顔を赤らめるわけないよね。もしかして・・・恋人？ボクにも紹介してよ」

「な！こ、恋人何かじゃ！」

優子は否定をするもさらに顔を赤らめる。

「静かにしてください。それでは、猪俣君にー」

「先生、よろしいでしょうか？」

「久保君、何でしょうか？」

拳手と共に起立したのは学年次席久保利光。片手でメガネをくりあげている。

「彼は、猪俣君はFクラスですよ？こんなこと言いたくはないんですが、彼にAクラスの僕達に教えることができるとは思えないのですか？」

再びメガネをくりあげる利光。聞きようによつては無礼な質問であるが、実力主義の文月学園では当然のことである。AクラスとFクラスの差は歴然。Aクラスのほとんどが抱いた疑問だった。

「久保君、彼はー」

「要するに久保、俺がお前よりバカやと、そこでそんなヤツに教えなど請うことはない、せやったら自習した方が有意義やって言いたいんやろ？」

高橋先生を遮り、最前列に座る利光の前に異動する利光。

「まあ、当然の言い分や。バカに教わるこつあないやろな。」

英才は首をコキコキと鳴らす。

「英語フィールド展開、試験^{サモン}召喚」

英才の周囲に英語フィールドが展開され、さらに召喚獣が召喚され

る。

「な、何がしたいんだい!？」

「まあ、あれや。論より証拠、百聞は一見に如かず。話すより早い
つちゅうこつちやが」

『Fクラス

猪俣英才

英語 1238点』

『『『『ええええええ!!!!』』』』

英才の点数が表示されると、Aクラスからは驚きの声。高橋先生、
優子、霧島翔子は驚いたようすなかったが。

「久保君、もういいでしょうか?彼は文系科目は四桁、理系科目で
は最低でも700点台
の成績です」

「は、はあ・・・」

ポカンとした表情のらま席に座る利光。いまだ信じられないとい
った顔をしている。

「それではみなさん、今日も一生懸命に取り組んでください。猪俣

君、あとをお願い

」

「ええ」

英才に任せると高橋先生は足早に教室を出ていった。立ち会いの依頼を受けていたのだろう。

「てな訳で、俺が授業すつことになってんで、始めまーす。一応、今日は時間割通りに数学、日本史、物理の順でやっていきますんでまあ、内容は自由らしいんでそこらへんは希望があれば合わせるんでいってください。じゃ、始めますか・・・」

特別講師としての仕事がスタートしたのだった。

爆弾発言

授業が進んでいくと、始めは英才の実力を疑う者も多かったが今ではすっかり聞き入っている。英才による丁寧でわかりやすい解説、テストの解き方のコツなどはAクラスの生徒たちには大変好評らしい。

昼行灯の伝説として、『伝説のアルバイト講師』と言うものがある。英才は高1の時に知り合いのついでで中学生むけの小さな塾のアルバイト講師をしたことがある。その塾には当時中学生3年生16人が在籍していたが、成績は学年で後ろから数える方が早い者ばかりだった。一向に伸びない成績に危機感を抱いた生徒達は大手の塾に移ることを考え始めていた。塾の主である老いた塾長は藁にもすがる思いだったのだろう。雇われた英才は半年間教鞭を振るった。その結果はすごいものだった。なんと、上位をその16人で独占、さらには全員が有名進学校に合格をきめたのだった。この話は全国に広まり、大手の塾がその秘密を探ろうと英才を血眼になって探しているらしい。

要するに、英才は教えるということについてはカリスマ的手腕を兼ね備えているのである。

「はい、じゃあ今日はこれまでや。戦争が終わらんようやったら明日も俺は来るけん、その時は皆に今日の三科目のテストを受けてもらおうと考える。何か質問ある人」

「先生、何でいきなりテストを？」

最初と打って変わってすっかり英才の手腕に魅せられた利光。彼を含め、Aクラス生徒の英才の認識は教師らしい。

「一応、教えたことが身についてるかの確認や。普通のテストと同じ扱いになるからそんなつもりで復習しときいや。他は？」

「はい、先生！」

拳手をしたのは愛子だった。

「木下優子さんとはどういう関係ですか？」

「な、何を聞いているのよ！！」

予想外の質問をする友人に慌てる優子。

「可愛い幼馴染や」

「え！？可愛いって・・・（恥ずかしいけど、嬉しい・・・）」

さらりとなんの躊躇なく答えた英才。優子はまた顔を赤くし、愛子は予想以上の回答が得られて満足そうにしている。

『猪俣先生って木下さんのことが・・・』

『見る！木下さんの顔が真っ赤だぞ』

『そういえば猪俣先生って渋くてけっこうカッコ良くない？木下さんが惚れるのも分かる気がするなあ』

「ち、ちよつと！別にあたしは」

「はい、じゃあかいさーん」

必死になっている優子に対し、英才は先程の爆弾発言がなかったかのように教室を出ていった。

「優子お、よかったじゃない、可愛いだってさ！」

「・・・優子、猪俣とお似合いだと思う。羨ましい」

「もう！愛子！代表まで！」

優子の周りに女子達が集まって来る。

この後、高橋先生が来るまで質問攻めにあつた優子だった。

救出

「あら？秀吉、他ん連中はどうしたん？」

授業の報告を各教科担任と高橋先生に報告し終わった英才はFクラスに戻って来た。しかし、秀吉しか残っていなかった。

「おお、帰ったか英才よ。雄二が明久と姫路とムッツリー二を連れてCクラスと不可侵条約を結びに行つてのう。ワシは留守番と言うわけじゃ」

「先生から聞いたんやけど、Bクラスとの協定もあるんやろ？こんままやつたらBクラスにつけ込まれるんがオチやぞ」

「！？ならマズイのじゃ！！今攻められたら雄二達はひとたまりもないぞい！！」

「あらら、冷静に考えてみりや分かるこつや。これで、卓袱台とは別の意味でオサラバやな」

「ひ、英才よ！！ワシは明日の作戦のためにここから動くことができないのじゃ！！頼む、ワシの代わりに救出に行つて欲しいのじゃ！！」

「めんど・・・・まあええわ。借りでん作つときゃあ損はないじやろ」

上目遣いで頼む秀吉にあつさり落とされる英才だった。

「吉井、どうするのよ!」

「どうするって言われてもどうしよう!」

「いいから何か考えなさい!」

雄二たちが逃げるために殿しんがりを買って出た明久と美波は万策尽きたといった感じに追い詰められていた。怒鳴りあうかのように会話しているところから相当切羽詰まっていることがわかる。

怒鳴り合ったり、明久が美波の拳を避けたりしているうちに、とうとう行き止まりとなってしまった。

「ちよろちよろ逃げ回りやがって。疲れるだろうが!」

「というか、別にこいつらを追いかける必要はなかったんじゃないか?」

「仕方ないだろ!こいつらのジョークに付き合っているうちに坂本たちににげられちまったんだから」

「さつさと片付けて帰らない?」

明久たちを追い詰めて余裕で勝てると確信したのか、やる気なさそうに言う。

「あ、おつたおつた」

いや、もつとやる気のなさそうな男が現れた。

「あー、いくら秀吉ん頼み言ってん、暴力女を助けるなんて不本意やなあ」

英才はため息をつく。

「い、猪俣!誰が暴力女ですって!」

「島田さん!落ち着いて!」

飛びかかるうとする美波を羽交い締めにして抑える明久。

「眼帯の大男って・・・まさか昼行灯か!」

「なに！？この戦争には参戦していないはずじゃ！？」

四人は英才の登場に余裕をなくす。

「今は一応戦争の時間外や。別に好きで来たんじゃない。そんなじゃ、

長谷川先生、Fクラス猪俣がこいつらに仕掛けますんで。試験召喚^{サモン}」

「……試験召喚」……

英才が召喚すると四人も召喚する。

『Fクラス 猪俣英才 VS Bクラス×4人
数学 894点 VS 平均158点』

「お、遣唐使廃止やん」

「な、何だこの点数は！？」

「噂以上じゃないか！！」

「教師である私よりも高いなんて……」

英才の点数に狼狽する四人と肩を落とす長谷川先生。

「な、何なのよ、このふざけた点数は！？ウチより高いじゃない！！」

「先生よりも高いなんて……（あの点数で攻撃を受けたら）」

数学の実力を自負している美波は顔を引きつらせ、明久はフィードバックのことを考え英才が味方でよかったと痛感していた。

「じゃ、終わらせよか」

英才の召喚獣が横一列に並ぶ四人の召喚めがけて右側から鉄球を飛

ばす。

「うおっ!!」

「しまった!!」

「あぶねえ!!」

「きゃっ!!」

二体は鉄球の餌食の餌食となり、もう二体は間一髪で回避した。

「ちっ!よくも!!」

まだ英才の召喚獣が攻撃の後で動けないでいるわずかな隙を狙って二体が突っ込んで来る。

「あゝあ。見事にエサに引っかかるだけじゃのうて、突っ込むだけたあ、バカとしか言えんねえ」

英才の言葉の直後、英才の召喚獣が鎖を思いっきり引っ張る。すると鉄球が勢いよく戻りだし、二体の召喚獣を轢き殺した。

「はい終了」

「まさか・・・四人ともやられるなんて・・・」

「こいつが戦争に出ていたら・・・」

英才に圧倒されその場にヘタレこむ四人。

「戦死者は補習!!」

どこからともなく現れた西村先生^{てつじん}が四人を抱える上げる。

「て、鉄人!?!、いやだ!補習はいやだ!!」

「は、離せええ!!」

「あれは反則だろ!!」

「黙れ負け犬どもが!!悔しかったらあいつ以上の点を取るんだ!!」

「無理に決まってるじゃない!!」

四人は抗議むなしく補習室^{プリズン}へと連行されて行った。

「さて、帰るかねえ」

「猪俣!待ちなさい!!」

「あん？」

「アンタ、さっきはウチのことをよくも暴力女だなんて言ったわね！！」

英才が帰ろうとすると美波が呼び止め身長差をもろともせずに胸倉をつかむ。

「なんや、事実やろ？現在進行形で暴力ふるつとるやないかい」

「・・・アンタとは決着を付けなければならぬみたいね！」

美波の締め付ける手が力を増して行く。

「ちよつと！島田さん落ち着いて！猪俣君のおかげで助かったんだからさ！」

明久が止めようとするも美波は止まらない。

「あんなあ、こんなことしとつたらまた」

『おい！見るよ！あの女、猪俣先生を殴ろうとしているぞ！！』

『あの子知ってるわ、たしかFクラスの島田美波さんよ！！先生に酷いことするなんてゆるせないわ！！』

『よし、ヤツの彼女にしたい女子ランキングの順位をあげてやるうぜ！！』

「彼女にしたい女子ランキングの順位が上がるで、言お思ったんやけど遅かったようやなあ」

遠くから見ていたAクラスの生徒たちが美波の行いを非難し、ランキングの順位を上げに動いた。

「！！あ、アンタのせいよつ！！どうしてくれるのよ！？」

「つたく、ウザいやつちゃ」

英才は美波の手を振りほどく。

「身から出た錆うちう言葉知つとるか？自分の行いは自分に返ってくるんや。俺を責めるんはスジ違いや」

そう言つと英才は帰りだした。

「それじゃまるでウチが悪いみたいじゃない！！」

額に青筋をうかべ、再度英才に掴みかかるつとする美波。

「だ、だから落ち着いてよ！」

「離しなさい吉井!!」

美波と明久がもみ合っているのを気にすることなく英才は去って行った。

戦争回避

翌朝、英才は自身が所属するFクラスではなくAクラスにいた。FクラスとBクラスの戦争に決着がつかなかったために、予告通りテストをすることになり、その準備をしていた。

『先生、分からないところがあるんですけど』

『この問題の解き方なんですけど・・・』

『ねえ、誰にも言わないからさあ、猪俣君って優子のこと好きなの？ボクに教えてよ！』

準備をしながらも英才は質問攻めにあっていた。約一名、目的が違っていたが。

「優子？ああ、それはだなー」

「ストーリーップ！！愛子！！いい加減にしなさい！！英、真面目に答えなくてもいいの！！」

「もう、つれないなあ。でも、ホントは聞きたかったんでしょ？」
止めに入った優子を見て愛子はニヤニヤしている。そんなやり取りをよそに英才は質問に答えていった。

「失礼するわ！！」

バンツと乱暴にドアが開けられ、皆の注目が英才からドアを開けた人物に集まる。

「Cクラス代表の小山友香よ！木下優子、さつきはよくも豚呼ばわりしてくれたわね！？」

優子を睨みながら指差す友香。

「え？あたしは学校に来てからずっと教室にいたんだけど？」

「見苦しいわよ！！シラをきつても無駄よ！！」

「うるさい女やなあ。どこぞの暴力女とええ勝負やで」

英才は友香の前に出た。

「だ、誰よあなた！？」

大男に気圧されたのか友香は少しひるんだ。

「Fクラスの猪俣や。今なら許したるから邪魔すんのやったら帰れや」

「なによ！！Fクラスの分際で指図しないで！！私たちCクラスはAクラスに戦争をー」

「世界史フィールド展開、Fクラス猪俣がCクラス代表小山・ヒステリー・友香に模擬の戦争を仕掛ける。試獣召喚^{サモン}」

友香を遮って英才が静かに宣言し、あたりには世界史フィールドが展開される。

「え？なによ！」

「テストせないかんのや。邪魔すんな言つたやろ。ほら、召喚しろや」

「だから何であなたが！」

「Cクラス代表小山友香、戦闘の意志なしとして戦死。戦争終了」
なぜ英才がフィールド展開でき、自分の邪魔をするのか腑に落ちない友香。英才は淡々と友香の戦死を宣言し、フィールドを閉じた。

「戦死者は補習っ！！」

「せ、先生！！なんで私が！？」

「模擬とは言え戦死は戦死だ！！放課後までたつぷりしごいてやる」
友香は突然現れた西村先生に引きずられドアの向こうに消えた。

「何だったのよ？」

「まあ、大方Fクラスん仕業やな。女装した秀吉が優子のふりをし

て何か言ったんやろ。それにのせられてAクラスに報復しよ思っ
んやろな」

「ひ、秀吉・・・あいつうゝ!!」

優子からドス黒いオーラが立ちこめ、周囲の生徒が後ずさる。

「・・・猪俣、ありがとう。戦争を回避できた」

オーラをものともせずAクラス代表霧島翔子が英才に礼を言う。

「俺かてせっかく作ったテストを無駄にしまうところやったん
や。悪いのはウチのクラスの連中なんやから礼には及ばんて」

英才は苦笑いしながら言う。

「おし、そろそろ時間や! 皆席つけや!」

こうして、雄二の思惑は外れAクラスとCクラスの戦争は起こらな
かったのだった。

Bクラス戦後

Aクラスのテストが終わり、採点をすませた英才は教科担任に報告と点数登録の申請をしに職員室に向かった。その道中、女装をした男子を目にしたが、あまりにも見苦しかったため見なかったことにした。

『『『異端者は死刑じゃあああ!!』』』』

用事を済ませて教室に戻るとFFF団が一斉に襲いかかって来た。

英才は冷静に集団にタックルをお見舞いし、暴徒たちをひるませた。

「戦争ん後や言うのにえらい元気やのう」

英才は荷物を置き、指を鳴らし始める。

「ああ、猪俣。てめえのせいで予定とは少し違ったがな。勝たせてもらったぜ」

「予定?・・・ああ、あのヒステリー女か。AクラスとCクラスの戦争を期待しとったようやな」

「お前がCクラス代表を補習室送りにしなければな!!FFF団、異端者を始末しろ!!」

雄二の号令で瞬時に覆面姿見になった団員たちが英才に向かう。

『よくも姫路さんを!!』

『貴様は男の風上にもおけん!!』

「いいか!?奴を囲め!人数を活かすんだ!!」

雄二の指揮で英才を取り囲むFFF団。

「焚き付けたんはこんゴリラか。・・・しゃあない、秀吉、言われんでも分かるな？」

「うむ」

英才は手始めにラリアットで集団に突っ込み2人を沈める。さらに突っ込んできた近藤を抱える上げ、5人の集団に投げつける。・・・

・

・

・

結局、数分後にはFFF団は全滅し、雄二のみとなった。

「くそっ！煽りに煽ったFFF団ならいけると思ってたんだが・・・」

「んで、どうする？降伏すつか？お山の大将」

「ケツ、冗談じゃねえ！うおおおらああ！！」

雄二は回し蹴りを放つも難なく避けられ逆に鳩尾に一撃もらう。そして雄二がひるんだ隙に英才が背後にまわり、雄二をジャーマンスープレックスのたいせいに捉える。

「まさか、明久がくらったやつか！？」

「いや、今回は特別仕様や」

英才は通常のジャーマンスープレックスと異なり、雄二を高く持ち上げる。そしてそのまま高角度で後ろに叩きつける。俗に言う、エベレストジャーマンスープレックスである。

「悪鬼羅刹も丸うなったんやなあ」

英才は気絶した雄二を開放すると秀吉のもとへ行った。

「英才、今日も見事だったのじゃ！」

前回同様、目を輝かせる秀吉。

「褒めてくれるんはいいんやけどな、秀吉。今日のこと、優子にばれとるで？」

「な、なぜじゃ！？」

「まあ、早めに謝っとくこっちゃな」

「・・・・・・・・英才、明久、ムツツリー二よ。ワシは今日までの命がもしれぬのじゃ・・・・・・・・」

顔を青ざめさせ膝をつく秀吉。

「まあ、生きろや。そういえば吉井、土屋。お前らは参加しとらんかったな？」

秀吉の背をかるく叩きながら尋ねる英才。

「弁当の件で僕とムツツリー二は助けられちゃったし、それに今日もね。プロレス技なんてもういやだし・・・・・・・・」

「・・・・・・・・（コクコク）」

苦笑いする明久に同意する庚太。明久はジャーマンスープレックスを味わい、庚太は姫路の弁当を思い出したのか少し震えていた。

「そうかい。ならええわ。俺は帰るで」

「――！英才、待つのじゃ――！ワシも一緒に帰るのじゃ――！」

優子を恐れて一人で帰るのを危険だと思ったのか、秀吉は英才について行った。

「お、抑えるんだ、ムツツリー二――！君だってまだ死にたくないだろ――！」

「・・・・・・・・明久だって」

クラスの一輪の花を独占する英才に嫉妬と殺意を抱きつつもなんとか堪えていた2人だった。

帰り道（前書き）

短いです

帰り道

英才と秀吉が校門を出ると待ち伏せていた優子が現れた。

「秀吉・・・Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

顔は笑顔だが禍々しくドス黒いオーラを纏っている優子。

「あ、姉上！！すまなかったのじゃ・・・ってどうしてワシの腕を掴む！？」

「アンタ、Ｃクラスでは好き勝手言ってくれたわね？おかげでこっちは大変だったんだからね！！」

「姉上！ホントにすまな・・・その関節はそっちには曲がらなっ・・・」

「ほお、尻拭きたいへんやったんやなあ」

英才は優子のサブミッションでダウンした秀吉をおぶりながら優子と歩いている。

「まったくよ！！代表とCクラスに言ってなんとか誤解は解いたけど」

「問題はヒステリー女か。まあ、そら俺んせいやわ。あん女を補習室に送ったんは俺やしなあ」

「別に英は悪くないわよ？Aクラスの皆だって『先生は自分たちを守ってくれたんだ』って言ってたし」

「なんか嬉しいわ」

英才は苦笑する。

「でん明日以降は流石に俺は庇えん。そっちで解決せんと」

「それなら明日、私と代表で小山さんと話をつける予定よ」

「そうか。上手くやりいゃ」

しばらく話していると木下家に到着した三人。秀吉が未だに蘇生しないため、リビングに寝かせておく。

「んじゃ、俺は変えるわ」

「ええ、今日はありがとう」

「どうってことないわ。でん、秀吉かて反省しとるんやからほどほどにして許したれや」

「・・・善処するわ」

「間長いな。じゃ、明日な」

「じゃあね、英」

英才を見送る優子。

（秀吉ったら、ずっと英におんぶだなんて！羨ましい！！）
弟に嫉妬の念を抱き再度ドス黒いオーラを出す優子だった。

「さて、具体的なやり方だが、一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」
「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうだったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで頼りきったやり方を作戦などと言うものか。俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある問題ができれば」

（なんや、ちったあ底が深い男やと思ったけん、ただの底抜けやつたか）

ここまで雄二の言葉を聞いた英才は雄二の思惑を理解した。先日の英才が作成した日本史のテストでサービス問題として出題していた大化の改新の年号を翔子だけが間違っていたこと、雄二がもとより一騎討ちではなく、複数対複数に持ち込むであろうこと、など、さまざまな要素から勝負の結果が見えてしまったのだった。

バンッ！！

英才はアイマスクを外し、卓袱台を叩いて立ち上がった。

「？なんの真似だ、猪俣」

「代表、俺は言つたよなあ、『大将が無能やと分かった時はべつやつて。まあ、少なくともここまではギリギリ及第点やったんや。でん、そんな粗末な策で台無しや。やっぱり詰めが甘いたあダメなやつちゃわ』」

「ああ！？何だと？」

「次んAクラス戦でも俺は猿山のゴリラ大将には従わん。人にこき使われ負け戦じゃ割に合わんのや」

英才は雄二を蔑んだ目で睨み、雄二も英才を睨みつけている。

「ま、待つてください、猪俣君！！どうしてそんなひどいことを言うんですか！？」

英才に瑞希が抗議する。

「なんか俺が悪いみたいない言い方やなあ？結果が目に見えとるから言うてんのや」

「じゃあ、なによ！！坂本が負けるって言うの！？」

瑞希に続く美波。

「またうるさいのが湧いてでよった。さっきから俺ん言っちよっこつ聞いとりゃ分かるやろうが。賭けてもええ。FクラスはAクラスには勝てん！！」

クラス全体を見渡して高らかに宣言する英才。クラスメートの多くが刺すような視線を英才に向けていた。

「上等だ！！その代わり、俺が勝ったら土下座でも何でもしろよ！？もちろん、俺が負ければ何でもしてやるさ！！」

「それでええわ。まあ、卓袱台ともオサラバなんは確実やがな」

「システムデスクになるんだ。当然だ」

「抜かせ。設備落ちに決まっとるやろうが」

メンチをきりあう二人。悪鬼羅刹と昼行灯の賭けがスタートしたのだった。

Aクラス戦前交渉

雄二、英才、庚太、明久、秀吉、瑞希の6人はAクラスに来ていた。道中、未だに英才と雄二はメンチをきりあっていたが。ともかく、最終決戦のための行使をするために赴いたのだって。

「一騎討ち？」

ネゴシエーター

Aクラスの交渉人は優子。優子のがすがたを現すと英才の後ろに秀吉は隠れた。関節技がよほど応えたらしい。

「ああ、Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申込む」

「却下よ。こちらは英に出て来られたらひとたまりもないわ。」

「大丈夫だ。昼行灯が出ることはない。ウチからは俺が出る」

何で、と言いたげに英才に目をやる優子。英才は雄二の言葉に頷いた。

「それでも何か勝算があるんでしょう？ じゃなきゃ一騎討ちなんて挑まないわよね」

「そうか・・・ところで、Bクラスとやり合う気はあるか？」

「Bクラスって、昨日きていたあの・・・」

「そう、あの変態クズ野郎がいるクラスだ。Bクラスとの戦争は和平交渉で終結したからな。Dクラスもな。」

「それって脅迫？」

「さあな」

優子はどうするべきか迷ったのか考えこむ。

「・・・受けてもいい」

そう答えたのは翔子。いきなり現れた彼女に雄二は少しおどろいたようだった。

「・・・その代わり条件がある。負けた方は勝った方の言うことを一つ何でも聞く」

「ちよつと待つて！そのままじゃ危険だから、代表同士一騎討ちじやなくてそれぞれのクラスから5人ずつ選んで、一騎討ちの団体戦にしましょう。教科の選択権はAクラスが2つでそっちが3つ。それでいいですね？代表。」

「・・・分かった」

「それで構わないぜ。で、どうする？すぐにでもやるか？」

「・・・じゃあ11時から」

「OK、いいだろう。みんな、戻るぞ！」

雄二は想定通りにことが進んだために得意げな顔で英才を見ていた。英才も予想はしていたので雄二とは逆につまらなさ過ぎて呆れたような顔をしていた。

VS Aクラス 1

「では、両名共準備は良いですか？」

一騎討ちの団体戦という変則ルールの戦争の立会人を務めるのはAクラス担任兼学年主任の高橋先生。

「ああ。」

「……問題ない」

会場であるAクラスには両クラスの全員がおり、それでもなお余る広さがあるため、Fクラスの生徒たちは改めて格差を実感していた。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

Aクラスからは優子が出るらしい。

「ワシがやろう」

対するFクラスは弟の秀吉。どうやら先日の汚名を返上したいらしい。

「秀吉、アンタじゃ話にならないわ。引っ込んでなさい！アタシが勝負したいのはー」

秀吉など眼中にないのか、言葉で一蹴する優子。その目はある人物をとらえていた。

「英！！勝負しなさい！！」

「あん？俺が？……まあ、ええやろ。俺は代表の指示には従わん言うただけやしな。自分から出るんは構わん」

「うう……理不尽なのじゃ……」

秀吉と入れ替わりに前に出る英才。

「！？おい、いきなり先生だぞ！！」

「ウソっ！？」

「木下さん！がんばれ！！」

「先生もがんばってくださいー！！」

Aクラスの生徒たちから、優子には応援の声が、英才には尊敬の眼

差し。敵も味方も関係ないようだった。

『死ねええ！猪俣！！』

『優子さーん、ラーリーブー！！』

『負ける負ける負ける負ける負ける負ける』

一方でFクラスの生徒たちからは、優子にはねちっこい眼差しとラブコールが、英才には罵声と侮蔑の眼差しが浴びせられる。

「ねえ、秀吉」

「なんじゃ、明久」

「猪俣君って、Aクラスの方がホームでFクラスがアウェーじゃない？」

「……（コクコク）」

「ヤツが信頼されてないだけだろ」

「その発端はお主じゃろう、雄二よ」

「んで？教科はどうするんか？俺は何でんええかい任せるわ」

「じゃあ……高橋先生、日本史フィールドをお願いします」

「承認します」

「おっ？ええんか？俺ん得意科目やぞ？」

「だからこそ意味があるのよ！！試獣召喚^{サモン}！！」

魔方阵から優子の召喚獣が召喚される。西洋風の鎧にランスといった装備である。

『Aクラス 木下優子
日本史 653点』

『『『『何iiiiiiiiつ!!』』』』

優子の店数が表示されるとFクラスから驚きの声があがる。教師並の点数などとは思ひもなかったのだろう。

『流石木下さん』

『先生の授業、一生懸命に聞いて勉強してたからな』
Fクラスとは対照的にAクラスは落ち着いていたが。

『採点したから知ったけん、あん授業でようここまで上げたなあ』

『先生が優秀だからよ』

『おっ、嬉しいねえ。じゃ、こっちも試験^{サモン}召喚』

少し笑いながら英才も召喚する。

『Fクラス 猪俣英才
日本史 2983点』

「おおー！！」

英才の点数が表示されると今度はAクラスから驚きの声があがる。

「やっぱり先生は違うなあ」

「俺たちもがんばらなきゃ」

「私もまた教えてもらいたいなあ」

優等生集団であるAクラスの学習意欲を掻き立てたようだった。

「おいおい……ウチにはあんなのがいたのかよ」

驚きのあまり言葉を失っていたFクラス。雄二がやっと口を開く。

「こないだの数学といい、馬鹿げた点数ね……」

「どうやってたらあんな点数が取れるんですようか……」

はあ、と溜息をつくFクラス女子二名。

「こっちからいくわよっ!!」

先に動いたのは優子だった。優子の召喚獣がランスを構えると腕輪が光だす。そしてランスを空中に向かって乱れ突きをする。すると、ランスの先から無数の衝撃波が弾丸のように飛び出し、英才の召喚獣へと飛んで行く。

「!!!!!!!まずい!!!!!!」

英才の召喚獣はとつさに鉄球の真後ろに隠れる。

『Fクラス 猪俣英才

日本史 2897点』

しかし、反応が遅れたためか衝撃波がかすって点数が削られた。

「なるほど。刺突を飛ばしたんか。めんどいなあ」

「まだよ!!!それだけ鉄球と密着していれば鎖を使つて振り回せないでしょう!!!」

優子の召喚獣は腕輪を使用しながら英才の召喚獣に近づいて行く。

「まあ確かにこんだけ鎖に余りがあつたら無理やわな。ええとこに目えつけたな。じゃけん、みくびんなや!!!」

「なっ!!!嘘でしょ!?!」

英才の召喚獣は目の前の鉄球に向かってドロップキックを当てる。すると勢いよく前方へ飛んでいき、優子の召喚獣に直撃した。

『Aクラス 木下優子
日本史 59点』

「い、一撃でこんなに!？」

「重量武器の利点はガード無視の圧倒的破壊力や。それに、俺ん点数やったらパワーが半端やないで」

間髪いれずに英才の召喚獣は素早く鉄球に近寄り再びドロップキックで飛ばす。まだ起き上がれないでいた優子の召喚獣を弾き飛ばした。

『Aクラス 木下優子
日本史 0点』

「勝者、Fクラス!」

高橋先生の宣言が響き渡った。

VS Aクラス2

自身の勝利を確信している雄二にとっては英才の参戦と勝利はうれしい誤算だった。しかし、同時に英才の真意がわからず戸惑いもしていた。

「猪俣、どういっつもりだ？」

「さあ。どういっつもりなんでしょうねえ」

「とぼけるな！現時点で不利なのはお前なんだぞ！」

「じゃったら言わんでんわかるやろ。俺が白星くれてやってん問題ないっちゅうこっちゃ。ゴリラにハンデ（バナナ）を恵んでやっただけや」

「ちっ！今に後悔させてやるからな」

英才が戻ると再び口論が始まる。勝ちはしたものの歓迎ムードではないようだった。

「お疲れ様、優子」

優子がAクラス陣営に戻ると、愛子が労いの言葉をかける。

「はあ・・・ごめんなさい、勝てなかったわ」

「木下さん、そんなに気にすることはないよ。猪俣先生が相手なら他の皆でも勝てないさ。」

愛子と続く利光。

「・・・英才以外に私たちが勝てばいい」

二人に翔子加わる。すると他の生徒も励ましあいの言葉をかけ始める。

「ありがとう、皆！次からお願いね」

団結を高めるAクラスだった。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスから出て来たのは佐藤美穂。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

突然の指名に驚く明久に自信たつぷりに言う雄二。

「ふう・・・やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いやつなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

Fクラスから疑問の声。

（茶番って気づけや）

英才は興味がなさそうに腕組みをしながら見ていた。

「あの、まだでしょうか？」

待ち兼ねた美穂が明久に早くするように促す。

「ふっ、佐藤さん、そう言っていていられるのも今のうちだよ！試獣召喚^{サモ}！」

「試獣召喚^{サモン}！」

『Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 佐藤美穂
物理 62点 VS 457点』

あっけなく一撃で葬り去られる明久の召喚獣。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、さらに殴るのは勘弁してー！！」

（あれで本当に好きとかよく言えんなあ）

「よし、勝負はここからだ」

「ちよっと待った雄二！アンタ僕をぜんぜん信頼していなかったでしょう！」

「信頼？何ソレ？くえんの？」

飄々と言っ
てのける雄二に明久は利き腕で殴りたそうにしていた。

V S Aクラス3

「では、三人目の方、どうぞ」

「・・・・・・（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

Fクラスからは庚太、Aクラスからは愛子が出てくる。

「1年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

高橋先生が庚太に尋ねる。

「・・・・・・保健体育」

保健体育とは、庚太の唯一にして最強の武器。総合点の80パーセントを占めるほどである。

「土屋君だっけ？ずいぶんと保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・キミとは違って、実技で、ね」

ニヤリと笑う愛子。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

あからさまに興奮度しているのが丸わかりだった明久が指名される。

「フツ。望むところー」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！！明久君には必要ありません！！」

（現時点でお前らにとにかく言う権利はないはずなんやけどな）

「島田に姫路、明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

雄二の言う通り、明久は涙目でうつむいていた。

「つれないなあ。じゃあ猪俣君は？・・あ、でもむしろ教わりたかな」

次のターゲットは英才。愛子はニヤニヤしている。

「英には必要ないわ!!」

「まだ何も言つとらんど、優子」

英才が答えるよりも早く、優子が叫ぶ。

「あ、ゴメンゴメン。優子も教わりたかったんだね？実技を」
今度は優子にニヤニヤした顔を向ける愛子。

「なっ・・・べ、別に・・・」

顔を真っ赤にして黙り込む優子。満更でもないようである。

『『『殺せえええ!』』』』

英才に数名のFFF団が飛びかかる。当然、次の瞬間には床に転がっていたが。

「そろそろ召喚を開始してください」

カオスになつてきた状況に溜息をつく高橋先生。

「はい。試験^{サモン}召喚つと」

「・・・試験^{サモン}召喚」

ようやく召喚する二人。庚太の召喚獣は忍び装束に小太刀の二刀流、愛子の召喚獣はセーラー服に巨大な斧となんとも猟奇的な姿だった。両者共に腕輪をつけている。

「実践派と理論派、どっちが強いかな勝負しようか」

愛子が庚太に艶っぽく笑いかけると同時に庚太の召喚獣の腕輪が光だす。

「・・・加速」

庚太がつぶやくと同時に召喚獣が超高速で愛子の召喚獣を切り裂いた

かのようにだった。

ガキイイイ！！

「！！？」

愛子の召喚獣は巨大な斧を盾代わりにして攻撃を防いでいた。

「ふう、危ない危ない、じゃあ、ボクも行くよ！！」

愛子の召喚獣の腕輪が光だし、斧に強力な電流が流れる。斧に小太刀をあてたままだった庚太の召喚獣は感電してその場に倒れる。

「・・・・しまった」

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

斧を振り下ろして庚太の召喚獣を両断した。

『Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋庚太
保健体育 649点 VS 0点』

「勝者、Aクラス！」

高橋先生が淡々と告げる。

「はあ、前の点数だったら負けてたかもね」
「・・・次は負けない」

二人にライバル関係が芽生えたようだった。

VS Aクラス4

「これで二対一です。次の方は？」

「あつ、は、はいっ。私ですっ」

慌ただしく出て来た瑞希。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから歩み出て来た利光。

「Fクラス代表の坂本君に提案がある」

利光が雄二の方に向き直る。

「なんだ？」

「僕たちAクラスはFクラスに降伏を勧告するよ。今なら来れから三ヶ月間、お互いを攻撃しないっていう条件でこの戦争を終わらせてあげるよ。これはAクラスの総意だ。君たちだって補習は受けたくないだろう？」

「はあ？そんなのこちらから願い下げだ。姫路が勝つんだし、俺も勝つんだ。みすみすシステムデスクを逃すような真似はしない」

利光の提案を一蹴する雄二。

「・・・交渉は決裂したようだね。僕たちだって先生のいるクラスの設備を落としたくなかったんだけどね。そちらがその気ならしょうがない」

「久保、気にせんでええ」

「そう言ってもらえると助かるよ。高橋先生、総合科目でお願いします」

「それで構いません」

なぜか利光は英才に気にしなくていいと言われると嬉しそうだったのだが、英才は気づかなかった。

「「サモン試獣召喚」」

利光は二つの大鎌を持った召喚獣を、瑞希は大剣を持った召喚獣を召喚する。

「はっ！墓穴を掘ったな久保利光！！てめえは姫路が棄権したから学年次席になれたのを忘れたのか？」

先ほどのFクラスを舐めた提案に気を悪くしていた雄二が叫ぶ。

「まったく・・・君はいつの話をしているんだい？」

『Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	5731点	V S	4409点	』

利光の召喚獣が素早く瑞希の召喚獣の首を薙ぎ、瞬時に勝負がついた。

「え！？」

呆氣にとられる瑞希。

「坂本君、僕が姫路さんに劣っていたのは事実だ。認めるよ。でも、僕たちAクラスは君たちFクラスとは違う。猪俣先生から教えてもらった教科の勉強方法、テストの解き方をヒントに他の教科も勉強してテストを受けたんだ。君たちがAクラス戦に向けて補給している間にね。まさかこれほどまで効果があるとは思わなかったけど。それに、君は今朝の木下さんが言ったのを聞いてなかったのかい？彼女は『英に出られたらひとたまりもない』と言ったんだ。その言葉通り、僕たちが、警戒していたのは猪俣先生だけであって君や土

屋君の保健体育や姫路さんなんて眼中に無かったんだ。Aクラスの全員が最低でも1000点以上伸ばしたんだ。Fクラスなんて敵じゃない。それに、勝敗が決まった今、君が霧島さんに用意した作戦も意味をなさない。だから降伏を勧めたんだ。残念だったね、坂本君？」

「くっ!!」

利光に返す言葉の無い雄二。他のFクラスの面々は自分たちの勝利の象徴だった姫路の敗北とFクラスの敗北にショックを受けたように黙り込んでいた。

「それでは、この戦争はAクラスの勝利で終結です！」

高橋先生の宣言がFクラスに現実を突きつけた。

V S Aクラス4（後書き）

たぶん、Aクラスの面々の点が原作と違うことに疑問を抱かれたことだと思います。しかし、優等生だったらやり方を教わったら自分たちで高めようとするんじゃないかと思ったんでこのようにしました。

ちなみに霧島翔子は6000オーバーという設定です。

V S Aクラス エクストラマッチ

「み、瑞希が負けて、ウチたちが負けるなんて・・・」

「いや、姫路どころかムツツリー二が保健体育で敗れるとはもう」

「・・・・・・面目ない」

がつくりと肩を落とす三人。やはり、（英才を除いて）最高戦力である瑞希、保健体育では敵なしと思っていた庚太が負けるとは思っていなかったようだった。

「さあて、代表、^{ヒュラ}何でん言うことを聞くんやったなあ」

利光に言い負かされた雄二にドヤ顔で近づく英才。

「いや・・・まだだ！俺は『俺が負けたら』と言ったはずだ！クラスは負けたが俺はまだ負けていない！！」

「・・・悪あがきやなあ。なら、代表戦でんやってみつか？霧島！ウチん代表が呼んどるで！」

英才は残りの一戦をやるうと言い出し、翔子を呼ぶ。

「どういいうつもりだ？」

「そこまで言うんやったら勝ってお前が正しいって証明しろや。世の中かてば官軍、負ければ賊軍や。さつき久保に言われたことが悔しかったら勝って名誉挽回せえや。」

ニヤリと雄二に笑いかける英才。

「・・・・・・何？」

「こいつが話があるらしいんや」

「・・・言ったのは俺だからな、乗ってやるさ！」

雄二は英才の提案に乗ることを決めた。

「翔子！俺と勝負だ！教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言で両陣営からざわめきが起きる。

「ちよっと待つて！これ以上の勝負は無意味よ！」

優子が止めにはいる。

「確かにクラス単位で勝負はついたが個人間ではついていない。俺が勝っても負けてもAクラスの勝利は揺るがないんだ。しかも、AクラスにはFクラスへの命令権を持ったままだ。損はないはずだろ？」

「でもー」

「……別に受けてもいい」

雄二との勝負を承諾する翔子。

「……高橋先生、お願いします」

「止めても無駄みたいですね。わかりました。そうなると問題を用意しないではいけませんね。霧島さんと坂本君は視聴覚室で、他の皆さんはここで少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室から出て行く。続いて翔子と雄二が出て行く。

「ねえ、猪俣君」

「あ？なんや吉井」

「雄二には秘策があるんだよ？なんで自分から賭けに負けるようなことをしたの？」

「ワシも気になるのじゃ」

「……（コクコク）」

「そうよ！アンタの負けよ！」

「教えてください、猪俣君」

どうやら、Fクラスの面々は英才の真意が分からないらしい。

そして日本史のテストが始まった。

「……お前ら、本当にゴリラが勝つ思うてるんか？」

「そうだよ、じゃなきAクラスに勝てるなんて言わないだろ」

「考えてみいや。やつが神童って呼ばれてたんは小学生までや。それから悪鬼羅刹と呼ばれるとこまで落ちぶれたんや。人の記憶っちゃうもんはどんどん風化していくもんや。特に生活に本来必要のな

い勉強で暗記したこつは尚更や。思い出してみ、今まで勉強したらんゴリラは、どんクラスん代表になった？」

『Fクラス 坂本雄二 VS Aクラス 霧島翔子
日本史 53点 VS 97点』

「ゴリラはF^{バカ}クラスの代表やろうが」

？作者より、読者の皆様へ

何時の間にやら三万PV!!

表現に乏しい小説ですが、ご愛読いただきまして本当にありがとうございます。

改めてバカとテストと召喚獣という作品の人気、面白さ、素晴らしさを認識いたしました。

読者の皆様に報告、尋ねたいことがあります。

？大学の授業が再開するため、更新頻度が下がる

？どの程度の更新頻度がいいのか

？オリキャラを増やした方がいいか
以上の三つです。

返答していただけるならお手数ですが、感想欄やメッセージBOX
にお願いいたします。

あと・・・この小説『バカとひねくれ男と召喚獣』の略称ってどうなるんでしょうね。

Aクラス戦後

「で？ 氣いすんだか？ 代表」

「ああ・・・認めるさ。俺の完敗だ」

視聴覚室からうなだれて戻って来た雄二。

「お前ん敗因は多々ある。まず、Aクラスが俺の教え子っちゅうことや。お前らがBクラスと戦争しちよるとき、俺が授業をしたんや。あそこまではなるとは思わんかったけん」

「私も久保君があそこまで成績をのばすなんて思いませんでした・・・」

「しかしのう、英才よ。お主がFクラスで授業をすればみな成績が上がったのではないかのう？」

「そうよ！ アンタどっちの味方よ！？」

「お前らなあ、通常の授業でさえ最後までまともに受けんやつらや日本語が分からんやつに教えてん意味ないやろうが」

「失礼な！・・・最初の五分ぐらいは起きてるさ！」

「後は夢の中じゃがな」

「猪俣・・・やっぱり喧嘩売ってるのね？ いつもウチをバカにして

！！」

美波は英才に掴みかかろうとする。

「あ！！ 見ろよ、あの女また猪俣先生に暴力振るおうとしているぞ！！」

「なんて野蛮な人なの？ まだ懲りていないようね！」

「でもどうする？ やつはもうすでに彼女にしたいくない女子ランキングのトップにしまったぞ？」

「じゃあ、いつまでもそんな生徒ランキング同性愛部門に載せまし

しね！だからさあ、猪俣君、今度は実技をー」

「教えなくていいわよー！！」

愛子を遮る優子。最早恒例になったと言えよう。

「もう、優子ったら顔をそんなに赤くしちゃって。心配しなくても優子が先でいいからね」

「だから違ーーーうー！！」

Aクラスは和気あいあい？としているようだった。

？追加設定・整理（前書き）

ちなみに、作者名の由来は『13日の金曜日』です。

？追加設定・整理

*英才

- ・右目の眼帯は大きく、顔の四分の一を覆っていて仮面に近い
- ・口調は基本関西弁。時々宮崎弁が混ざる。
- ・秀吉と優子の言うことは基本的に絶対。

*Fクラス

- ・秀吉以外には基本的にドライ。
- ・FFF団とは対立している。
- ・美波と瑞希を快く思っていない。

*Aクラス

- ・初めはFクラスだからと英才を見下していたが、実力を知り、授業を受けたことで評価が一変。Aクラス全員から先生と呼びしたわれ、教師以上に信頼・尊敬されている。

- ・英才から教わったことを応用して全員の点数が飛躍的に上昇。瑞希の点数だとAクラスでは中の下ぐらい。

- ・利光は英才を明久のように好きなのではなく、尊敬を通りこして崇拜している。

新担任西村宗一（前書き）

短いです

新担任西村宗一

「さてFクラスの皆、お遊びの時間は終わりだ」

英才がAクラスメンバーと談笑していると、突然響いてきたよく通る声。

「あれ？西村先生、僕らに何か用ですか？」

声の主は何時の間にかAクラス教室に入ってきて来ていた鬼の補習担当教師西村宗一であった。明久は鉄人がいる訳が分からず尋ねる。

「ああ、今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

ツカヅカとFクラス勢に歩み寄る鉄人。

「おめでとう、お前らが戦争に負けたおかげで福原先制から俺に担任が変わるそうだ。良かったなお前ら！これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ！！」

『『『『なにいつ！？』『』『』』』』

文月学園生徒の天敵、鉄人が担任になるとわかり、驚かずにはいられない一同。

「確かにお前らはこのAクラス戦を除いたら良くやったと言えるだろう。しかし、いくら『学力が全てではない』からといって人生を渡つてく上で強力な武器の一つなのにないがしろにしてはいけない。吉井と坂本はとくに念入りに監視してやる！なにせ開校以来初の観察処分者だからな。同じく開校以来初の特別講師の猪俣と俺とでしごいてやるから覚悟しろ！！」

「俺も巻き添えですかい・・・」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目とプロレス技をいかくぐつて今まで通り楽しい学園生活を過ごしてみせる！」

「・・・お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

明久の宣言に呆れる鉄人。

「とりあえず明日から補習の時間を二時間設けてやろう」

「先生、俺ん睡眠時間減らさんでくださいよ。ただでさえバカがせわしくて眠れんのに・・・」

「あきらめろ、猪俣」

なんとも嫌そうな顔をする英才に鉄人は苦笑いする。

「んで？何で明日からなんすか？一騎討ちしたやつは俺以外負けたんですから補習でしょう？」

「それはだな・・・まあ、みてればわかる」

ニヤリと明久を見やると鉄人は教室から出て行った。

くだらない(前書き)

今回も短いですが、布石の回です。

くだらない

「さあ、アキ。今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか？」

「え？それは週末って話じゃ」

「だっ、ダメです！明久君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？それは話題にすら上がってないよ！？」

鉄人が去ると美波と瑞希による明久の奪い合いが始まった。

「ふ、二人とも勘弁してよ！！今月、これ以上の出費は！」

「そんなこと言っただけで逃げようたってそうはいかないからね？」

「ち、違うよ！本当にこれ以上は！」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「アキ！いいから来なさい！」

「あがあっ！美波、首はヤバイから！」

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ！」

「わっ、私と映画に行くんですよね！」

「いやああっ！生活費が！僕の栄養があっ！！！」

二人に左右に引っ張られながら鳴き叫ぶ明久。

『『『異端者を殺せえ！！』』』

と、いつもならFFF団が瞬時に着替えて明久を殺しにかかるだろう。しかし、団員たちは動くどころか嫉妬が源の殺気さえも出していなかった。

いや、正確には『出せなかった』のだ。

「ひ、英才よ！！落ち着くのじゃ！！」

「アంతの気持はわかるわ！でも、抑えるのよ、英！！」

「あれで人が好きやと？・・・くだらん欲、くだらん自己満足が満たされるなら人ん気持ちは、事情はお構いなしやと？・・・」

「ざけんなや」

無表情で静かに言い放たれたその言葉。冷たく、鋭い殺気を孕んでいた。幼馴染の双子が腕を抱きしめて制止しなかったら美波と瑞希はどうなっていたことだろうか。

「優子、秀吉。悪かったな。俺は先に帰るわ」

「英才よ、やはりまだ・・・」

「やっぱ吹っ切れんわ。ま、心配せんでんあいつらには何もせんかい安心せえや」

英才はいつもの表情に戻ると教室から出て行った。

「ね、ねえ、弟君、優子・・・さっきのって猪俣君の過去に関係あるの？」

恐る恐る尋ねる愛子。

「ワシと姉上の口から言うべきことではないのじゃ。本人が言っておったように、明日からはまた今まで通りに戻っておる。英才が自分から話すまで詮索しないでほしいのじゃ」

「愛子、皆。そういうわけなの。ただ・・・英を嫌いにならないで」

Aクラス全員がもちろんだと答えた。が、先ほどまでの和やかな空気が戻ることはなかった。

依頼

「婆さん、入りまっせ」

学園長室のドアをノックアウトするも、返事を待たずに乱暴に開ける英才。

「まったくこのガキは。礼儀つてものを知らないのかい？」

「知っててん礼儀を尽くす義務はないんや。前みたいに高橋先生や西村先生がおれば別やがな。で？今日は何の用や？こちららバカ軍団のせいで安眠妨害の日々なんや。はよ言いや」

英才はどかっと思接用のソファに腰掛ける。

「はあ・・・今日あんたを呼んだのは頼みたいことがあってね、この白金の腕輪の件さね。」

「あ？」

「これは新技術としてスポンサーにお披露目する予定でね。清涼祭の召喚大会の景品にしようと思ってるんだよ」

「で？出そう思ったら何か不具合が見つかったからこんまやったらヤバイと？」

「不具合といっても高い点数で暴走するだけさね。まあ、そこまで分かったているなら話は早いよ。なんとかならないかい？」

「婆さん、それは結構ヤバイ不具合やし、機械は俺ん専門外やぞ。延期するなりなんなりせえや」

「それは無理だよ。もうスポンサーに招待状を送ってるんでね」

「ザポイントオブノーリターンっちゅうやつかい・・・」

英才は少し考えこむ。

「点数が高かったら暴走するんやっただな？」

「そうだよ」

「じゃったら点数が低い、ウチのクラスのバカ共ならええんやないか？」

「理屈は通っても、現実的に」

「確率は低いけん、無理やないで。現に奴等は俺抜きでBクラスに勝つとる。焚きつければホイホイ話に乗って来るはずやで」

「・・・それしかないようだね。いいだろう。やってみるさ」

「んじゃ、俺はもうええな？」

英才はソファから立ち上がる。

「待ちな！アンタにあと一つ頼みたいことがあるんだよー」

文月学園の妖怪は不敵な笑みを浮かべていた。

出し物

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

英才がFクラスに戻ると、美波が教壇に立って何やらしきっていた。

「おい、秀吉。何しとったん？」

「遅かったのう、英才。今ワシらのクラスの出し物が決まったところじゃ。多数決で中華喫茶をやることになったぞい」

「中華喫茶あ？んなまただりいことになりそうやなあ。めんどいとこの上なしや」

英才はやる気がないのかアイマスクを取り出し睡眠時間を少しでも取り戻そうとする。

「そこっ！寝るな！」

英才に怒鳴る美波。

「寝るんやない。ちと夢を見るだけや」

「一緒でしょうが！！木下、そのバカが寝たら起こしなさい！」

「英才、あきらめるのじゃ」

「・・・ちっ」

秀吉を介して渋々美波に従う英才。

「中華喫茶なら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

そう言って立ち上がる須川。

「・・・（スクツ）」

続いて康太が立ち上がる。

「ムツツリー二、料理なんてできるの？」

「・・・紳士の嗜み」

この時クラスのほぼ全員が康太が料理ができる理由を想像できたのは言うまでもない。

「それじゃあ、厨房班とホール班に分かれて貰うからね。厨房班は姿と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

美波の指示で皆が別れ始める。

「それじゃ、私は厨房班にー」

瑞希が厨房班に行こうとした時だった。

「行かせるわけねえやろうが・・・」

やる気のない状態から一変した英才が阻止する。

「お前が料理・・・いや、あら料理やないな。食いもんで実験してできたやつなんざ客に出したら死人がでるわ。食中毒じゃなくて化学物質の致死量の世界でな」

「で、でも私だってあれから一生懸命に練習したんです!!」

今回は泣かずに負けじと言い返す瑞希。

「・・・料理の調味料のさしすせそ言うてみいや」

「え？簡単じゃないですか。酢酸、硝酸、水酸化ナトリ」

「い、猪俣！やめろ！」

「気持ちわかるが暴力はならんのじゃ!!」

「とにかく落ち着いて！」

「・・・（ガシッ）」

瑞希があげる劇薬のさしすせそを聞いて、英才が拳を固め振り上げたところを須川と秀吉と明久と康太が阻止しする。

「み、瑞希！猪俣から離れて！」

美波が瑞希を英才から引き離す。屋上で見た時と同じ表情をしている英才を見て危険を感じたらしい。

「おい！皆手伝え！」

須川の応援要請で他のクラスメイトも応援に入る。

「いやあ、すまん秀吉。うつかり手が出るとこやったわ」

英才が落ち着いたのは十分後。雄二も叩き起こして参加させたがとまらなかった。結局は秀吉の説得で静まったのだった。

「い、猪俣君・・・何で私が厨房班じゃいけないんですか!？」

「ああ？」

泣き目の瑞希の言葉に再び気を悪くする英才。

「猪俣君ストップ!! 姫路さん、キミはホール班でがんばってよ!」
英才を見て明久が割って入る。

「明久君まで・・・どうして私はホールじゃないとダメなんですか?」

どうやら英才の説教は意味をなさなかったらしい。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんはかわいいから、ホールでお客様さんに接した方がお店として利益が痛あ!! み、美波! 僕の背中にはサンドバッグじゃないよ!？」

「か、かわいいだなんて・・・明久君がそう言うなら、ホールで頑張りますねっ」

気を良くする瑞希。

「アキ。ウチは厨房にしようかな?」

「うん、適任だと思う」

「・・・・・・」

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言ってるのさ。そんなにかわいいんだから、もちろんホールに決まってみぎゃああっ! み、美波様! 折れます! 腰骨が! 命に関わる大事な骨が!」

明久の対応に美波は明久の背中に強力な一撃を叩き込む。

（姫路といい、こん暴力女といい、自分の非がわからんとは。うぜえやつらやな）

美波の行動に顔をしかめる英才。

「・・・・・・ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね・・・それが、いいと、思います・・・」
のたうちまわりながらも答える明久だった。

姫路瑞希の危機

「英才、ちょっといいかの」

放課後、帰りのHRからずっと寝ていた英才を秀吉がゆすり起こす。

「ん？今度はなんや？」

「猪俣、頼みがあるの。今すぐ坂本に対して命令権を使ってくれない？」

いつもは英才を目の敵にしている美波が真面目な顔で頼み込む。

「はあ？なんで俺がそんなこつせないかんのや？」

「実はのう、英才ー」

訳が分からない英才に事情の説明を始める秀吉。

話によると、今瑞希は転校の危機にさらされているらしい。もともと体が丈夫でない瑞希にとって、最低な学習環境にあって競争相手のいないFクラスよりも設備が整っていて、競争相手の多い他校に転校させたほうがいいと、瑞希の両親が判断した。その転校を阻止するために中華喫茶を成功させてその利益で少しでもくらす設備を向上させ、さらに召喚大会でもFクラスが優秀な成績をおさめなければならぬ。そして事をうまく運ぶにはクラスの代表である雄二の協力が欠かせないが、当の本人は非協力的であるため、英才の命令権を使ってほしい、という訳だった。

「ほお、そんげなこつになつとんのか」

「頼むよ、猪俣君。雄二を捕まえてくるから命令権をー」

「嫌や」

英才は即座に拒否をした。

「何で貴重な命令権を譲らないかんのや？」

「だから言つたじゃない！このままじゃ瑞希が転校しちゃうの！」

「あんなあ・・・姫路の転校はお前らにとっては危機であってん俺にとつちやどうでもいいことや。命令権を使ってんメリット無いやんけ」

「なっ！！！！どうでもいいって、アンタねえ！！！！瑞希は大事なクラスメイトなのよ！！！！本人が転校したくないって言っているのよ！！！！」

「俺にとつちやただんクラスメイトやし、姫路ん親御さんの言い分は正論や。じゃあ聞くがもし俺が望まん転校するしたらお前はどっするん？」

「・・・・・・い、いきなり何よ？」

「普段俺を毛嫌いしとるお前なら阻止もせんと嬉々として送りだすやろつな。それと一緒にや。まあ俺は嬉々とはせんがな」

「そんなことないよ！」

「いや、吉井。それがあるんや、それが人間や。人間は自分に利がないやつあおるよりおらんほうがええと考えるんや。歴史が証明しとるやないか」

「・・・・・・猪俣・・・・・・やつぱりアンタは最低よ！！！！アンタに頼もうと思った私がバカだったわ！！！！」

「実際お前バカやん。まあ、自分がバカやと自覚があるんはええ心がけやないかい」

激怒して去って行った美波には英才のつぶやきは聞こえなかった。

バキッ！！

美波が教室を出て行って笑っていた英才の顔面を明久が殴る。明久は全力で殴ったものの英才は痛がる様子もなく平然としていた。

「なんや、ご立腹やないかい」

「姫路さんにとって転校はどうでもよくなんかない・・・・・・」

「あん？」

「姫路さんの気持ちを考えろおおおお！！！！」

「やめるのじゃー！！」

再度英才に殴りかかる明久。だがあっさり躲され鳩尾に英才のカウンターをくらう。

「ぐう……」

「先に手え出したんはお前やからな。正当防衛や、悪く思うなや。それにお前ら何勘違いしとんのや？」

「勘違い？」

「俺は命令権を姫路転校阻止のためにや使わんと言ったんや。誰も協力はせんとは言つとらんで。どうでんええ思つとるんは確かやがな。」

「………え？」

「人の人生に別れはつきもんや………」

・別れを言える機会があるだけありがたく思えや」

英才の言葉に表情を暗くする秀吉。明久は気付いていなかったが。

「ま、協力言うてんだた真面目に喫茶をするだけやけどな」

「ち、ちよつと！それを早く言つてよ！鳩尾に膝蹴りつて洒落にならないんだから！！」

「最近どこぞのバカ約二名のせいでえらいストレスたまってたんや。合法的に解消したまでや」

「どうしよう、仕返したいのに実行したときの自分がどうなるか明白でできないや……」

「それが利口や。………ああ、クラス設備やつたら学園長、もといババアに言うたらどうにかなるで。生徒が設備んせいで体調悪くなつたんやつたら風評被害にあうからな」

這いつくばる明久をそのままに英才は教室を出て行った。

清涼祭スタート・模様替え（前書き）

短いです。

原作はなれていきます

清涼祭スタート・模様替え

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにな」

清涼祭初日の朝。学園祭最低の設備であるFクラス教室の室内はいの意味で原形をとどめていなかった。

腐った畳の上には華やかな絨毯、汚いみかん箱とゴザに代わって綺麗なテーブルと椅子。そして中華風の装飾。まさに中華喫茶の名に相応しい場となっていた。

「それにしても、猪俣は何を企んでるの？」

「まあいいじゃないか」

そう、いずれの設備も全て英才が用意した物である。一日前、引越しの大型トラックで搬入されてきたもので、どれも新品らしく包装されたままだった。はじめ訳がわからなかったFクラスは大騒ぎとなったのだが、英才が説明してなんとか準備を始めたのだった。

「英才はやると言ったら徹底的にやる男じゃからな」

「でもいつたいどこから持って来たんでしょうか？」

「・・・おそらく、英才のポケットマネーじゃ」

「ええ！！これ、全部猪俣君の自腹なの！？」

秀吉の言葉に、普段極貧生活を送っている明久が反応する。

「ちよつと！！どういふことよ木下！！」

「猪俣君の家つて、お金持ちなんですか！？」

同じく信じられないといった様子の美波と瑞希。

「英才は株や土地貸しをやっておるからのう。本人曰く、『その気になれば一生寝て暮らせる』らしいのじゃ。やつはあまり金を使うこともないからこれくらいの出費は造作もないじゃろう」

「う、うらやましい・・・」

「アイツ、なんでもかんでも出鱈目じゃない・・・」

「これ全部で何十万もしますよ？・・・」

秀吉の話やな顔を引きつらせる三人だった。

召喚大会へ

「……………飲茶ができた」

「おわっ！」

背後から突然現れた康太に驚く明久。

「驚かさないでよムツツリーニ。ところで、それ食べていいの？」

「……………味見用」

康太が差し出したのは木製のトレーに乗せたゴマ団子と陶器のティ
ーセットだった。

「わぁ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では遠慮なくいただこうかの」

「そうだね」

四人は作りたてのゴマ団子を頬張った。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「これは絶対に売れるよ！！」

口にしたとたん、四人からは絶賛の声。そしてお茶も美味しそうに
飲んでいる。

「それにしても、土屋って本当に料理できたのね」

「……………紳士の嗜み。ちなみに島田と姫路のゴマ団子は猪俣が
作った分」

「えっ！？ウソでしょ！？何であいつができるのよ！！」

「うう……………男の子に負けるなんて……………」

につつき英才が作ったと知り驚く美波と、プライドを打ち砕かれた
のかしょんぼりする瑞希。一方で秀吉は英才が作ったゴマ団子が食
べたかったのか残念そうな顔をしていた。

「うーっす、もどつて来たぞー」

もどつてきた雄二。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

雄二はまだ残っていたゴマ団子を頬張った。

「おっ！美味しいな、これ！」

「……猪俣が作ったやつ」

「……私だって、やればできるんです……！」

高評価の英才のゴマ団子に対抗心を燃やしたのか、厨房へ入ろうとする瑞希。だが――

「やればできるじゃなくて、やってんできんの間違いやろうが」

厨房の奥から現れた英才に阻まれる。

「代表、契約を忘れんなや」

「雄二、契約つて？」

「あ、ああ。知つての通り、この中華喫茶のスポンサーは猪俣だ。だが、設備を用意する代わりに条件があつてな。それが姫路を厨房に入れないことなんだ」

瑞希を申し訳なさそうに見ながら言う雄二。

「そういつこつちや。姫路が厨房に入った瞬間、客がいようがいまいが問答無用で撤去や。そん代わり無償提供や。いやとは言わせん」

「……過ちを繰り返してはならない」

英才の言葉でトラウマとなった瑞希の弁当を思い出したのか、康太

がガタガタと震える。

「そ、そこまでしなくても……」

「そうよ！やり過ぎじゃない……！」

涙目になる瑞希と、英才のやり方が気に入らない様子の美波。
「ほお、んじゃ、こん清涼祭が失敗が終わってんええんやな？誰かさんは困ってたんと違うか？」

瑞希を得意げな顔で見る英才。

「え！何でそれを？……でも、わかりました……」

「・・・今回は見逃してあげるわ」

事情を考慮して、結局は折れた二人だった。

「じゃ、俺はまだ仕込みがあるから戻るわ。せや、お前ら大会の時間と違うんか？」

「つと、そろそろだな。行くぞ明久」

「うん、そうだね」

「ウチらも行こう、瑞希」

「はい！がんばりましょうね！」

四人は召喚大会の会場である校庭へと向かった。

（上手いこと焚き付けたようやな、婆さん）

営業妨害

「英才よ、何でお主は召喚大会に出ないのじゃ？お主なら優勝は確実じゃろう？」

明久たちが大会にむかってからしばらくして、ウェイターのヘルプに入っていた英才に秀吉が尋ねる。

「確かに楽勝やろうがな、去年は目立たんようにやって昼行灯とか呼ばれとった。でん、最近はただでさえ目立つとるのに、優勝してしもうたら余計目立つやろうが。俺はこれ以上目立ちたくないんや」
テーブルの食器を下げながら愚痴る英才。

「確かにのう」

秀吉もFクラスになってから思い当たる節が多々あるため苦笑いする。

「・・・してお前、そんなチャイナ服姿、優子に見られたらヤバいんじゃないかねえの？」

「ば、ばれなければ大丈夫ー」

「じゃないに決まってるでしょうが・・・」

何時の間にやら秀吉の背後に立っていた優子。

「あ、姉上！？なんでここにいるの関節がああああ！！」

目が笑ってない笑顔で秀吉の腕を極める優子。

「まあまあ、優子、それぐらいにしてあげなよ」

付き添って来た愛子が優子をなだめようとする。

「お、優子、工藤。よう来たな。優子、秀吉かて好きで着とるんやないから堪忍したりいや。」

「・・・わかったわよ」

秀吉を解放する優子。

「ところで、優子。お前、大会はどうしたんや？まだありよるはずやぞ？」

「優子は代表と出ているからね。代表が相手のペアを秒殺しちゃっ

たんだ。それで時間が余った優子が『英に会いたい！』て聞かなくてね」

「ちよつと、愛子！」

「ほお、流石学年主席やな。で？お前ら何か食べて行くか？俺が奢ったるわ」

「えっ？いいの？ボク、甘いもの大好きなんだ！ホラ、優子！座ろうよー！」

英才の申し出に目を輝かせ、優子を近くの席に引つ張る愛子。

「須川会長！！即刻異端審問会を開くべきです！」

「耐えろ、近藤審問官！ヤツの機嫌を損ねたら来学期までみかん箱だ！審問会はしかるべき時期に必ずや開く！だから耐えろ！！」

遠くではAクラスの美少女＋秀吉を独り占めしている英才を見てこのような会話が行われていた。

「「おいしいー！！」」

英才の作ったゴマ団子を食べて声を揃える二人。

「猪俣君って勉強も料理もできるんだね！！」

「流石ね、英」

「まあ、どんどん食えや」

英才は追加の飲茶を運んで来た。ただ、その背中にはクラスメイトからの嫉妬と殺意の視線が突き刺さっていたが。

「邪魔するぞ」

優子と愛子が飲茶に舌鼓を打っていると、坊主とソフトモヒカン
の二人組が入って来て、真ん中付近の席に陣取った。

「いつらっしやいませ！中華喫茶へようこそ！」

秀吉がウエイトレスとして接客にあたる。優子から睨まれながらだが。

「えー・・・ゴマ団子2つとウーロン茶2つ」

なぜか秀吉に熱烈な視線を浴びせながら注文していた。

「おい！責任者とこのゴマ団子を作ったやつ呼べ！！」

秀吉の給仕から数分後、ソフトモヒカンの方が大声を上げる。

「責任者はただいま使用で不在ですが、ゴマ団子を作ったのは私です。お客様、何か問題でも？」

すかさず英才が対応する。

「問題も何も、ゴマ団子を割ってみたら虫が入ってたんだよ！おかげで吐き気がするじゃねえか！」

「そうだ！どうしてくれるんだ！！」

二人の言葉に周囲の客が動揺する。

「申し訳ございませんがお客様、私共は出店に当たって一定の衛生基準をクリアしておりますし、衛生管理を徹底しております。このような事態が起こるとは考えられないのですが？」

「何だと？自分たちの非を認めないで俺たちに難癖をつけるのか！？」

「舐めた真似してんじゃねえぞ！！賠償金を支払うのが筋だろうが！！」

「……そうですか。そこまで仰るならしょうがない。おい、土屋！！例の物を持って来いや！！」

「……ここに」

英才に呼ばれてすぐに康太がモニターらしきものを持って来る。

「な、何だこれは？」

「いやあ、お客様が当店にご入店なさった時からあまりにもウエイトレスに対して不快で不潔な妄想を抱いているかのような目で凝視されていたものですから、何かあってから遅いと思ってお客様の様子を撮影させていただきました。では、お客様にゴマ団子をお出した後の様子を確認いたしました。よう。土屋！」

康太がりモコンを操作すると、秀吉がゴマ団子とウーロン茶を運んだ後の様子が映し出される。坊主が辺りを伺い、何やらソフトモヒ

カンに目と顎で合図をすると、ソフトモヒカンは頷き、ポケットからハンカチを取り出し広げる。広げたハンカチから出てきたのは蠅のような虫で、割ったゴマ団子の中に置くと急いでハンカチをしまった。

「おや？おかしいですね？虫を飲茶に混入させたのはお客様ですよ？」

「くっ！きたねえぞ！」

「あん？いろんな意味できたねえのはてめえらやろうが！なんや、いつちよまえに営業妨害か？これは立派な詐欺と恐喝やぞ？自分ら、立場わかつとるか！？」

敬語から素に戻った英才はドスのきいた声になる。

「ち、夏川！逃げるぞ！！」

「ああ！」

「おい、待たんかい」

逃げようとする二人の首根っこを掴む英才。

「詐欺の現行犯を逃がすわけねえ……やろうが！！」

両手につかんだ二人を持ち上げ、そのまま倒れ込むようにして床に叩きつける。いわゆるチョークスラムである。坊主とソフトモヒカンは声が出せないほど痛かったらしく、床でもだえている。

「おい、騒がしいが……猪俣、いったい何の騒ぎだ！？」

偶然通りかかって騒ぎを聞きつけたのか、鉄人が教室に入ってきた。

「先生、こいつら詐欺の現行犯ですわ。逃げようとしたんで、取り押さえたんです。土屋、証拠や」

「……確かに、これは酷いな」

「先生、こいつらの処分、お願いできますか？」

「ああ、いいだろう。猪俣、よくやった」

そう言うと二人を抱えて鉄人西村は去って行った。

「えー、お客様、たいへん申し訳ありませんでした。ご注文の品の代金は私もち、ということにさせていただきますので、どうぞゆつくりおくつろぎください」

『かつこよかったよ!』

『この店に来てよかったよ』

『皆にも宣伝しなきゃ!』

一部始終を見ていた客達から拍手と歓声が上がる。

(か、かつこいい・・・)

「あれ?おーい、優子!」

英才の勇姿に見とれていた優子だった。

? 作者より9 / 27

何時の間にか累計六万PVオーバー、お気に入り登録50オーバー、週間アクセスもかなりあがってました。かなり驚きました。何度も言いますがこんな表現、描写に乏しい小説のご愛読、本当にありがとうございます。

さて、前回のお知らせの通り、大学再開のため更新が滞る可能性が出て参りました。

今までは一日2更新を目標にしてきましたが、1回となってしまいそうです。ご了承いただければ幸いです。

また、ご意見、感想も随時お待ちしております。

追記、

現在、バカテストは二問書いてますが、もっとやった方がいいですか?ご意見お待ちしております。

一難去って

「営業妨害か・・・すまん猪俣。助かった」

鉄人が坊主とモヒカンを連行して数分後、秀吉が呼んできた雄二と明久が合流する。

「でも、よくビデオなんて撮っていたね、ムッツリーニ」

「・・・猪俣の指示」

「接客業、ましてや学生がやる店や。トラブルには滅法弱いもんや。じゃかい事実確認ができるように監視カメラを頼んだんや」

「それに、猪俣君かつこよかったんだよ！あの二人組を床に叩きつけちゃってさ。優子なんてずっと見とれてたんだから」

「も、もう！愛子！」

ニヤニヤと優子を見るあの。

「で、でも、たかが学園祭の喫茶店で営業妨害だなんて、何でかしら？」

「うむ。何のメリットもなからうて」

「でも猪俣君が鉄人に引き渡したんでしょ？ならもう大丈夫だよ」

「だといいんだが・・・」

腕組みをして何か考えている様子の雄二。

「あ！優子、そろそろクラスに戻らなきゃ！」

「あら、ホントね。じゃあ、私達は店に戻るわね。英、ごちそうさま」

「ボクたち、メイド喫茶をやってるんだ！猪俣君も皆も後で絶対に来てね！ごちそうしてもらったお礼にいっぱいサービスするからさ。保健体育の実技で」

イタズラっぽい笑みを浮かべる愛子。康太は持前の想像力が働いたのか鼻血を噴水の如く噴き出す。

「土屋、飲食店なんやから血で汚すなや」

「もう、初心だなあムツツリー二君は。じゃあ、吉井君、キミはど
う？」

「もちろん喜んでい関節がネジ切れるうううう！！」

「だからアキには必要性ないの！」

「そうですよ！」

何時の間にか明久の両腕を美波と瑞希が極めていた。

「おい、やめえや」

見かねた英才が二人を明久から引き離す。

「ちよつと！何するのよ猪俣！」

「明久君にはお仕置きが必要なんです！」

「お前ら客がおる手前で何しよるんや？せつかく俺が自腹切って信
頼を回復したんや。」

「だってアキが悪いんじゃない！」

「猪俣君、そこをどいてください！」

英才に講義し続ける二人。

「……てめえらのくだらん、下等で浅はかなエゴで他人に
迷惑かけとんのが分からののか？」

「英才！」

「英！」

英才の怒りを察知したのか、木下姉弟はなんとかだめようとする。

「……俺も客ん手前や。今は引いたるわ。じゃけん、お前
らが吉井に暴力振るつた時点で設備を撤去させてもらうわ」

「おい、約束が違うぞ、猪俣！」

「こっちは契約外の出費に、トラブルも回避させたんや。嫌とは言
わせん！！もともと俺に利益は何一つ無いんや！守れんのやったら
誰かさんが泣き泣き転校するだけや」

一方的に話を打ち切ると英才は厨房へと入って行った。

「いつもいつも何なのよ、あいつ！！」

「……」

自分に非があるとは思わない美波は憤慨し、瑞希は俯く。

「秀吉。英、そろそろヤバいんじゃない？」

「うむ。限界が近いようじゃな」

「？秀吉、どういうことなの？」

「あまり多くは言えぬのじゃが、そろそろ英才が本気でキレてしま
うかもしれぬ」

「本気って・・・屋上の時みたいに？」

「あれで優しすぎるぐらいじゃ」

秀吉は深刻そうな真面目な顔で言う。

「島田さん、姫路さん。何か問題を抱えてるのかどうか知らないけ
ど、忠告しておくわ。英が本気でキレたら手段を選ばずあなたたち
を潰しに掛かるわよ」

「ゆ、優子、そんな大袈裟な・・・」

「・・・英才が帰って来た時、姉上とそしてなぜかワシにセク
ハラをしようとした教師がおったのじゃ。それを見た英才は本気で
キレてのう。その教師は普段乗らないはずの電車にたまたま乗った
時、車内で痴漢として捕まって警察に逮捕されたのじゃ。それから
匿名の密告で横領や売春などの余罪が明らかになってのう。その教
師は必死に否定しておっいたらしいが結局は全ての件で有罪、今も刑
務所で服役しておるのじゃ」

「え！？まさか、それって全部・・・」

「英のしわざなんだろうけど、英が関わったという証拠は一切出て
こなかったわ」

「島田に姫路よ。言いたいことは山ほどあるじゃろうが、今は我慢
するのじゃ。最悪、姫路の転校だけじゃ済まなくなるぞい」

秀吉は美波と瑞希に忠告する。

「うう・・・分かったわ」

「ひ、酷いです・・・」

納得はいかない様子だが、従わざるを得ない二人だった。

島田姉妹

「ただいまー・・・って、あんまりお客さんがいないなあ・・・」
二回戦で根本・小山ペアを戦わずして退けた明久は教室に戻ってきた。すると、なぜか店内に客は少ししかいなかった。

「お、戻ってきたようじゃの」

あまり仕事が無いようで、ウエイトレス役の秀吉は暇を持て余しているようだ。た。

「ところで、雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ。それより秀吉、これはどういうこと？お客さんがいないじゃないか」

「それがワシにも分からのじゃ。英才があのだ二人組を追い払って以来、妙な客は来てねおらのじゃがのう」

首を傾げる秀吉。

「ってコトは、教室の外で何かが起きているのかな？」

「かもしれんのう」

原因を考え込む二人。

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、チビっ子』

『チビっ子じゃなくて葉月ですっ』

何やら廊下から雄二と小さな少女らしき声が聞こえてくる。

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

「んで、探してるのはどんなヤツだ？」

ドアを開ける雄二。話し相手の少女は雄二の陰になってみえない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

雄二と少女は異性に飢えたFクラスの生徒に囲まれる。

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？」

「あう・・・わからないです・・・」

「？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特長は？」

「えっと・・・バカなお兄ちゃんでした！」

「そうか・・・沢山いるんだが？」

雄二は辺りを見回す。

「あの、そうじゃなくて、その・・・」

「うん？他に何か特徴があるのか？」

「その・・・すぐくバカなお兄ちゃんだったんです！」

『『吉井だな』』』

「まったく失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！

絶対に人違い！」

「あっ！バカなお兄ちゃんだっ！」

泣き目で抗議する明久に駆け寄り抱き着く少女。

「絶賛に人違い、がどうした？」

「・・・人違いだと、いいなあ・・・って、キミは誰？見たところ

小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

抱き着く少女を引き剥がす明久。

「え？お兄ちゃん・・・知らないって、ひどい・・・」

しだいに少女の表情がゆがんで行く。

「バカなお兄ちゃんのバカあっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、

葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きな

がら来たのに！」

「明久、じゃなくてバカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってく

れんかのう？」

バカを連呼しながら少女を慰めるように言う二人。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにー」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

大会で勝利を収めて帰って来たらしい美波と瑞希が明久に折檻をしようとする。

「なんや？ せわしいなあ」

「！！！」

厨房から英才が出て来た瞬間、二人は先程のことを思い出したのかピタリと止まる。

「わあ、このお兄ちゃん大っきいです！」

表情をあかるくさせ今度は英才に駆け寄ろうとする少女。

「は、葉月！ 危ないからやめなさい！！」

美波が止めに入る。

「危ないって自分こっちやるが。で？ そんなガキや誰や？」

「ガキじゃないです！ 葉月ですっ！」

「この子はウチの妹よ！ 何かしたら承知しないんだからね！」

英才を睨みつける美波。秀吉の話から英才をさらに警戒するようになっただけらしい。

「妹ねえ。島田妹、ええこと教えたわ。お前んね姉ちゃんを反面教師にして生きて行きや必ず幸せになれるで」

「・・・どういう意味よ？」

「お前と逆のことしときゃ恋愛が上手くいくつちゅうこっちゃ」

「い、猪俣あゝ！！」

美波の背後には不動明王が浮かんでいるかの如く、殺気があふれだす。

「ああっ！ 思い出したよ、あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「あれ？ 葉月とアキって知り合いなの？」

妹と明久の親しげな様子に殺気を霧散させ尋ねる美波。

「うん、まあ、去年ちよつとね」

・・・

・
・
・

「なあ、ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

改めて教室を見まわす雄二。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々か話を聞いたよ？」

「ん？どんな話だ？」

「えつとね、中華喫茶の料理には虫とかが入っているから行かない方がいい、って」

「なんやと？俺が誤解を解いたはずやぞ？」

「ふむ・・・猪股が潰した連中が触れ回っているのかもしれんな。探し出してシバき倒すか」

（あんゴミ共が西村先生から解放されたやと？婆さんが指示したんと違うやろうし・・・となると・・・なるほど、あいつか。）
あることを思い出して黒幕に目星をつける英才。

「よし、ひとまず様子を見に行こう」

「そうだね。少なくとも、噂がどこからながれてどこまで拡がっているのかを確認しないと」

「お兄ちゃん、葉月と一緒にあそびにいこう」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功者させなきゃいけないから、あんまり一生に遊べないんだ」

「それなら、そのチビっ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

「そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

満面の笑みをうかべる葉月。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒にいくね」

「ふむ。ならば姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そっか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？ありがとうございます。木下君」
こうして明久たち一行は早目の休憩を取るために教室を出た。

「それからお主もじゃ、英才。Aクラスで姉上がまってるぞい」
「いや、俺はー」

「いいから行ってくるのじゃ！」

拒もつとする英才の背をグイグイ押す秀吉。

「・・・・・・はあ、わかったわ、早めに戻って来っかいな」
「うむ。それで良いのじゃ！」

結局、秀吉に負けてAクラスに向かう英才だった。

社会のゴミ掃除

「お、お、おかえりなさいませ、ご主人様」

英才がAクラスのメイド喫茶に入店すると、愛子に背中を押され、顔を恥ずかしそうに赤くさせた優子が出迎える。もちろん、メイド服姿である。

「おう、優子。似合つとるやないか」

「（嬉しい！）そ、それではお席にご案内します」

英才の言葉に嬉しそうな顔をする優子。愛子は相変わらずニヤニヤしていたが。

『いいなあ、木下さん』

『猪俣先生にああいつてもらえるなんて』

Aクラスの女子たちは羨ましそうに見ていた。

「なんや、お前らも来とつたんか」

「猪俣君こそなんで・・・ああ、そういうことか」

案内為れた席の隣には先に入店していた明久たちが座っており、すでに注文したようでテーブルのうえにはケーキが並んでいた。ただ、なぜか雄二の前には婚姻届があつたのだが。

「明久、お前、他人の色恋沙汰は分かるんだな」

呆れるように言う雄二。

「・・・瑞希、ウチらの努力っていったい・・・」

「ホントですね・・・」

続いて溜息をつく二名。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

店に入って来たのは英才が潰したはずの坊主とソフトモヒカン。

「あ、あの人達だよ。さつき大きな声で『中華喫茶はひどい』って
言ってたの」

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さつき行った二ーＦの中華喫茶は酷かったからな！』

『なんせ注文したゴマ団子に虫が入ってたしな！絶対あれを食つち
まったヤツがいるよな！』

『そうそう、それにあの店で料理してる眼帯の大男、眼帯の下には
蛆がわいてるらしいからな。そいつが作ったもんなんて食べるわけ
ないよな！』

わざわざ大声でデマを言いふらす二人。

「よう本人がおる前でいけしゃあしゃあと言えんなあ。って、優子、
吉井、落ち着かんかい。工藤、他ん連中も宥めとけや」

「う、うん」

二人組のデマに怒ったのか、明久と優子は抗議しに行こうとするも
英才に止められる。また、他のＡクラス生徒も、慕っている英才が
バカにされて頭にきているようだった。

「猪俣君、どうして止めるのさ！」

「そうよ！英をバカにされて黙っていられないわよ！！」

優子は英才の手を振りほども、二人組に近寄っていく。そしてお冷
の水をモヒカンの顔にぶちまける。

「うおっ！？なにしゃがんだ！！」

「俺たちは客だぞ！！こんなことをして良いと思っっているのか？」

「はあ？アンタたちのようなクズなんて客じゃないわよ！！」

「ああ！？んだとこの女^{アマ}！！」

逆上したソフトモヒカンが優子の肩を突き飛ばす。その瞬間、かすかに優子口元がニヤリとつり上がったように見えた。

「きゃあっ！！この人痴漢です！！今、私の胸を触りました！！」
指をさし、涙目かつ大声で叫ぶ優子。

「お、おい！何を言ってるー」

「皆！！あの悪漢共を懲らしめるんだ！！」

『『『『了解！』『』『』』』』

久保の号令でAクラス生徒のほとんどが坊主とソフトモヒカンを取り囲む。しかも一方では少数の生徒が他の客に謝罪と事情を説明するなど、何も言わないでも連携をとっていた。

「おい！ふざけんな！！言いがかりだっグハアア！！」

「夏川！？てめえら、こんなことしてただじゃすまどわああ！！」
抗議虚しくなぐり倒される二人。

『だまれ！！人間のクズがつ！！』

『猪俣先生を侮辱するだけじゃなくて木下さんまでも！！』

『許さんぞ！貴様ら！！』

容赦なく蹴りの嵐を浴びせるAクラス。特に利光の蹴りは的確に鳩尾などの急所を捉えていた。

「皆！もういいわ！！この社会のゴミ共を捨てに行きましょう！！」

頃合いをみて優子が利光たちリンチ班に呼びかける。

『だったらさ、ゴミ収集所に捨てにいこうぜ！今日はゴミがたくさんあるはずだからこいつらにお似合いだろ！！』

Aクラスの生徒が提案する。

「いいえ、それじゃ甘すぎるわ！予備のメイド服を着せて女子トイレに放置するのよ！そうすれば社会的にも抹殺できるわ！！」

『『『『それだっ！！』『』『』『』』』』

優子の提案に賛同すると、リンチ班の半数が二人を教室の外に引き

ずって行った。

「皆様、根拠の無い妄言、罵詈雑言を並べ立てる痴漢共は成敗いたしました。どうぞゆっくりお寛ぎください。今後とも、Aクラスのメイド喫茶、並びにFクラスの中華喫茶をよろしくお願いいたします」

利光が客に対して頭を下げると、客からは拍手が。利光は晴れやかな笑顔だった。

「ねえ、雄二」

「なんだ？ 明久」

「これから先、Aクラスに勝てるのかどうか心配になってきたよ」

「難しいのは確かだな・・・」

AクラスのFFF団を超えるスペックに苦笑いをするしかない一行だった。

四時間後（前書き）

かなりはしります。

そして今回はつなぎ

四時間後

「はぁ……」

準決勝で明久と雄二の姦計の前に敗れてしまった優子はシヨンボリしていた。初めは召喚大会などに出場するつもりはなかった。しかし、副賞が如月ハイランドのプレオープンプレミアムペアチケットと知っていてもたってもいられなくなり、翔子との出場を決めたのだった。

（英と行きかけたのに……）

幼い頃からの付き合いの幼馴染。恋心を抱くようになったのはいつからだっただろう。何時の間にか自分にとって大切な存在になっていたのだ。

（まさか、英、試合を見てたのかな？）

そう思うと恥ずかしさがこみ上げてくる。大切な人は何を思ったのだろう、何と声をかけてくれるのだろう……

「あ、こいつじゃね？あの人が言ってたの」

「ああ、さっきの試合に出てた女だ。間違い無い」

「そんじゃ早いこと終わらせて合流しますか」

「え？ちよつと、何なのよ？」

突然、優子を取り囲む三人の男たち。

「何なのよってこういうことなのよつと」

「……」

背後にまわっていた男に掴まれ、口と鼻にハンカチを押し付けられる。

（え？え！？まさか、誘拐！？）

「はい、おとなしくしててね」

ハンカチには薬品が染み込ませまであるのか次第に力が抜け、意識

が遠のいていく。

(い、嫌・・・・・・・・ひ・・・・・・・・で・・・・・・・・)

「あら、どこ行ったんやらかなあ優子」

英才は優子が出るということで試合を観に来ていた。だが、明久と雄二の策略に敗北感してしまったため、なにか声をかけようと思って優子を探していたのだが見つからない。Aクラスに行つて愛子と利光に尋ねても知らないと言われたのだ。

結局、探しても見つからないため、英才は一旦教室に戻ることにした。

昼行灯に油、業火を鎮めるものは（前書き）

グロいかもしれないです

昼行灯に油、業火を鎮めるものは

「戻ったで」

「ひ、英才！！大変なことになったのじゃ！」

英才が教室に戻ると秀吉が駆け寄って来た。よほどのことなのか、泣き目になっていた。

「なんや、そんげあわてて」

「あ、姉上が……姉上が誘拐されたのじゃ！！」
「……………」

「猪俣、落ち着いて聞け。俺たちのいない間に、姫路と島田姉妹、そして木下優子が誘拐されたんだ。場所はムツツリーニが調べてくれた。場所は近くのカラオケボックスのパーテイルームだからお前も」

「ま、待つのがじゃ英才！！戻って来るのじゃ！！」

雄二が誘拐犯の居場所を口にした瞬間、英才はいつものものだるそうな表情から無表情になり、尋常ではないスピードで駆け出していた。

「雄二よ、ワシらも早く行くのじゃ！！」

「ちよ、ちよつと待つてよ、秀吉。猪俣君なら心配ないって！」

「違つのじゃ！下手したら英才が誘拐犯を殺してしまうやもしれぬ！！」

「え！？」

「良いか、明久よ。英才は昼行灯と呼ばれるほど本来は静かな男じや。昼行灯は確かに目立ちませぬが、ずっと火を灯し続けておる。そこに油を注がればたちまち業火となって全てを焼き尽くしてしまふのじゃ」

「ひ、秀吉、何をー」

「何でもいい、明久、秀吉、ムツツリーニ、急ぐぞ！何かがあつてからじゃ取り返しがつかないからな」
「う、うん！」

「早くとめねば！」

「・・・・・・急ぐう」

秀吉たちは英才を追って教室を飛びだした。

「・・・・・・」

先にカラオケボックスに到着した英才は一番広い部屋、パーティールームの前にいた。その顔は無表情だが、ただならぬ雰囲気到店員も思わず通してしまった。

英才はドアノブに手をかけた。

「さて、どうする？坂本と猪俣とー吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「待て。吉井ってのは知らないが、坂本と猪俣は下手に手を出したらマズい。坂本はあの悪鬼羅刹だ」

「じゃあ、猪俣ってやつはどうなんだ？」

「猪俣って名前は聞いたことは無いだろうが、族潰しなら分かるだろう？」

「族潰しって・・・九州最大の暴走族を一人で壊滅させたやつか？」

「ああ。こいつの方がヤバイ。出来ればことを構えたくないんだが・・・・」

「気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその三人を動けなくすることなんだから」

中から微かに聞こえてくる声に手を止める英才。

『お、お姉ちゃん・・・』

『アンタたち！いい加減葉月を放しなさいよ！』

『お姉ちゃん、だつてさ！かわいい！』

『ギャははは！』

『で、こいつらどうする？ヤッチャっていいの？』

『だったら俺はコツチの巨乳ちゃんがいいなー！』

『あつ！ズリー！それなら俺二番ね！』

『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さい！』

『だつてさ。どうする？』

『どうも何も決まってるだろ。あ、俺はこの子にしようかなー一番かわいいし。ん？なんだまだ寝てんのかよ。おい、起きろよ！』

パン！

薬で眠らされていた優子をはたく音が響く。

その瞬間、英才はドアを開け放った。

『なんや、たつた六匹しかおらんのか』

『なっ！誰だ、このデカブツは！？』

『こ、こいつが猪俣だ！』

突入してきた英才に動揺するチンピラたち。

『おいおい、おまえらビビリ過ぎなんだよ。こいつ、一人で来たみたいだぞ？まったく・・・舐めてんじゃねぞコラアア！！』

入り口付近の男が英才に殴り掛る。英才は左に避けて男の腕を掴み壁の方へと引っ張る。男はバランスを崩してよろめき英才に背をむける形になる。そして英才は男の後頭部を片手で掴み勢いよく壁に顔を叩きつける。

「あつ！あが・・・あがーっ！！」

男の鼻からは鼻血が吹き出し、前歯の殆どが折れてしまったようで、こちらからもドクドクと血が流れる。

「一匹」

「てめえ、ヤスオをよくも！！」

続いてヤスオという男の反対側に座っていた男が英才に蹴りを繰り出す。英才は右手で受け止めで脇に抱えてしつかりとホルドする。そして片足をとられて不安定になった男のもう片方の足を払って転ばせる。仰向けに転んだ男の顎めがけてサッカーボールキックを見舞う。

「が、い、い、いひゃい」

顎は流石にくだけなかったようだが、一撃出昏倒する。

「てめええ！！のんじゃねえぞ！！」

「死ねええ！！」

今度は二人がかりで襲いかかる男たち。それでも英才は動じることなくバックステップで避ける。そして一人の男の顔面にストレートを叩きこむ。バキッという音がし、鼻血が溢れる。どうやら鼻骨が折れたらしい。ひとまずその男を放っておくと、もう一人の男がハイキックをしてきたのでガード。そのまま急所を蹴り上げる。男はあまりの激痛に前かがみになる。英才はすかさず男の顔面めがけてアッパーをいれると、最初の男のように前歯が折れて出血する。

「あと二匹」

英才は腕についた返り血を制服で拭う。

「ひ、ひ、ひいいい！！」

英才の容赦のなさには恐怖し、パニックに陥ったのか、闇雲に腕を振り回しながら一人の男が突っ込んでくる。英才はまず鳩尾に蹴りをいれる。前屈みになって怯んだ男に背を向けて立ち、男の顎を両手で肩口に乗せて固定し、そのまま飛び上がった尻餅をつく。プロレス技の中でも危険な技、スタナーである。その衝撃は顎を砕かんばかり、脳を揺らさんばかり。男は仰向けに倒れ、白目を向いて痙攣

している。

「あと一匹や」

英才はゆっくり立ち上がり優子の近くで固まっている男に近づく。

「ま、待て！！俺たちが悪かった！！こ、この通りだ！！勘弁しー」
土下座をして許しをこう男の首を掴み、広いスペースへ投げる。

「ひい！！ゆ、許してー」

そのまま馬乗りになって男が逃げられないようにする。そして男の髪を左手で鷲掴みにする。右手を大きく振り上げ勢いよく男の顔面に叩きこむ。

バキッ！

「いゝち」

「た、助けて！」

バキッ！

「にーい」

「お、お願いー」

バキッ！

「さーん」

「ゆ、ゆふふいてー」

バキッ！

「しーい」

「ふぁ、ふぁが・・・」

バキッ！

「ごーお」

「・・・」

まるで子供がかくれんぼの鬼になって数えるような間のびした声で殴り続ける英才。五回目で男の意識は飛んだようである。だが――

バキッ！

「ろーく」

バキッ！

「しーち」

バキッ！

「はーち」

なおも続く英才の制裁。美波は葉月に見せないように目を隠してやりながら、瑞希はまだ目覚めない優子を気遣いながら、英才の常軌を逸脱した行動に恐怖していた。

バキッ！

「じゅーっさーん」

バキッ！

「じゅーっよーん」

「もう……もう止めてよ……英」

「……優子？」

十五回目の拳を振り上げたところで目覚めた優子が英才に抱きついて止める。

「それ以上やったら、死んじゃうよ……アタシは、アタシはもう……大丈夫だから、ね？」

まるで幼い子を諭す母親のように優しく呼びかける優子。

「……お前が無事なら……それでええ……」

男から手を放し、優子を抱きしめ返す英才。

「あ、姉上!!無事……」

「美波、姫路さん!だ……い……じよ……」

「おい、二人ともどうし……」

「……(パシャ)」

何が何だか分からない三人とシャッターを切る一名だった。

昼行灯に油、業火を鎮めるものは（後書き）

ちなみにスタナーとは素人が遊びで真似して死人が出たほど強力な技です。

露呈（前書き）

今、はしよったことを後悔しています

時間と場所は変わって清涼祭一日目が終了した後のFクラスの教室。教室内には明久、雄二、英才の三人しか残っていなかった。

「なあ、代表。何で俺まで残らないかんのや？はよ優子と秀吉と帰りたいんやけどねえ」

いつものようにだるそうに肩をもみながら言う英才。

「いや、ババアが来るまでいてもらうぞ」

「え？学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に『話を聞かせろ』ってな」

「話ねえ・・・ダメだよ、雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと」

「用事もくそも・・・この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因がーえええっ！？あ、あのババア！僕らに何か隠してたのか！」

「おい、お前らの企みごとの話やないか。俺は関係無いやないか」

「・・・とぼけるな。少なくともお前は一枚噛んでいるはずだ」

「えええっ！猪俣君がババアとつながってたの！？」
再び驚く明久。

「・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、うるさいガキ共だねえ」

教室のドアを開け入って来たのは学園長藤堂カヲル。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、何時の間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？・・・」

で？でかジャリ、アンタが何でいるんだい？」

「さあ」

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

「ふむ・・・やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ちかけられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。猪俣みたいな確実に勝てる勝ち馬に乗ればいい」

「あ、そういえばそうだよな。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってこと？」

「そういうことになるな。あの時、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか？」

「提案？えーっと」

「科目を決めさせろってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

「ああ。めばしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺たちだけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババアは提案を呑んだ。他にも学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、俺たちの対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あったしな。そして猪俣。お前はこの事態を見越していたはずだ」

「なんのこつちゃ？」

「お前はこの喫茶店のスポンサーを買って出て、本来のFクラスの設備が分からないようにした。これで相手が付け入る要素を無くした」

「たしかにみかん箱や腐った畳じゃ何いわれるか分からないしね」

「さらにムツツリー二に頼んで全客席に対してカメラを設置させた。案の定、あの二人組はそれに引っかった」

「そんな偶然やって。監視カメラぐらい今のご時世じゃ珍しくないやろ」

「確かにそうだが飲食店は別だ。監視カメラというのは店で寛ぐ客にとつては不快なものだ。だから本来はレジや出入り口ぐらいにしかつけない」

「雄二、そうだけどさ、それだけじゃ猪俣君がババアとつながってたつて言えないよ？」

「明久、思い出してみろ。設備に関してババアに交渉に行こうと言出したのはお前だったよな？」

「うん、だって猪俣君がそうしたらって・・・ああ!!」

「気づいたか。俺たちをババアのところに誘導したのは猪俣だったんだ」

「・・・はあ。でかジャリ、なんでもお見通しみたいだよ」

「婆さん、上手くやれ言うたやろうが」

言い逃れはできないと判断した2人はため息をつく。

「じゃあ、猪俣君、やつぱり・・・」

「婆さんにお前らを焚き付けさせたんは俺や。俺ん手にや負えんかったからな。ある程度、店絡みで営業妨害はある思うたんや。じゃけん、優子たちが誘拐されたんは予想外やったけんな」

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか・・・すまなかつたね」

英才たちに頭を下げる学園長。明久は目を丸くしていた。

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろう

と最初は考えていたのだろうけど・・・逆にでかジャリに潰されて、その上決勝まで進まれて焦ったんだろうね」

「さて、そろそろ本当のねらいを話してもらおうか」

「はぁ・・・アタシの無能を晒すようだから、できれば伏せておきたかったんだけどね・・・アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

「ペアチケットじゃない！？どういことですか！？」

「アタシにとっちゃあ企業の企みなんてどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう少し一つの賞品のほうなのさ」

「もう一つというと、『白金の腕輪』とやらか」

「ああ。あの特殊能力がつくとかなんとかってやつ？」

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」

「あのな・・・回収が目的だったら俺たちに依頼する必要はないだろう？そもそも、回収なんていう真似は極力避けたいだろうし、な」
「本当にアンタはよく頭が回るね・・・そうさ、できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使って見せてナンボのものだからね。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われることになる」

「それで、何でその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか？」

「・・・欠陥があつたからさ」

「欠陥？」

「成績優秀な高得点者が使うてもたら腕輪が暴走するんや。じゃかい点の高い優勝候補じゃのうて点の低いバカな優勝候補を起用せざるをえなかったんや」

「二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作製用はある程度まで耐えられるんだけどね・・・もう片方の同召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「へえ、そうだったんだ」

「明久、物凄い勢いでバカにされているのに気づけ。・・・そうか。そうなると、俺たちの邪魔をしてるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間——他校の経営者とその内通者といったところだな」

「・・・恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはないさね」
「それじゃ、営業妨害の二人組とか誘拐犯とかは」

「そいつん差し金やな」

「あのだ、これってかなりマズイ話じゃない？」

「そうだな。文月学園の存続が懸かっている話になるな」

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を放して回収したら——」
「残念やけん、そら無理や。お前ら、決勝の相手はあん坊主とソフトモヒカンや」

「えっ！Aクラスの人たちに社会的に抹殺されたはずじゃ！？」

「最初は教頭が鉄人に命令して奴らを解放させたんだろうが、二回目には多分違う。社会的に抹殺されたことを恨んで、名誉挽回のために這い上がって来たんだろう。向こうが勝ったら嬉々として暴走を起こすだろう」

「じゃかい、お前らには勝ってもらわにやいかんのや。ほら、これやるわ」

「そう言つて英才が二人に差し出したのは冊子だった。」

「これは？」

「俺が作った日本史の解説や。決勝は日本史やろ？明日ん朝にテスト受けんのやつたらこれで勉強しいや」

「一つや二つの科目が高得点でも暴走しないからね」

「なるほど、伝説の塾講師お手製か。ありがたくもらうぜ」

「じゃあ、雄二。聞きたいことは聞けたし、きょうはもう帰ろう」

「そうだな。家に帰つてやることもあるし——明日も早いしな」

明久と雄二は冊子を受け取ると帰って行った。

「で、アンタも明日は頼んだよ。例の話、忘れてないだろうね？」

「はいはい。やりますよ。めんどくやけん」

英才は首をコキコキ鳴らすと、鉄人に預けた優子と秀吉を迎えに行った。

昼行灯の気持ち

「西村先生、失礼します」

英才は生徒指導室のドアを開け、秀吉と話をしていた鉄人に呼びかける。

「二人を迎えに来ました」

「・・・猪俣、木下弟から全部話を聞いたぞ。そうとう荒れたようだな」

「最近いろいろストレスたまつとつて沸点が低くうなつとるんですわ」

「・・・一応、学園としては不問にしておくが、あまり暴力沙汰を起こすなよ」

「それはウチンクラスのバカ共に言うてくださいや。・・・まあ、何にせよ、秀吉と優子預かってもらて助かりましたわ。秀吉、優子、帰るで」

「そうしたいのじゃが、姉上が寝てしもうたのじゃ」

そう言う秀吉にもたれかかるして、静かに寝息を立てている優子。

「木下姉もいろいろあつたからな。疲れたんだろ。猪俣、お前たちを俺の車で送って行こうか？」

「いや、ええですわ。おれが負ぶってかえりますんで」

「そうか。帰り道に気をつけろよ」

そう言う英才は優子を背負い、英才と共に生徒指導室を後にした。

「のう、英才」

「なんや？」

「今日は本当に助かったわい。ありがとうなのじゃ」

帰り道、秀吉は英才に優子救出の礼を言々と頭を下げる。

「礼には及ばんて。俺も気づいたら勝手に身体が動いたんやから」

「考えるよりも先に感情で動いたわけじゃな」

「……俺はあの日、あの公園でお前らに出会わんかったら今ここにおらん。お前や優子になにかあったらと思うと、あの頃の毎日をもとって来そうでこわいんや……」

英才の言葉に暗い表情になる秀吉。

「今まで、お前もそうやが優子は俺にとって大事な人で可愛い幼馴染やと思うとった。でん、今日、優子が誘拐されて、優子に止められたとき、優子がもっと特別な存在なんやって気づいた」

「やはり、お主は姉上のことを……」

「じゃけん一方で昔んこつが吹っ切れんでいる自分もある。俺に幸せになる権利はないんや、とな」

「お主、まだ……」

「さつ、お前ん家に着いたで。優子どうしよか？」

「リビングのソファーに寝かせておいて貰えると助かるのじゃ。母上も父上も今は留守にしておるから大丈夫じゃ」

「わかったわ」

英才は木下家に上がり、優子をソファーに寝かせる。

「じゃ、俺は帰るで。明日ん朝はむかえに来っかい、待ときいや」
「うむ。ではまた明日なのじゃ」

「姉上、起きておるのじゃろう？」

「ち、違っわよ！英の本音なんてー」

「聞いておったのじゃな」

顔を真っ赤にしている姉に苦笑いする秀吉。

「後は英才が自分に踏ん切りをつけるだけじゃな・・・」

「・・・そうね」

「まあ、ワシの義兄上になるのはそう遠くはあるまい」

「コラっ！秀吉！！」

「あ、姉上！間接はそちらに曲げるものではな・・・」

いつも通りにもどった二人。優子の顔はどこか嬉しそうだった。

「

召喚大会決勝へ

「皆、おはようなのじゃ」

「お、もう来とったんか」

「あ、秀吉に猪俣君。おはよう」

「お前らも何もなかったようだな」

翌朝、英才は秀吉と優子と一緒に登校し、Aクラスの優子と別れてからFクラスに行くと、すでに明久たちがいた。

「っ！！」

「い、猪俣君達も早いですね・・・」

英才を見て少し後ずさる美波と瑞希。昨日の英才の非情かつ一方的な制裁を見た影響らしい。あからさまに見て分かる反応だった。

「で？お前らテストはどうやったんや？」

「ああ、アレのおかげで何とかなったぞ」

「うん、僕でもバッチリ理解できたしね」

「まあ、これで昨日の放課後の件とチャラや。俺にわざわざここのまですらせたんやかい、勝たんと承知せんぞ」

「なに、試召戦争の時とは違ってお前がバックについたんだ。負けはしない」

「ねえ雄二、早く屋上に行って寝ようよ。時間もないしさ」

あくびを噛み殺しながら言う明久。どうやら徹夜だったらしい。

「ああ。それじゃ皆、店の方をよろしくな」

明久と雄二は教室内を出て行った。

「さて、俺もぬけるで」

「？なぜじゃ？」

「いや、昨日暴れ過ぎたかい、その後始末やら何やら、その他諸々

やるこつがぎょうさんあるんや」

昨日の、と聞いて思い出したのか美波と瑞希が顔をしかめる。

「お主もたいへんじゃのう。わかったぞい。厨房はムツツリーニや須川に任せて行つてくるのじゃ」

「・・・・・・（グツ）」

康太はまかせとけ、と言いたいらしく、サムズアップしてみせる。

「んじゃ、頼むわ」

相変わらずだるそうに肩をもみながら英才は教室を出て行つた。

「・・・・・・島田、姫路よ。英才は何も言わぬが、その反応はどうかと思うのじゃ。やり方はともかく、お主らは英才に助けられたのじやろう?」

ずっと二人の様子が気になっていたのか、秀吉が美波と瑞希に注意する。少々、怒っているようだった。

「え、ええ。そうね・・・・・・」

「確かに、失礼ですよね・・・・・・」

「ぎこちない笑みで応える二人だった。」

―午後1時―

校庭の特設ステージでは決勝戦が始まるうとしていた。決勝戦だけに、観客の数も前日なよりも増えていた。

『さて皆様。長らくお待ち致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！出場選手の入場です！』司会のアナウンスと共に二組が入場してくる。

『二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です！皆様、拍手でお迎えください！なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラス生徒のコンビです！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

明久と雄二に惜しめない拍手がおくられる。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川―』

『きゃあっ！昨日、メイド服姿で女子トイレにいた変態コンビよ！』

『！』
『うわぁ・・・』

『あんな変態は負けちまえ！』

こちらには惜しめないバッシングが浴びせられる。

『――紹介は割愛致します。それではルールを説明します――』

「よう、変態のセンパイ方。メイド服じゃなくていいのか？」

ニヤニヤしながらとソフトモヒカンと坊主に、いやみたらしくいう雄二。

「てめえ……お前らのせいで、会う奴皆から蔑んだ目で見られるんだぞ！」

「安心しろ。俺は蔑んだ目で見ちゃいない。ゴミ屑を見る目で見ているつもりだ」

「て、てめえ！先輩にむかって！」

雄二の挑発にのる二人。

「先輩。一つ聞きたいことがあります」

「あんだ？」

「教頭先生に協力している理由はなんですか？」

真面目な顔で尋ねる明久に驚いた顔をする坊主。

「……そうかい。事情は理解してるってコトかい」

「大体は。それでどうなんですか？」

「進学だよ。上手くやれば推薦状を書いてくれるらしいからな……でも！てめえらのせいで台無しだ！！痴漢だの変態呼ばわりされて評価がガタ落ちだ！！俺たちはなんとしても勝って汚名返上してやる！！」

「そうですか……そっちの、ソフトモヒカン先輩も同じようですね」

「常村だコラア！！」

「まあまあ、そう吠えるなつて。アンタらは負けてこれから女装趣味の変態として生きて行くんだからよ」

「ハッ！言ってる！Fクラスのお前らがAクラスの俺たちに勝てるわけないだろ！」

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』
司会のアナウンスで立会いの教師が出て来る。

「……試^{サモン}獣召喚」「……」

『Aクラス 常村優作 & Aクラス 夏川俊平
日本史 209点 & 197点』

四人の召喚獣が召喚され、先に坊主とソフトモヒカンの点が表示される。点数を見て黙り込む明久と雄二。

「どうした？俺たちの点数見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれなような点数だからな。無理もないな」

勝ち誇った顔をする変態コンビ。

「いや、ね、雄二」

「ああ、あいつに比べたら、な」

逆にかわいそうな人を見る目で見る明久と雄二。

「さつさとお前らの貧相な点数を見せるよ！」

「夏川、あまりいじめるなよ。かわいそうだろ」

「いやだから、お前らだって」

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久
日本史 394点 & 287点』

「「なっ!?!」」

自分たちよりも高い点数に驚く変態たち。

「俺たちには伝説の男がついているからな」

「さて、先輩方。アンタらは絶対にブッ倒してやる!」

授賞式と・・・

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

「いいいよつしゃああー!!」

勝利の雄叫びをあげる明久。変態コンビはがつくりとうなだれながらステージを下りていった。

『それでは授賞式に移りたいと思います。優勝した坂本・吉井ペアには如月ハイランドのペアチケット、そして新技術を搭載した「白金の腕輪」が贈呈されます。贈呈するのは当学園の学園長、藤堂力ヲル先生です!』

司会のアナウンスでステージに学園長が上がる。

「優勝おめでとう。これからも勉学に励むんだよ（二人とも、よくやってくれたね。助かったよ）」

大っぴらに話す訳もいかないので、ペアチケットの封筒に感謝の言葉が記されていた。

「ああ」

「ありがとうございます。」

「そしてこれが『白金の腕輪』だよ。吉井のは一つはテストの点数を二分して二体の召喚獣を同時に召喚できる同時召喚型で起動ワードは『ダブル』。坂本のは科目をランダムで選択してフィールドを展開できるフィールド作製型、起動ワードは『アウェイクン』。ただ、起動している間、アンタは召喚できないよ」

次に二人には腕輪とそのマニュアルが渡され、学園長が簡単な説明をする。

「へえー、雄二、次の戦争が楽しみだね」

「いや、明久。デモンストレーションがあるのを忘れたのか?三ヶ

月後じゃなくて今から使っんだ」

「そうだよ。アンタたちにはデモンストレーションとしてある男と戦ってもらっよ」

「ある男？」

明久は首を傾げ、学園長は司会に目配せをする。

『それでは皆さん、次にデモンストレーションを兼ねたエキシビションマッチに移りたいと思います。今回、坂本・吉井ペアに戦ってもらうのはー』

「おい、ババア・・・まさか・・・」

「え？誰なの？」

「見てれば分かるさね」

学園長はニヤリと笑う。

『当学園開校以来初の特別講師にして歴代最優秀成績者であります

ー』

「ええっ！何でー！」

「姿が見えないと思ったらこういうことか」

「二年Fクラス所属、猪俣英才君ですー！」

司会のアナウンスでステージに現れたのは二人が知る眼帯大男だった。

エキシビジョンマッチ・ルール説明（前書き）

誰でも感想を投稿できるように設定しました。よろしければ感想をお寄せください。

エキシビジョンマッチ・ルール説明

「よう、吉井に代表。何とか勝てたようやな」

「ラスボスの後に裏ボスと戦うなんて思いもしなかったがな」

「でもさ、猪俣君と僕らじゃ差が圧倒的じゃない？」

「フィードバックが気になるのか、明久が尋ねる。」

「心配すんなや。ハンデぐらいやるわ」

今度は英才が司会に目配せをする。

『それではルールを説明します。選択科目は坂本君の腕輪によるラウンド。吉井君には腕輪を使用して戦ってもらいます。そしてこの試合は猪俣君の提案により、特殊な試合形式になっています。坂本・吉井ペアと猪俣君の点数の差が多いため、ハンデとして二人には大会参加者から二組を味方として参戦させる権利が与えられます。次に勝敗の決着方ですがー』

今度は司会が英才に目配せをする。すると英才はポケットからなにかのスイッチを取り出す。

「何だ？」

「まあみてろや」

カチッと英才がスイッチを押す。すると機械音と共に英才たちが立っているステージ中央部がせりあがって行き、本来の高さから一メートルぐらいで停止する。

「え！？何これ！？」

明久は仕掛けに子供のように興奮していた。

『勝敗の決着は本来の戦死に加えて、この特別ステージからの転落、つまりリングアウトも負けとみなします。召喚獣の体がリング外触れた時点で決定となります。それでは、坂本・吉井ペアには味方となる二組を選んでいただきます！うー！』

「おいおい、ハンデとは舐めた真似をしてくれるじゃねえか」

「お前は召喚できないんやし、吉井だけじゃ俺にや勝てん。前と一緒や。ハンデをくれてやってん何の問題もない。で？誰かにするんか？」

「・・・まったく。それじゃあ、姫路・島田ペアと霧島・木下ペアで頼む！」

『分かりました。それでは今呼ばれた二組はステージに来てーって、もう来ているようですね。それでは紹介しましょう！二年Fクラス所属・姫路瑞希さん、島田美波さん、二年Aクラス所属・霧島翔子さん、木下優子さんの四人です！』

司会のアナウンスで四人がステージに上がる。翔子は平然とし、優子はすこし緊張感気味、美波と瑞希は英才を気にしつつも、明久を助けて好感度を上げることと頭がいっぱいのようだった。

『それでは、選手の皆さん、準備をしてください。』

「まさか、猪俣君と勝負することになるなんてね」

「ああ。さっきの変態センパイが霞むよな」

「・・・雄二は私が守る」

「こ、こら！翔子！引つ付くな！！第一俺はフィールド展開するだけだから召喚しない！！」

「瑞希、これは二重の意味でチャンスよ！！」

「はい！ついでに猪俣君を倒しましょう！！」

普段、色々と恋路を邪魔する英才に二人は勝つ気にいるようである。

「英・・・今日は負けないわよ！」

「はは、期待しとくわ」

お互いにほほ笑む英才と優子。

『異端者じゃああ!!』

という声がどこから聞こえた気がした。

『それでは皆さん、準備がよろしいようです。では、ただいまヨリエキシビジョンマッチを始めます！選手の皆さん、どうぞ!!』

「アウェイクン！」

「「「「試獣召喚」「」」」」

こうして、5対1のハンデ戦の幕が上がった。

V S 昼行灯 ?

『Aクラス 霧島翔子

世界史 614点』

『Aクラス 木下優子

世界史 584点』

『Fクラス 姫路瑞希

世界史 372点』

『Fクラス 吉井明久

世界史 64点』

『Fクラス 島田美波

世界史 41点』

V S

『Fクラス 猪俣英才

世界史 3288点』

点数が表示されると、観客がざわつき始めた。

「ランダムで俺ん得意科目か」

「ちよっと！僕たちの合計よりも高いじゃないか！！」

「ウチらが不利じゃない！！」

英才の規格外の点数に抗議する明久と美波。

「いや、そうでもないやろ。腕輪持つとる霧島と優子、そこその点の姫路、操作が一番上手い吉井。一人一人の質が高いからやつかいやで。自分で言つといてなんやけど、今回の4対1はきついわ」
「ちよっと！ウチがはいってないじゃない！！5対1でしようが！！！」

「ああ、確かに吉井がもう一体召喚すりやそうなるわな。悪い、忘

れとったわ」

英才は美波など眼中に無いように振る舞う。

「いつもウチの邪魔をしたり、バカにしたり！！今日という今日はアンタを潰すわ！！」

「美波ちゃん！？」

英才の態度に頭にきたらしく、単身で英才の召喚獣に突撃する美波の召喚獣。

「・・・面白いぐらいに乗ってくれるんやなあ。呆れるのを通り越して清々しいわ」

英才の召喚獣は美波の召喚獣の突きをかわすと、鉄球の鎖で足をかけて転ばせる。そして転んだ美波の召喚獣を場外にむけて蹴り飛ばした。

『Fクラス 島田美波
リングアウト』

「一番弱い奴を最初に始末。兵法の基本や」

「い、猪俣ああ！！」

無様な負けに対する恥ずかしさと英才への怒りで顔を真っ赤に染める美波。そんな美波を優子は呆れたように見ていた。

「さて、吉井君、腕輪を使って。英の言う通りそれで頭数は足りるわ」

「う、うん。ダブル！」

明久が起動ワードを口にすると、召喚獣がひかりに包まれ、同じ召喚獣が二体出現する。

「吉井、使い方勝つてはどうや？」

「うん。ちょっと難しそうだけど、なんとかかなりそうだよ」

木刀を振るったり、飛んだりさせながら言う明久。

「・・・勝負はこれから」

「ええ、始めましょう！姫路さん、吉井君、構えて！！」

「は、はいっ！」

「よし、いこう、皆！」

「よっしゃ、勝負スタートや！」

まるで今から勝負が始まったかのような雰囲気、早々に脱落した美波は置いてけぼりにされていた。

V S 昼行灯 ? (後書き)

いまさらですが、翔子、優子の腕輪はオリジナル設定です。

V S 昼行灯 ? (前書き)

短いです

V S 昼行灯 ？

「……先手必勝」

翔子の言葉と共に召喚獣の腕輪が光り出す。すると、英才の召喚獣の足首から下がいきなり凍り、その場から動けなくなってしまう。それを見て今度は明久の二体のうち一体、瑞希の召喚獣が突撃する。優子はまだ英才の出方を見ているのか、距離をとったままだった。

「あら？ いきなり腕輪かい。 はなっからヤバーーーくはない」

英才の召喚獣が瑞希の召喚獣目掛けて鉄球を真っ直ぐに飛ばす。

「そんなもの、当たりません！」

瑞希の召喚獣はジャンプしてかわし、突撃を再開する。

「……ダメだ、姫路さん！」

「え？」

「あらよつと」

英才の召喚獣は鎖を思いっきり引き、鉄球を引き戻す。以前、英才から助けて貰った際に同じ攻撃を見た明久が叫ぶも遅かった。戻ってきた鉄球に当たってしまう。

『Fクラス 姫路瑞希

世界史 46点』

そしてそのまま英才の召喚獣の方へと飛ばされて行く。

「お、ど真ん中どストライク。 ええ球やないか」

英才の召喚獣はバッティングの様に手枷で拘束されている両腕を構える。

「くそっ！ 間に合え！！」

明久の召喚獣が救出に向かおうとスピードを上げる。だがー

「はーい、一名様ご案内ーい」

英才の召喚獣が瑞希の召喚獣の頭部に腕をフルスイングさせて当てる。それとほぼ同時に、勢いを失わずに戻ってきていた鉄球が瑞希の召喚獣の背に再び衝突し、サンドイッチされる形になった。そし

て瑞希の召喚獣は英才の召喚獣の後方に飛んで行った。

『Fクラス 姫路瑞希
世界史 0点』

V S 昼行灯 ？

英才の召喚獣は瑞希の召喚獣を倒すと急いで鉄球を自分の前にセツトする。なぜならー

「っ！ばれていたようね」

鉄球には優子の召喚獣が腕輪の能力で飛ばした刺突の衝撃が当たる。「敵を仕留める瞬間、油断するもんやからな。危ない危ないー」って安心したところに吉井かい」

横から明久の召喚獣が木刀で英才の召喚獣の喉目掛け突き上げる。しかし、英才の召喚獣はわずかに体を動かしただけで避け、腕を振り回し反撃に出る。だが、明久も紙一重でかわす。そして召喚獣の重心が片足に全て移ったときを見計らって英才の召喚獣が足を払って転ばせる。そしてこんどは顔面に両腕を振り落とし、戦闘不能にさせる。

「ぎゃあああ！顔っ！顔がいたい！！」

フィードバックがきたらしく、明久がのたうちまわる。

「明久！！単体攻撃じゃダメだ！翔子がヤツの動きを封じている間に、同時攻撃するんだ！」

見かねた雄二が叫ぶ。

「封じてるって・・・ああ、氷か」

雄二の言葉を聞いた英才は手枷の縁で氷を叩き割り、自由を取り戻す。

「さて、次はこっちからや」

翔子が少しおどろいていたが、それに構わず英才の召喚獣は鎖を持ち、鉄球にしがみつく。

「猪俣、なにがしたいんだ？」

「こうしたいんや」

すると、鉄球がそのまま回転を始め、しだいに回転測度を増して行く。

「ええっ！？なんで潰れないの！？」

「お前らん召喚獣と違って体が頑丈なんや。そら、行くで」

その場で高速回転しているだけだった鉄球はいきなり翔子の方へと転がりはじめた。

「代表！！」

「・・・優子、大丈夫。また止めればいい」

最初のように翔子の召喚獣の腕輪が光り出す。だがー

「・・・？どうして？」

一向に凍る気配がない。

「球状の物体は地面と接する面積が小さい上に高速で移動しとるんや。さつきは静止しとったから上手くいっただけや。ほら、轢き殺すで」

ステージの端に立つ翔子の召喚獣と英才の召喚獣の距離は縮んで行く。

「・・・なら勝手に落ちればいい」

翔子は英才の召喚獣のスピードから止まれずに落ちると判断したのか、左に避ける。「いや、ダメだ！畏だ、翔子！！」

「・・・雄二？」

なんと英才の召喚獣は落ちる寸前で一瞬だけ停止し、そのまま翔子の召喚獣の方へと進路を変えたのだ。直角に曲がるという信じ難いものだった。そのまま英才の召喚獣は翔子の召喚獣を場外に撥ね飛ばした。

『Aクラス 霧島翔子
リングアウト』

V S 昼行灯 ? (後書き)

わかりにくかったと思いますが、戦国バサラ3の黒田官兵衛の固有技、災い転じて、をイメージして下さい。実際、ゲームでは直角に曲がれます。

V S 昼行灯 ？

「木下姉、明久！来るぞ！」

英才の召喚獣は勢いそのまま優子と明久の召喚獣に迫る。

「吉井君、早く立て直して！」

「う、うん！ダブル！」

それまでのたうちまわっていた明久は痛そうに頬をさすりながら立ち上がって再び腕輪を起動させる。

「英！喰らいなさい！」

優子の召喚獣は腕輪を使用して転がって来る英才の召喚獣に刺突の衝撃を飛ばす。

「またそれかい」

英才はめんどくさそうに言うと、召喚獣にジャンプさせて避けさせる。

「今よ！吉井君！！」

「オツケー！」

優子が明久に合図をすると、明久の二体の召喚獣もジャンプをして英才の召喚獣の上につける。

「喰らええええ！！」

二体の召喚獣が同時に木刀を振り落とす。空中で、しかも攻撃の特性的にも避けられない英才の召喚獣に諸に命中し、床に叩きつける。すると、英才は召喚獣は回転攻撃の体勢を解いた。

『Fクラス 猪俣英才

世界史 3027点』

「あら、貰うてしもうたな」

「やっと攻撃が当たったわね・・・」

「う、腕が痺れる・・・」

試合開始後初の英才へのダメージ。微々たるものだったが、優子と明久にとっては大きな進歩だった。

V S 昼行灯 ？

「まだまだ行くわよ！」

勢いづいた優子が刺突を飛ばす。英才の召喚獣は鉄球の後ろに隠れたが、鉄球には当たらず、召喚獣よりも右側に着弾する。

「優子、ちゃんと狙わな点数もつたいないで？そろそろ点数やバイんと違う？」

『Aクラス 木下優子

世界史 443点』

英才の言うとおり、腕輪の使用は強力な効果をもたらす代わりに点数を消費してしまう、いわば諸刃の剣でもある。実際、優子はあと1、2発が限界だった。

「余計なお世話よ。吉井君、援護をするから左右から攻めて！」

「わかった！」

明久は二体の召喚獣を左右に分かれさせ、英才の召喚獣に突撃させる。

「はぁ・・・んじゃ、指揮官から潰すかねえ」

英才の召喚獣はドロップキックの体勢に入るために、鉄球から後退する。

「あのとと同じ手は喰わないわ！」

優子の召喚獣は高く飛び上がり、なおかつ腕輪を使用して刺突を飛ばす。英才の召喚獣の前には鉄球、左右からは明久の召喚獣と、逃げられない状況だった。

「・・・裏を返せば、違う手ならいいんやな？」

「え？」

英才の召喚獣はそのまま鉄球に向かって走りこみ、片足で鉄球を大

きく蹴り上げる。そのまま飛んで行って刺突も打ち消し、優子の召喚獣に命中する。

『Aクラス 木下優子
リングアウト』

「っ！！！！しもうたな、罨やったんかい！」

確かに優子の召喚獣をリングアウトさせたものの、鉄球までもがリング外に飛んで行ってしまった。

「かかったわね！最初は外したんじゃないの！鎖を切るために狙ったのよ！」

優子はしてやったり！、といった顔をしている。鎖が切れて鉄球を失った今、英才の召喚獣は無防備であり、しかも、両腕を拘束する手枷で動きが制限されてしまう。

「明久！お前が決める！」

「チャンスよ、アキ！！！」

「がんばってください！！！」

「英、終わりよ！！！」

「うん、ありがとう、皆！！！」

声援を背に受け、明久の召喚獣が英才の召喚獣に木刀を振り下ろす。

バキイイイ！！

攻撃は召喚獣の頭部を捉えた。

勝者

急所への有効打は大ダメージを与える。武器によっては即死攻撃となる。故に、英才の高得点の召喚獣とてひとたまりもない。英才の召喚獣への頭部同時攻撃は致命打となる

と、誰もが確信していた。

『Fクラス 吉井明久
世界史 0点』

頭部に攻撃を喰らい倒れ伏したのは明久の二体の召喚獣だった。英才の召喚獣は攻撃の直前、手枷で不自由な両腕を地面について逆立ちになって回転し、足で二体の召喚獣の頭部を蹴り飛ばしたのだった。

「おゝ、今は冗談抜きであぶなかったわ」

「くっ！カポエイラか！」

悔しそうに呟く雄二。

「カポエイラは手枷をつけた奴隷が、舞踊に見せかけて練習して看守の目を欺いていたつちゅう説があったぐらいや。まさに俺ん召喚獣にうつてつけやる？」

ニヤニヤしながら雄二に言う英才。

『激戦を制したのは二年Fクラス、猪俣英才君です！みなさん、大きな拍手をお願いします！』

司会のアナウンスで会場から大きな歓声と拍手が浴びせられる。

『それでは、以上をもちまして召喚大会の全て終了いたします。皆さん、清涼際を最後まで満喫してください！』

こうして激戦の幕が下りた。

？作者より御礼

気がつけば累計十万PVを突破し、連載開始から一ヶ月たっていないのに五十話を突破していました。

皆さん、本当にありがとうございます。相も変わらず表現や描写に乏しい小説ですが、精一杯がんばって行きたいと思っています。

清涼祭編が終わったら、強化合宿・英才過去編に入りたいと思います。

そして、もともとは強化合宿で終わる予定だったんですが、もう少しやってみようかと思っています。

これからもよろしく願います。

皆さんからの感想なども随時お待ちしております。

清涼祭終了

「お兄ちゃん！すつつつごいかつこよかったよ！」

「ぐふっ！は、葉月ちゃん・・・今日も来てくれたんだ。どうもありがとう」

英才を含むＦクラス一行が会場から教室に戻ると、葉月が明久に飛びつく。

「あっ！大っきいお兄ちゃんもすごかったですっ！」

「は、葉月！やめなさい！」

続いて英才に飛びつこうとする葉月を美波が止める。やはり誘拐の時の事が忘れられないようである。

「皆お帰りなのじゃ！」

店の奥から秀吉が出てくる。

「優勝とはすごいではないか！」

「はは、猪俣君には負けちゃったけどね・・・」

興奮気味の秀吉に苦笑いする明久。

「そんなことないわよ！あと少しでコイツを倒せたじゃない！」

「そうですねっ！猪俣君の負けのようなものです！」

英才がいるのにも構わず明久に声をかける二人。

「姫路はともかく、まんまと安い挑発に乗って憐れ無残にリングアウトしたヤツに言われとうないな」

「なんですってえ〜！」

英才の言葉に怒る美波。

「落ち着け島田。客がいるんだ」

「そうじゃぞ、島田。分別をわきまえるのじゃ！」

なだめる雄二と、美波と瑞希の言葉に腹を立てたらしい秀吉が強く言う。

「さて、戻ってすぐで悪いのじゃが、明久と雄二の優勝、英才の勝利のおかげで客が増えて大変なんじゃ」

よく回りを見てみると、客席は満席で、教室の外にも行列ができて始めている。

「どら、手伝うかねえ」

「うん、そうだね」

「やれやれ、かつたるいが仕方が無いか」

「・・・しょうがないわね。瑞希、手伝いましょ！」

「はいっ！」

・・・

・・・

・・・

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒はすみやかに撤収作業を行ってください』

数時間後、アナウンスが流れ清涼祭が終わった。Fクラスの場合、店の設備は英才が業者に依頼したため、撤収作業はナシとなり清掃作業のみだった。

英才が業者に代金を支払い、Fクラスに戻る途中、学園長室を通った時だった。

「おい、夏川！まだか？」

「待て、まだ決定的なところが録音できていない！」

ドアの前でなにやらコソコソやっている二人組が。後ろの英才には気づいていないようである。

「！！よし、いいぞ！これを流せば奴らは終わりだ！」

「おい、変態共。何が終わるんや？」

二人が振り返った瞬間、英才が二人の首を掴む。

「なっ！てめえ、何でここに！？」

「ちくしょう！はなしやがれ！！」

ジタバタと暴れる二人。

「事情は知らんが、よからんことつちゆうこつあ確かのような。いやあ、最近はストレス解消の機会に恵まれとる・・・っなあ！」

英才はすばやく手を放し、二人の後頭部を掴む。そして二人の顔面同士を思いつきりぶつける。

「ぐっ！ぐううう！！」

「んんんん！！」

坊主とソフトモヒカンはキス、つまりマウスとウマウスを強制され、必死に逃れようとするが、押さえつける英才の力が強いためにそれができない。

「雄二！向こうは例の坊主とソフトモヒカ・・・」

「おい、明久！急に止まるん・・・」

「明久！雄二！ワシとムツツリー二も追・・・」

「・・・（パシャ）」

学園長室から飛び出てきた四人が出て来る直前、英才が手を放したため、坊主とソフトモヒカンによる汚い絵面だけが残り、三人は固まり、一人は固まりながらも反射的にシャッターを切っていた。

打ち上げ？

結局、坊主とソフトモヒカンが汚い絵面を見せられた明久と雄二の手によってボコボコにされ、録音機を回収された。明久と雄二はそれだけでは飽き足らず、康太に二人のKiss写真を何枚も印刷させ、『僕たち、愛し合ってます』と書き込みをした上で校内中からは撒いたのだった。

「つたく、少しはスッキリしたな」

「ホントだよ。あの二人、本物の変態だったんだね」

「人の性癖嗜好はそれぞれや。ああいうのも世の中にいるんやろ」

教室に戻り、一息つく一行。仕掛人である英才は知らん顔で通すらしい。

「おい、坂本！これからの打ち上げ、どうする？」

「ん？須川か。そうだな・・・場所がないしなあ・・・」

「だったらうってつけの場所があるぞい！」

「ん？秀吉、どこだ？」

「英才のマンションのホールじゃ。ワンフロアを改造して作ってるから広いぞい」

「待てや、何で俺とこなんや。これ以上の面倒はー」

「姉上たちも呼べばよろう」

「しゃあない、Ａクラスと一緒にならええで」

あつさりと態度を変える英才。

「雄二、猪俣君の動かし方が分かった木がするよ」

「そうだな」

苦笑いする明久と雄二。

「じゃ、代表。俺は先に帰って準備しとくから、Ａクラスへの連絡頼むで。秀吉はあとからバカ共を連れて来いや」

「分かったのじゃ」

英才は一人教室を出て行つた。

―三十分後―

秀吉に連れられ、Ｆクラス一行はあるマンションの下に来ていた。マンションは十四階建てで、流行りのデザイナーズマンション。割と新しいようだった。

「秀吉、ホールってこの中にあるの？」

「十三階にあるぞい」

「へえ。でもさあ、僕たちが勝手に使っちゃっていいの？」

「大丈夫じゃ。このマンション自体、英才が経営しておるからのう」
「・・・・・・・・秀吉、冗談だろ？」

雄二を含め、全員が呆気にとられる。

「本当じゃ。このマンションは一階がロビー、二階から十二階が一般入居者の家賃二十万の部屋、十三階が多目的ホール、十四階が英

才の部屋じゃ。十四階には英才から貰ったワシと姉上の部屋もあるのじゃ」

「やっぱりアイツ、無茶苦茶じゃない・・・」

「二十万って、一フロアに・・・十五部屋あるから・・・ってえええええ!!」

「明久、そういう計算はできるんだな」

「・・・羨ましい」

改めて英才の財力に驚く面々だった。

打ち上げ？

『『『『うおおお！！』『』『』』』』』

Fクラス一行が十三階多目的ホールにはいると、そこには英才が用意した宅配ピザやカンジューズが沢山乗せられた机がずらりと並んでいた。

「自由に飲み食いして構わん。でん、Aクラスの方もとっときいや」
『よっしゃあああ！！』

『このピザは俺のもんじゃあああ！！』

英才の言葉を皮切りに、一斉にピザに群がるFクラス。

「やった！！固形物だ！！カロリーだ！！」

「明久よ、ピザを泣きながら食べているのはお主だけじゃぞ」

「……（モグモグ）」

「助かるな、ちょうど腹が減ってたんだ」

それぞれピザを手取る四人。一人だけ泣きながらうれしそうであったが。

「アキってピザが好きなのね」

「私、今度作ってみます！」

そんな明久を見て、女子二人は新たなアプローチ計画を練っていた。

「英、秀吉！連れて来たわよ！」

「ヤッホー、ボクたちもお邪魔するよ」

「猪俣先生、お邪魔します」

しばらくすると、優子、愛子、利光を先頭にAクラスがホールに入ってきた。

「おう、優子。旧に悪りいな」

「そうでもないわ。私も打ち上げにここを借りたいと思っていたの」
流石は双子。考えることは一致することもあるらしい。

「でもさあ、優子の話って本当だったんだね。ボクもこんなオシヤレなところに住んでみたいよ。優子はいいいねえ、将来ずっと住めるんだから」

「その気になれば今からでも住めるわよっ！」

「姉上、突っ込みどころが違うのじゃ」

入ってくるなり恒例の優子いじりを始める愛子。秀吉は苦笑いしながら見ていた。

「諸君、我々はこの二日間、我慢に我慢を重ねて来た。だが、全てが終わった今、異端審問会を開く。被告人、猪俣英才の罪状を読み上げる！」

「はっ！須川会長！しかし、数えきれないであります！」

「つまり、どういうことだね？」

「はっ！彼奴だけ美少女と絡みやがって、しかも同棲可能など、まさに不純異性交遊の極まりであります！」

「まさにそのとおりだ。ここに、被告人の死刑が確定した。被告人、何か言い残すことはあるか？」

明久、雄二、康太、秀吉を除くFクラス男子が覆面姿となって英才を取り囲む。

「な、何なのよ、この人たち！？」

「気にすんなや。ただの負け犬集団や」

「諸君！男とは？」

「『愛を捨て哀に生きるもの！』」

「異端者には？」

「『死の鉄槌を！』」

「『よろしい。では、我らの血の盟約に背きし異端者を処刑せよ！』」

須川の号令で一斉に英才に襲いかかるFFF団。

「死ねええ！リア充がああ！」

『昨日からイチャイチャしやがって!』

先程まで誰の奢りでピザを貪っていたのかはもはや頭にはないようである。

「お前ら、ちと待ったとき。ゴミを片付けにゃいかん」

英才はAクラスの面々に待つように言うと、いつものように襲いかかる暴徒を裁き始めたのだった。

打ち上げ？（前書き）

Twitterなるものを始めました。

ユーザー名・14issaturday

です。

そちらにも感想やご意見、その他雑談など、お願いします。

打ち上げ？

英才が暴徒を片付け、ホール隅にその屍を積み上げた後、ようやく
Aクラス生徒はくつろぐことができるようになった。

「・・・雄二、特製のバジルソースで食べて」

「俺が知るバジルソースは紫色なんてしていないんだが」

「・・・いいから食べる」

「ま、待て！お前、また変な薬を入れただろ！？」

あるところでは一匹のゴリラが逃げ回り、

「アキ、こつちのシーフードピザを食べましょう！」

「いいえ！明久君は私とマルガリータを食べるんです！」

「えっ！？僕はこの照り焼きマヨチキンピザが・・・って、や、や
めて！腕が、肩が壊れるから引つ張らないでえええ！！」

あるところでは一人のバカの奪い合いが起こり、

「ねえねえ、ムツツリー二君！」

「・・・（プイっ）」

「もうっ、つれないなあ。そうだ！ムツツリー二君だけにいいこ
と教えてあげるよ！」

「？」

「実は・・・ボク、今日ノーブラなんだ」

「・・・！！！？（ブシャアアア）」

あるところでは一人のムツツリが多量の鼻血を噴き出していた。

『猪俣先生っ、今日の試合見てましたよ!』
『多対一で勝てるなんてすごいです!』
『今度勉強だけじゃなくて召喚獣の操作も教えてくださいね?』
『猪俣先生、自習時間以外で授業はないんですか?』
こちらでは眼帯の大男がAクラス生徒達に囲まれていた。どうやらエキシビジョンマッチとして行ったハンディキャップマッチでの勝利が生徒達の学習意欲などをさらにかきたてたのが原因らしい。大男は一人一人に丁寧に答えていた。

「……………」

そんな大男、英才の様子を優子は離れたところで眺めていた。嬉しそうにも悲しそうにも見える複雑な表情だった。

「なかなか二人きりにはなれぬものじゃな、姉上」

「……秀吉」

ポツンと一人でいる姉に声をかける弟。

「しょうがないじゃない、人気者さんは」

拗ねたように頬を膨らませる優子。

「はは、妬いておるのう」

姉に苦笑いする秀吉。

「姉上の気持ちも分からんではないが、喜ばしいことではないか」
「何がよ？」

「今までワシと姉上にしか心を開かず、他の者ともあまり関わりをもとくとせんかった英才が、最近少しづつじゃが変わりつつあるのじゃ。良いことじゃろう？」

「……確かに、昔や去年と比べたらね……」

優子の脳裏には初めて出会った頃の英才が浮かぶ。今とは違って背も小さく、やせ細っていた男の子……。今ではその姿は見る影もない。そして、閉ざされていた心も今……。

「焦らんでもいいのじゃ姉上。今は見守ってやろうではないか」

「ええ、そうね」

静かにカンジューズで乾杯をする双子。まるで子の成長を喜ぶ親のようだった。

こうして打ち上げが終わり、波乱に満ちた二年目の清涼祭が終わったのだった。

脅迫状

清涼祭成功のおかげで、みかん箱が卓袱台に、莫蔭が綿の詰まった座布団に、腐った畳と割れた窓ガラスが新品に変わり、Ｆクラス教室は若干過ごしやすいものになっていた。異臭に変わって真新しい畳のい草の香りのせいもあるだろう。

「あら？なんやこれは？」

英才が登校し、自分の席に座ろうとしたところ、卓袱台のしたに白い封筒があつた。表に『猪俣英才様へ』と書かれていてしつかりと糊付けで封がされていた。手紙が入っているようだったが、英才には送り主に心当たりがない。

「おはようじゃ、英才」

「あ、おはよう、猪俣君」

何やら話し込んでいた秀吉と明久が英才に気づく。

「おう。なあ、これ置いたんはお前らか？」

英才は封筒を見せる。

「のう、明久・・・」

「まさか、猪俣君も？」

「ああ？なんや？」

「OK、猪俣君、まずは封を開けて手紙を読んでみなよ」
「？」

封筒を見て態度を変えた二人を疑問に思いつつも英才は封を破り手紙を取り出した。

『猪俣英才様

あなたの傍にいる異性をこれ以上傷つけないこと。

この忠告を聞き入れない場合、同封されている昔のあなたの写真を公表します』

よく見ると封筒には一枚の写真が。英才が取り出して見ると、それには昔の、秀吉と優子と出会う前の英才が写されていた。英才は驚いたのか目を見開いている。

「え？猪俣君も写真？どんな写真な―」

「あつ、明久よ！それより状況整理じゃ！」

写真を覗きこもうとする明久を引つ張り、話題の転換を図る秀吉。脅迫文から何が写されたいのかを察したらしい。

「英才……いいかの？」

「……今更こんげなもんが出て来るたあな。んで？お前ら何か知つとるんか？」

「知ってるも何も……」

明久はポケットから英才の物と同じような封筒を取り出す。

「僕も脅迫されているんだ―」

ゆっくりと説明をはじめ明久。話によると、『あなたの傍にいる異性にこれ以上近付かないこと。この忠告を受け入れない場合、同封されている写真を公表します』と、英才のものとそっくりの内容らしい。明久の封筒に入っていたのは明久のメイド服すがたの写真だった。英才の知らぬ間に、美波と瑞希が（実力行使で）頼んで着るこつとになってしまったらしい。

「お前も大変やなあ」

「言わないで・・・」

「しかし、英才と明久の脅迫状の文面、封筒を見るに同一犯のようじゃな。手紙の主は明久と英才の近くにおける異性に対してなんらかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが。つまりー」

「吉井ん場合はFクラスん女子の姫路、俺ん場合は優子を含むAクラス的女子か？」

「違うよ猪俣君。Fクラスの女子は姫路さんと秀吉に決まってるじゃないか」

「明久。そんなことよりも、ムツツリー二に頼むのではなかったかの？」

「っー！そうだ！美波が帰って来ないうちに！助けて！ムツツリー二！僕と猪俣君の危機なんだー！！」

康太の席に倒れ込むように駆け寄る明久。だがー

「お前から後にしろ。今は俺が先約だ」

遮る雄二ゴリラが一匹。

「あれ？雄二？ムツツリー二、何の話？」

「・・・雄二の結婚が近いらしい」

どうやら、話がこじれてきたようである。

脅迫被害者仲間

「はあ？結婚？代表、お前法定年齢じゃないやろ？」

「あれ？猪俣君、知らないの？雄二は前に霧島さんに日本史勝負で負けた時、その時の命令で付き合うことになったんだよ」

「・・・あいつ何考えとるんや？クラス間の交渉で決めたことやというのに、クラスの利益とかやのうて何自分のためだけに使うとるんや？・・・して何で結婚っちゅう話が出てくるん？」

「法定年齢に達していないとか、世間の常識は翔子には通用しない。このままだと俺の人生が・・・」

「雄二と霧島さんの結婚なんて、そんな既に決まってることより、僕が校内の皆に女装趣味の変態として認識されそうってことの方が重要だよ！」

「なんだと？お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れこの妻帯者！人生の墓場へ還れ！」

「うるさいこの変態！とつとメイド喫茶へ出勤しろ！」

「・・・」

「・・・」

「・・・傷つくならお互い黙っていればいいのに」

「で、でも、まだ結婚の話程度で済んで良かったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだともう子どもが出来たことにされているのかとー」

「明久、笑えない冗談はよせ」

「そこまで言うなら一応話を聞くよ。雄二になにがあったの？」

「一応つてのが癪に障るが、まあいいだろう。実は今朝、翔子がMP3プレーヤーを隠し持っていたんだ」

「MP3プレーヤー？それくらい別にいいんじゃないの？雄二だつてまえに学校に持ってきたし」

「いや、あいつは結構な機械オンチだからな。そんな物を持ってい

て、しかも学校に持って来るなんて不自然なんだ。そこで怪しく思
って没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポ
ズが録音されていたんだ」

「き、霧島さんは可愛いねっ！そんな台詞を記念にとっておきたい
なんてー」

「いや。婚約の翔子として父親に聞かせるつもりのようなのだ。MP3
プレーヤーは没収したが、中身は恐らくコピーだろうし、オリジナ
ルを消さないことには……」

「霧島も、あいつらと同じやったんかい……」

明久と雄二の話を聞いていた昼行灯の呟きは誰の耳にも入らなかった。

「そんなわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さっきも言ったように、あいつは機械オンチだからな。密かに集音機をしかけるなんてことができるわけないから、きつと盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

「……明久と猪俣は？」

「実はね、ムッツリーニー」

・

・

・

・

「そんなわけで、僕の写真を撮って、猪俣君に昔の写真を送ってきた犯人を突き止めて欲しいんだ。僕は写真を撮られた覚えなんてないから、きつと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだとおもう」

「なんだ、明久も猪俣も俺と同じような境遇か」

「……脅迫の被害者仲間」

「不名誉な仲間やな」

ため息をつく一同。

「遅くなつてすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

ドアをガラツと開けて入ってきたのは担任の鉄人西村宗一。手に大きな箱を抱えている。

「……………とにかく調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の氣に入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその二を持ってくるよ」

「じゃあ、俺は…………保険体育の点、上げるの手伝つたるわ。負けたままやと、嫌やる？」

「……………必ず調べあげておく」

対価に快く引受ける康太。三人、特に明久と雄二は目を付けられないうちに早く席についた。

行き方

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだ。集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように。特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな。いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは――現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ!?!?』』』

あまりの扱いにFクラス生徒の涙を伴った魂の叫びが教室に響いた。

「ああ、それから、猪俣。お前のしおりはコレだ」

そういうと鉄人は英才の席に行き、周りの生徒のものとは違って分厚いしおりを渡す。

『強化合宿のしおり―教員用―』

「なんすか、コレ？」

「いや、今朝の職員会議でな、お前には生徒としてではなくて、特別講師として参加してもらうことになってな。コイツらとは別メニューだ」

「ちよい待ってくださいや。いきなりそんなこつ言われてん、困りますわ」

「本当にスマンが度重なるAクラスからお前の授業の要望、そして我々教師がお前の教え方を研究する意味合いもあるんだ。その代わりといつてはなんだが、お前は現地集合ではなくてAクラスと同じくリムジンバスだ」

「おい！一人だけずるいぞ！」

「一応、コイツもFクラスだろ！」

「差別だ！」

Fクラス生徒から抗議の声。どうやら羨望しているだけではなく、道連れにしようとしているようである。

「だまらんか貴様ら！ちなみに言っておくが、猪俣にはお前らを補習室に送る権限があるんだからな。妙な真似をするんじゃないぞ！」

「くっ！卑怯な・・・」

「補習は嫌だからな・・・」

「クソっ！」

補習室、と聞いていた引き下がるクラスメートたち。卑怯などと罵るが、普段英才に集団で襲いかかることは卑怯とは思わならしい。「・・・先生、別にいいんですけどね、もっと早よう決めてくださいや」

「急に決まっただんだ。本当にすまん。では、頼んだぞ。それでは、

HRはここまで。今日も一日勉強に励むように！」
鉄人は持って来た箱を抱え、教室から出て行った。

強化合宿一日目？

「はい、じゃあ次は配布プリントの五ページ」

現在、英才は合宿所の教室で世界史の授業を行っている。対象は参加希望生徒、としおりに掲載していたのだが、『出なくてもいいならゆつくりしたい』という生徒が大多数を占めており、参加者のほとんどがAクラス生徒だった。Dクラス代表平賀源二など、Aクラス以外の参加者はかぞえるほどしかない。また、通常の授業とは違い教材は英才が作成した特製プリント。明久たちに渡した日本史の冊子を作成したときについてに作っていたらしい。そして決定的な違いが教師の参加である。いわゆる研究授業というものだ。伝説の塾講師のスキルを盗もうと何やら必死にメモを取りながら観察していた。本職の世界史担当教師は自信をなくしていたようだったが。

「やれやれ・・・教え子に教えられるとは思いませんでしたよ」

「教え子といってもカリスマ講師ですけどね」

「それでいて俺たちより点数が高いんですからねえ」

英才の授業が終わり、別室で話し始める教師陣。化学の布施先生、

英語の遠藤先生、保健体育の大島先生は考察や感想を述べる、というよりもため息をつく。

「しかし、このデータはすごい」

布施先生が取り出したのは以前に英才の授業を受けたAクラスの成績のグラフなどがまとめられた冊子。いずれの生徒も右肩上がりを記録していた。

「まったく・・・俺たちも負けてらんないですね」

どうやら、昼行灯はAクラス生徒だけではなく教師にも良い影響を与えたいらしい。

一方、英才はというと臨時の生徒指導室にいた。授業が終わってあてがわれた部屋（明久たちと同じ）で情眠を貪ろうと思っていたのだが、すぐに鉄人に呼ばれたのである。

「先生、もう今日の仕事は終わっただんですが」

「そうめんどくさそうな顔をするな。実はな、お前が授業をしている間、予定よりかなり遅れてウチのクラスの奴らが到着してな」

「それが？」

「いや、あのバカ共のことだからな。何かトラブルを起こす可能性がある。例えば女子風呂を覗くとかな」

「・・・同じ部屋なわけや」

「お前には奴らの、特に坂本と吉井の監視を頼みたい」

「奴らなら監視をすり抜け女子風呂に突撃するんと違います？」

「いや、その心配はない。女子の入浴時間中、お前にも我々教師と一緒に警備についてもらう。入浴時間外の監視だけでいい」

「さりげに仕事増やさんといってください。でん、男子生徒が警備つてー」

「女性教師陣及びAクラス女子生徒の推薦つきだ」

「ー問題ないんですかい・・・はあ、また睡眠時間が・・・」

「合宿の間、頼んだぞ」

英才の気苦労は絶えないようである。

強化合宿一日目？（前書き）

そろそろ説教タイム

強化合宿一日目？

「英！やつと見つけたわ！」

「猪俣君、大変なことになっちゃったんだ！」

英才が生徒指導室を出て部屋のほうに戻っている途中、優子と愛子が廊下の向こうから走り寄って来る。

「？お前らどうしたん？」

「さっき女子風呂の脱衣所で小型カメラが発見されたの」

「それをCクラス代表の小山さんがFクラスの仕業だって決めつけて、他の子達を連れて吉井君達の部屋に押し入っているんだ」

「なんやそら？吉井達は到着したばかりや。そんなこつする暇は無いはずやぞ？」

「ボクと優子、美穂達Aクラスは止めようとしたんだけど、姫路さんと島田さんと代表が拷問を始めちゃったんだ！」

「・・・あんバカどもが・・・まあ分かったわ。とりあえず行くで！」

英才と二人は急いで部屋へと向かった。

部屋の前には多勢の野次馬でこったがえしていた。なんとか野次馬をかき分け部屋に入ってみると、そこには到底法治国家とは思えない光景が広がっていた。明久と庚太は美波と瑞希を筆頭とする女

子に江戸時代の拷問で、かの將軍徳川吉宗が公事方御定書に定めた石抱を課されていた。さらにその隣では翔子が雄二にアイアンクロ―を極めていた。

「おい・・・何しとるんや？」

「ひ、英才！いいところに来たのじゃ！！」

「い、猪俣君！助けて！！」

「・・・助けて」

英才の登場に希望を見出す三人。

「こいつらが女子風呂を盗撮したのよ！」

「お前は・・・ああ、小山・ヒステリック・友香やったな。でん、証拠はあるんか？」

「そんなミドルネームなんてないわよっ！これが決定的な証拠よっ！」

怒りながら友香が差し出したのは小型カメラと集音マイクだった。

「・・・で？こいつらがやったつちゅう証拠は？」

「だからコレが動かぬ証拠じゃない！こんなことをするのはバカなFクラスしかないわ！」

「あんなあ、そんなカメラが証明しとるんは、『誰かが脱衣所を盗撮した』という事実だけや。それがなんでこいつらがやったつて証明しとるんや？それじゃあただの想像力が豊かな人でおわりや。それにこんまま警察に突き出してん、こいつらが無罪放免で、逆にお前らが有罪やぞ」

「何よ！こいつらを庇うつて言うの！？」

「そうです！明久君達がやったのは間違いないんです！」

「そうよ！猪俣、アキ達を庇うんならアンタも同罪よ！！皆、コイ

「ッも拷問よっ！！」

美波の号令で友香が連れて来たＣクラス生徒が英才に石を抱かせようと迫る。

「・・・・・・ここまでバカやとはなあ」

「きゃっ！？」

英才は石を抱かせようと近づいて来た女子の肩を突き飛ばした。

「ちよつと、猪俣！何女の子に手をあげてるのよ！アンタ、最低よっ！」

「はあ？何ぬかしよるんや？今んは拷問の阻止目的の最小限の実力行使による正当防衛や。それに今の世の中は男女同権平等社会や。男女差別すんなच्चゅうのに、都合のいい伝統性差意識は主張するんか？最低なのは堂々と法律を破って拷問しとるお前らやろっが」

「何よ、ウチらが悪いんじゃないで、信頼を裏切ったアキ達が悪いんじゃない！！」

「私たちだっつて信じていたんです！」

「信頼、信じていたねえ・・・・」

何様じゃおどれらあああ！！！」

床に置いてある石畳を踏み割り、怒りをあらわにする英才。凄まじい迫力に場が静まり返った。

強化合宿一日目？

「信頼だの信じていただのどの口が言うんか！？本当にそうやって真つ先に拷問なんざせんじやろうが！！だいたい常日頃からお前からバカ二匹は吉井に暴力を振るったり、無理矢理連れ回したりと、吉井のことも考えず自己満足を満たすためだけに行動しとるやないか！……はつきり言うわ、現時点で、お前らは吉井のクラスメートでしかないんや。吉井が何を言おうが、他ん女に色目使おうが、何に興味があるうがお前らがとかく言ったり暴力を振るったりする権利は無いんや！……吉井も災難やわあ、こんな恩知らずのバカ女に絡まれるとは」

「お、恩知らずって何よ！」

「聞くところによると、島田。お前去年、日本語が分からんからってクラスで孤立しとったそうやな。そんお前に手を差し伸べたんは誰や？お前の言い出した姫路ん転校の阻止に真つ先に親身に協力したんは誰や？姫路もや！！お前のため言うて戦争に勝って設備を上げようと動いたんは誰や？転校阻止のために裏で必死に動いたんは誰や？言うてみい！！」

「うっ……」

「そ、それは……」

英才に責められ口ごもる二人。

「して、そんお返しが石畳か？随分な御礼参りやな！」

「だってアキがー」

「まだ自分の非を認めんのか？……訂正や。お前らバカやのうてもつと質の悪いガキじゃ！自分の非も認めんと、して思い通りにならんと気がすまん。お前らは恋愛しとるつもりやろうが、ただんガキの遊びじゃが！！」

強化合宿一日目？（前書き）

飛び火回です

強化合宿一日目？

「・・・で、霧島。お前何しとるんや？」

黙りこんだ美波と瑞希を放っておき、今度は黙々と雄二にアイアンクローを極め続けている翔子に目を付ける英才。

「・・・雄二が盗撮で他の女子を撮ろうとしたからお仕置き」

「お前、俺と小山ヒステリックのやり取り聞いとらんかったんか？」

「・・・浮気は許さないだけ」

「ぎゃあああ！！し、翔子！それ以上は割れる！！」

「会話すら成り立たんか・・・」

「！！？」

英才は力強く雄二から翔子を引きはなし、床に転がす。

「そこんガキ二匹と一緒にや。お前に代表を折檻する権利はないわ！」

「・・・私は雄二の夫。夫のお仕置きは妻の役目」

「何が夫婦やと？夫婦という関係の成立には双方の合意が必要かつ法定年齢に達しとることや」

「・・・大丈夫。婚約をする。それに雄二と私は愛し合っている
両想いー」

「ええかげんにせえや！！戦争で勝ち取った命令権を使わな代表と付き合うこともできん、偽造音声のプロポーズを親に聞かせる、そ

んな意気地のねえくせに、何ぬかしよるんや！！特に偽造音声の件は代表は本気で嫌がつとったんや。それんどこが愛し合いなんや？ただんてめえの一方的な感情を押し付けて、お前も自己満足にひたつとるだけやないか！」

「……違う」

「何が違うんや？現実をみいや！お前は氣に入らん結果を暴力で変えとるだけや！お前がやつとることはサーカス動物の調教と同じや！！……あいつらにも言うたが、代表が何をしようがお前には関係無いんや！！付き合う、夫婦だの言う前にそんな腐った意気地の無い性根を叩き直せや！！」

英才の言葉に泣き目で俯く翔子。雄二はどうすればいいのかわからずまごついていた。

強化合宿一日目？（前書き）

主人公にスイッチ入ります

強化合宿一日目？

「で？お前らまだやるんか？」

俯く翔子を尻目に、隅に寄せられていた机に腰かける英才。

「・・・・・・によ」

「ああ？なんや島田？」

「さつきからえらそうにしてるんじゃないわよ！」

「はあ？俺は事実を言っただけや」

「まるでウチらが悪いみたいに！！」

「まるでやのうて本当に悪いんやろが」

「だまりなさい！」

美波は顔を真っ赤にしながらズカズカと英才に歩み寄る。

「だいたいいつもいつもふざけた眼帯なんてしてるんじゃないわよ！！」

バツ

美波は英才の右目の眼帯が気に食わないと言い剥ぎ取った。

「！！！？」

突然の出来事に硬直する英才。

眼帯が剥ぎ取られ露わになる火傷。あるはずの眼球は無く、その周りの皮膚は赤黒く腫れ爛れ、それはホラー映画や空想上の怪物を連想させるものだった。

「なっ！」

「い、猪俣君！？」

「……………」

英才の顔を見ておどろきを隠せない雄二と明久と康太。

『きゃああああ！』

『何よあれ！？』

『うわあ…………』

野次馬からは悲鳴があがる。

「何よそれ…………まるでバケモノじゃない…………」

誘拐騒ぎの時の英才と重なったのか、後ずさりしながら思わず呟く
美波。

バケモノ。

《うわっ！見るよ、あいつバケモノだぜ！》

《ちょっと！ウチの子に近寄らないで！何か病気でも移したらどう
するのよ！》

《お前なんて要らねんだよ！》

美波の一言で英才の脳裏には過去の光景がフラッシュバックされる。

動悸が激しくなる英才。

「英才！落ち着くのー」

ガンッ

心配した秀吉を遮るかのように、英才は座っていた机に拳を振り下ろす。

「返せやー!!」

「きゃっ!?!」

美波の手から眼帯を奪い返す英才。

「……………上等じゃクソガキが……………こん合宿が終わったら、粉骨碎身一所懸命全身全霊でおどれを潰したるわぁ!!憲法で保障されとる『健康で文化的な最低限度の生活』なんざおくれるとは思

うな！！ましてや想い人と結ばれるなどと思わん事や！！俺に宣戦布告したんや！覚悟せえ！！」

「な、何でそんな酷いことをー」

「酷い！？教えといたろう、俺ん中では酷いつちゅうんは、口答えしたら殴られ蹴られ、真冬に水風呂で水責めされ、さらには地下室に閉じ込められ鉄パイプで殴られ、タバコを押し付けられ、流血火傷は当たり前。周囲からは罵倒され石を投げられる。そういうのを酷いつちゅうんや！！てめえにすることなんざ優しすぎて涙がでるわ！！」

「っ！！この人でなし！！」

「人でなし！？あの頃は誰も俺を人として扱わなかった！！優子と秀吉以外はな！！・・・まあ、ええわ。せいぜい合宿を楽しむことやな。帰るころには帰る家なんざ無いかい知れんがな」

英才は野次馬を乱暴に掻き分けて部屋を出て行った。

強化合宿一日目？

嵐の如く怒り狂った英才が出て行き、静寂と共に辺りを重い空気が支配する。その雰囲気には耐えきれなかったのか、野次馬たちや友香を筆頭とする拷問部隊は部屋へともどって行き、部屋に残ったのは明久、雄二、康太、秀吉、優子、愛子、美波、瑞希、翔子の9人だった。

「な、何よアイツ・・・冗談でしょ？」

静寂を破ったのは英才の怒りを買った張本人である美波だった。

「・・・島田よ、前にも言ったが英才がやると言った以上、本気でお主を潰しにかかるはずじゃ」

「ひ、秀吉。潰すって誘拐犯みたいに？」

「いや、あれは感情に任せて動いた結果じゃ。今回は感情に任せつつもしっかりと考えて動くじゃろう。それに加えて英才の財力と人脈じゃ。このままでは退学どころか島田の人生自体が危ないのじゃ」

「何で・・・何でよ！？確かに眼帯をとっちゃったのは悪いと思うけど、もともとはアイツとアキたちが悪いんじゃない！！たかが眼帯を取ったぐらいでー」

あくまでもじぶんに非はないと主張する美波。そんな彼女に近寄る一人の人物が。

パンツ！

「いい加減にしない・・・」

優子の平手打ちが美波の頬を赤く染め上げる。

「あ、姉上！？」

「ちよつと、優子！？」

突然の出来事に美波は目を丸くする。

「あの眼帯の下に隠している火傷のせいで、英がどれだけ苦しんだか知ってるの！？自殺寸前まで追い詰められていたのよ！？自分の非を棚にあげて、皆の前で眼帯を取って！挙げ句の果てに『バケモノ』ですって！？ふざけるんじゃないわよ！！」

優子の怒りに満ちた目には涙が溜まっており、当の美波は頬を押さえながら黙り込んでいた。

「・・・愛子、アタシは先に戻るわ。後で代表を連れてきてちょうだい」

「う、うん・・・」

そう言うつと優子は部屋を出て行った。

「事態はかなりヤバイようだな・・・この強化合宿が終わるまでにヤツを何とかしないと島田が本当に危ない」

「でもさあ、坂本君。猪俣君の様子は尋常じゃなかったよ？ボク、あんな猪俣君初めて見たよ」

「……火傷も気になる」

「ねえ、秀吉。猪俣君を止める方法は無いの？」

「……おそらくじゃが、今の英才を止められるのは姉上とある人物だけじゃ」

「優子は……あの様子からしてムリだね」

「き、木下！そのある人物って誰よ！！」

復活した美波が秀吉に詰め寄る。

「その人物を語るには、英才の過去を知らねばならぬのじゃが……」

「秀吉、俺たちに話してくれないか？」

「……本当はワシの口から言うべきではないのじゃが……仕方あるまい」

秀吉はゆっくりと口を開いた。

過去編？～始まりの一言～（前書き）

過去編

過去編は全部重いです

過去編？～始まりの一言～

「あのミュージカルが見たい」

全ての始まりは幼い英才の一言だった。

猪俣英子、才蔵夫妻はかねてからの願いだった子を授かり、お互いの名前から一文字ずつとって英才と名付けたいそう可愛がった。成長するにつれ好奇心旺盛になって行く我が子に、ある日夫妻は読み書きを教え始めた。すると英才は読み書きをすぐに覚えてしまい、一ヶ月も経たないうちに漢字も覚え始めた。しかし、ここから英才の好奇心のベクトルは大きく変わっていく。両親に分らない言葉の意味を尋ねながらの読書を始めた英才はたくさん知識を吸収していった。その結果、同年代の幼稚園児なら戦隊ヒーローやアニメ、怪獣を退治するヒーローに興味をもったりするのだが、知識を得た英才はそれが大人が創り上げた虚構であることを知った。当然、周囲の子供たちとは話が合わず、孤立しがちになってしまった。

これとは別に、両親を悩ませることがもう一つあった。それは英才が手のかからない子供であることだ。子供ならば親に欲しいものをねだったり、だだをこねたりするものだが、妙に大人びてしまった英才にはそれが無い。あるのは果ての無い知識欲と好奇心だけだった。他の親からしてみれば羨ましい話かもしれないが、猪俣夫妻は英才に甘えて欲しかった。

そして英才が幼稚園の年長組に上がった頃のことだった。英才はいつものようにニュース番組を見ていた。そしてあるCMが流れた。

そのCMは海外で大ヒットを記録しているミュージカルの日本語版の舞台のCMで、日本でも有名な劇団が公演を行うものだった。たった15秒程度の短い時間に濃縮された華やかな舞台のダンス、音楽。まさに英才にとっては未知の世界。すぐに魅了されてしまった。そして――

「あのミュージカルが見たい」

目を輝かせながら呟いた一言。それは生まれて初めてのわがままだった。それを聞いた両親はおおいに喜んだ。我が子の望みを叶えてあげよう、早速両親は英才に内緒で劇場に出かけて週末の公演チケットを予約した。

――あの子はどんな顔をするのだろうか――

帰りの自動車で夫妻は英才同様に胸をおどらせていた。

しかし、交差点にさしかかった時だった。

信号を無視して交差点に侵入してきた大型トラックに横から追突されてしまった。

トラックのスピード、重量もあつてか、夫妻の車は大きくひしゃげた。

つまり、夫妻は即死だった。

（お父さん、お母さん、遅いなあ）

いつものように読書をする英才。何も知らず、ただただ帰りを待っていた。

過去編？！始まりの一言（後書き）

バカと病と召喚獣、という連載をはじめました。英才とは違ってFクラスに親交的で。

過去編？～転落～（前書き）

重い。

過去編？～転落～

ジブンノセイデオトウサントオカアサンガシンダ、ジブンノセイデオトウサントオカアサンガシンダ、ジブンノセイデオトウサントオカアサンガシンダ。

数日後、葬儀と火葬を終え、英才の両親は無言の帰宅をした。骨壺に入って……

変わり果てた両親を前に、壊れたオモチャのように、何度も何度も呟いて自分を責めたてていた。

皮肉にもその日は猪俣夫妻が我が子の為にと予約したチケットの分の公演が行われる日だった。

たった一度のわがまま。その代償はあまりにも大き過ぎるものだった。

「おい、由紀子、こいつがそうか？」

「ええ、間違いないわ」

さらに数日後、英才の前に現れたのは見知らぬ若い夫婦だった。夫の悟志は茶髪でガラの悪そうな印象で、妻の由紀子はつり上がった目がキツイ性格であることを連想させた。

「オジさんたち、誰？」

「今日から俺たちがお前を養うことになったから」

「それにしてもさあ、ラッキーじゃない？他の親戚が引き取りたくないからって家までもらえるなんて」

「ああ、ローンもないらしい。こんなガキをしょい込むだけなんて、あのジジイ共もイイ話を持ってきてくれたもんだ」

「？ここは僕とお父さんとお母さんの家だよ？」

「うるさいねえ、今日からアタシと悟志の家になるんだよ」

「もう手続きはすんでんだ。ホラ、どけよ。荷物があるんだからよ」
事情のわからない英才をよそに家に上がりこむ二人。

そしてこの日から英才の生活は一変した。

（二ヶ月後）

「うーし、由紀子、パチンコ行くぞ」

「今日こそは勝たないとね」

「おい、ガキ、てめえは留守番だ。勝手な真似すんじゃないぞ」

「ねえ……返してよ……」

「あん？」

「それ、お父さんとお母さんのお金なんでー」

バキッ！

「うるせえんだよクソガキ！今は俺らの金なの！分かる？」

バキッ！

「生意気言ってんじゃないよー！！」

英才を容赦なく殴りつける悟志。ただ、顔だとすぐにばれてしまうため、ボディに当てるようにしていた。

この夫婦、英才を引き取り、財産を管理するという名目で好き勝手にやっているのである。ギャンブルに金を使ったり、高級品を買い

漁ったりなど日常茶飯事。さらには英才が逆らったり口答えした時や、ギャンブルに負けて機嫌が悪い日などには容赦ない体罰を課した。そして『邪魔』と称して英才の両親の私物や思い出の品のほとんどを売ったり捨てたりしてしまった。

今や、幸せだった猪俣家の面影すら残っていないかった。

そしてさらに不幸が重なる。夫婦は英才に幼稚園を辞めさせ、極力外に出さないようにしたのである。加えて折檻は猪俣家の地下倉庫でやるが多かったため、英才がどれだけ泣き叫ぼうが近所に知られることはなかった。

当然、英才も普通ではられない。英才の中で一種の防衛本能が働いた。痛いのであれば、つらいのであれば、悲しいのであれば、泣きたいのならば―――何も感じ、考えなければいい。英才は幼くして

心を閉ざしてしまった。

過去編？ 業火と書斎（前書き）

重い。

過去編？～業火と書齋～

半年後、事態はさらに悪化していく。

その夜、英才の唯一の安息である眠りを妨げるものがあつた。英才が目覚ますと、自室のドアの隙間から黒煙が入って来ており、部屋を満たさんばかりの勢이었다。

（火事？・・・）

英才は起き上がって部屋のドアを開ける。ドアの向こうでは炎が燃え盛っていて、火の手が及んでいないのは英才の部屋のみだった。悟志と由紀子はどうやら先に逃げたらしく、寢室のドアが開け放たれていた。

英才は不思議と恐怖を感じなかった。感情が麻痺していたせいもあるだろう。迫り来る炎や黒煙はまるで自分を迎えに来た使いのように思えたのだ。

（死ねる・・・のかな）

英才は炎と黒煙を避けながら亡き父の書斎へと向かった。書斎にも火の手が回っており、本棚が特に燃えていた。英才は本棚の前に座る。両親が生きていた幸せだった頃、毎日のように父の本を読み漁ったものだ。側では両親が一緒にいてくれて分らない言葉や読めない字を教えてくれた。本を読み終え知識が増えていく度に両親が褒めてくれるのが嬉しかった――だが、もうそんな幸せは二度と手にすることはかなわない。両親は自分のせいで死に、本は赤々とした炎に包まれ、そして――

（僕は死ぬんだから・・・）

外で消防車や救急車のサイレンがけたたましく鳴り響いているのが聞こえて来た。そんな救いの手など英才には邪魔に思えた。

そのときだった。

備え付けの本棚の留め具な熱で溶け

炎を纏ったまま英才に向かって倒れこんできた。

「あつ……あああああ！！！」

仰向けに押しつぶされるだけでなく、右目に棚の角が直撃。激痛が走る。さらには炎が英才の皮膚を焼く。

（い……いやだ……死にたくない）

ここにきて英才は死への恐怖を抱き始めた。

「あああああ！熱いよ！！お父さん！！お母さん！！！」

必死にもがき、泣き叫ぶ英才。亡き両親に助けを求める。

英才はなんとか本棚の下から這い出ることができた。ただ、痛みが酷い。脳内麻薬の作用で多少は和らいでいるだろうが、激痛であることには変わりなかった。

しかし、だんだん意識が遠のいていく。願った両親の助けなど当然来ない。

（助けてよ・・・お父さん・・・お母さん）

『おいっ！子供がいたぞ！！』

『急いで防火毛布にくるめ！酷い怪我だ』

英才が意識を失う直前、視界の端に防火服に身を包んだ消防士の姿がうつった。

過去編？ 業火と書斎（後書き）

そろそろリカバリーが入ります。次の次ぐらいで。

過去編？バケモノ（前書き）

すいません。遅れました。

過去編？バケモノ

『住宅全焼、子供一人が重傷。原因は寝タバコか』

『火災を引き起こした夫婦、預かった子を虐待で逮捕』

「おい、どないするんや？」

「まさか、悟志たちがこんげなこつしよるとは」

「なんだい、昌兄さんが押し付けたんでしょ」

数日後、悟志・由紀子夫婦は英才が病院に搬送されたことにより、英才の体の傷を見た医師の通報によって逮捕された。これに食いついたマスコミがこぞって書いた新聞記事を見ながら、猪俣家の縁者たちは会議を開いていた。

「しかし、あの子をどうしようか？」

「誰が引き取るかやな」

「ウチはいやだよ、あんな気味の悪い子。眼球摘出に火傷、全身傷だらけ。気持ち悪い。昌兄さん、アンタんとは？商売が上手いってるんだから、食い扶持が増えても問題ないだろ？」

「馬鹿言うなや！商売っちゅうんはイメージがあつてナンボや。マスコミがせわしいだけやのうて、あんなんがおつたら客が逃げてまうわー！」

「俺だつて息子が私立の医大に入るからな。余裕なんて無い」

「・・・じゃあ、どこか施設にでも預けるかい？」

「それが無難や」

「園長、なんであの子を預かつたんですか！？あの子のせいで、他の子までイジメにあっているんですよ！？」

「仕方ないだろ。私だつて不本意だ。ウチは施設の体面上、断るこ

とはできないんだ」

「で、でも!!」

「それにだ、あの子を引き取る際、多額の寄付金をいただいたんだ。ウチが資金繰りに困っているのは君もしってるだろう?」

「・・・わかりました。でも、他の子をあの子に近づかせないようにしないと」

「おい、見るよ!! あいつ、バケモノだぜ!!」

「うわゝ、気持ち悪い・・・」

「よし、それならバケモノを石で退治だ!!」

「さんせー! 正義の味方だってバケモノを退治するしね!!」

『ちょっと！ウチの子に近寄らないで！何か病気でも移したらどうするのよ！』

『おい、バケモノ！なんでお前のせいで俺たちまでイジメられなきゃならないんだよ！』

『ふざけないでよ！！』

『気持ち悪い顔しやがって・・・お前なんて要らねえんだよ！』

誰もが英才を避け、誰もが英才を忌み嫌い、誰もが英才を罵倒した。

そして誰からも見捨てられた少年は一つの考えに至る。

(もう・・・死のう)

過去編？～出会い～（前書き）

かなり遅れました。

過去編？～出会い～

『生きているのに価値を見出だせません。お父さんとお母さんのところに行ってきます』

その日、英才は施設の郵便受けに遺書を投函すると、フードを深く被って出かけた。二度と戻って来ることの無い旅へと・・・

施設を出たものの、一つ問題があった。一日前に思い立ったものの、まだどこでどのように死ぬのかを決めていなかったのである。ゆえに英才は死地を探して回ることにした。

用水路・・・意外にも浅く、入水で死ぬことは不可能

大きな河川・・・河川敷に釣り人、犬を散歩させている人、スポーツをしている人など人が多く、すぐに助けられてしまう恐れがあるため却下

港・・・釣り人が多く却下

河川の橋の上から飛び込み・・・柵が高すぎて越えられず

・・・

・
・
・

・
・

・

気がつけば夕方。あらゆるところをまわって見たがいずれもタイミングが悪かったり邪魔が入ったりした。子供の足で行ける場所、そしてできることなどたかがしれている。英才は悩んだ。

そして一つの案が浮かんだ。ラッシュアワーの駅のホームからの飛び降り自殺である。これなら一番安い券を買えば駅のホームに入ることができ、さらに自殺すればそれによって生じた鉄道会社の不利益は遺族、つまり英才の保護責任者である施設の園長ならびに親戚たちが負担しなければならぬ。その額は何百何千万の単位なので自分を蔑ろにしてきた連中に報復もできてまさに一石二鳥。

英才は駅の方へと向かった。

途中、英才はある場所で足を止めた。そこは公園。昼間は同い年やそれに近い年の子供でいっぱい遊び場で、英才を虐めるグループも拠点としていたためにあまり近づけない場所だった。しかし、もう子供たちは帰ってしまったらしく人っ子一人おらず閑散としていた。風に揺られギシギシとブランコの鎖こすれ合う音が妙に響いているだけだった。

（そういえばー）

英才は公園に入る。

思い返してみれば、英才は公園で遊んだことがなかった。両親が死んでからはもちろん、生前も幼稚園が終わると読書に没頭していたため、親しい友達もいなかった。

滑り台から滑り降りてみたり、シーソーに乗ってみたり、ジャングルジムに登ってみたり、砂場で山を作ってみたり……『普通』

の子供の遊びの数々。一度は稚拙だと見下したこともあった。しかし、いざやってみるとそれが面白い。だが――

（もう、行かないと）

しばらくして、英才はブランコをこぐ足を止めた。

（ん？）

ブランコの下の方をよくみると、小さな赤い髪留めが落ちていた。手にとってみると、それほど汚れておらず、その日に落としたと思われるものだった。

（誰のかな？）

英才が髪留めを見つめていたときだった。

「姉上えゝワシはもう疲れたのじゃ」

「うるさいわね、男ならシャキツとしなさい！アタシは髪留め見つけるまで帰らないんだから！」

公園に二人の子供が入ってきた。その顔は瓜二つ。どちらも女の子のようにみえたが、話のないようからすると疲れているように見える方は男らしい。

英才は慌ててフードを深くかぶり直す。

「ん？姉上、ブランコに誰かおるのじゃ」

「あら、ホントね。ちよつと見たことない子だけど」

これが英才の運命を変える最初の出会いだった。

過去編？～出会い～（後書き）

先日、バスで乗り合わせた同い年ぐらいの方が本作を読んでいた。その隣で自分はバカひねを更新をしていたんですが（笑）

世間の狭さを痛感しました。

過去編？〜光〜

「ねえ、あなた、赤い色の髪留め見なかった？このへんで落としたかもしれないの」

ブランコに座っている英才に近寄る少女。英才は顔が見えないように下を向いて無言で髪留めを差し出す。

「おお、それじゃ！」

髪留めを見てやっと思える、と喜びの表情で少女に見える少年も近づいて来る。

「そう、それよ！ありがとう！」

英才から髪留めを受け取り、笑顔で嬉しそうに礼を言う少女。よほど大事なものだっらしい。

「しかし、お主はいつたい誰じゃ？顔を見せてくれんかのう？」

「そうよ。大切なものを見つけてくれたんだし。ほら、そんなフードなんてとって」

ずっと下を向いていた英才のフードを取る少女。英才はハツとして思わず顔をあげてしまい、隠し続けていた火傷が丸見えとなってしまう。

「お、お主！！」

「えっ！？」

夕日に照らされた英才の顔を見て目を丸くする二人。

（み、見られた！）

英才はフードをかぶり直す。見られたこともショックだった。しかし、それ以上にこれから自分に降りかかるであろう罵詈雑言や暴力が嫌だった。この醜い顔を見た誰もがそうして来たからである。

「お、お主！ひどい怪我ではないか！大丈夫か！？」
「そうよ！お医者さんにみてもわなきゃ！」
「……え？」

二人の言葉は英才の予想に反して英才をいたわり心配する内容のものであった。

「な……なんで？」
「なんでって当たり前じゃない」

「そうじゃ。それがどうしたのじゃ？」

「なんで君たちは僕を顔を見て・・・皆みたいに虐めたりしないの？なんでバケモノって言ったりしないの？」

英才の声は震えていた。そしてゆっくりとフードを取り去る。

「・・・他の子がどう言おうと、アタシはそうは思わないわ」

「姉上の大事な髪留めを見つけてくれたのじゃから悪い者でもなからう。バケモノなどなおさらじゃ」

「・・・」

「お主、なぜ泣いておるのじゃ！？」

「ちよつと秀吉！どうするのよ！」

突然泣き出す英才に慌てふためく二人。

両親が不慮の事故で他界して以来、自分に優しい言葉をかけてくれる人間などいなかった。そして火傷を負って以来、自分を人間として見て、接してくれて、寄り添ってくれる人間などいなかった。

英才の頬を大粒の涙が伝う。

「うれしいんだ……うれしいんだよ」

ただただ嬉しかった。二人にとっては何気ない言葉だったかもしれない。だが、それだけで英才は救われたのだ。

「秀吉、とにかくこの子をウチにつれて行くわよ」

「そ、そうじゃな。……ところで、お主、名前は？ワシは木下秀吉じゃ」

「アタシは木下優子。秀吉の双子の姉よ」

「い、猪俣英才……」

少年の暗く閉ざされた心に、
一筋の光がさし込んだ。

過去編？～木下家～（前書き）

気が付けば累計PV200000突破！感謝感激です！

最近、多忙のため更新が遅くなっています。申し訳ありません。

英才過去編、強化合宿編はまだまだ続きます。

過去編？～木下家～

「母上、ただいまなのじゃ！」

「こらっ、秀吉、優子！早く帰ってこなきゃダメでしょ……
つて、その子、誰？」

子供たちの帰りが遅いのを心配していたらしく、秀吉と優子の母、木下ねねはリビングからすぐに出てきた。が、秀吉と優子の後ろに深くフードを被った子供がいたので首を傾げた。

「今まで秀吉とアタシの髪留めを探していたの。そしたらこの子が見つけてくれたのよ」

「へえ、だから帰りが遅かったのね。……ところで君、ありがとうね。でも、もう遅いからー」

「それよりも母上！この子が酷い怪我をしているのじゃー！」

「そうなのよ！」

「っ！？ちよつと、君、見せてくれる？」

二人の様子から尋常ではないものだ判断したねねは少年、英才の前で膝立ちになって話しかける。

「は、はい……」

英才はゆっくりとフードを取りながら顔をあげる。すると、電灯の灯りに照らされて火傷があらわになる。

「まあっ！……これは昨日今日のものではないようね。」

「え？そうなのかの？」

「どういうことよ？」

「ねえ、君。何があつたか話してくれない？ね？」

ねねは英才の両肩に手を置いて優しい目で見つめる。

「じ、実はー」

英才はありのままを話した。両親が交通事故で死んでしまったこと、その後引き取られた夫婦に虐げられていたこと、火事で右眼を失い火傷を負ったこと、施設に預けられ火傷のせいでありとあらゆる人に忌み嫌われたこと。

そして、死のうとしていたこと。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

英才が泣きながら語った凄惨な過去に言葉が出ない秀吉と優子。

「そう・・・・・・・・辛かったわね・・・」

ねねは泣きじゃくる英才の頭を優しく撫でる。

「でもね、どんなに辛くても、死ぬなんてダメ。人生、辛いことばかりじゃないのよ？逃げちゃダメ。立ち向かいなさい。そしたら楽しいことや幸せは必ずやってくるから。ね？」

英才に諭すねね。英才は泣きながらも頷く。

「さて・・・・今日はもう遅いからウチに泊まりなさい。施設には私から電話しておくわ」

「・・・いいんですか？」

「ウチは四大家族だけど今パパが単身赴任中でいないの。別に大丈夫よ。ね？秀吉、優子」

「うむ！その通りじゃ！」

「ええ！つて、泣かないの！」

「・・・優しくされるのに慣れてないから・・・」

更に涙を流す英才だった。

「母上、何をしておるのじゃ？」

英才が眠っている傍で、メジャーを手にしながらなにやらメモをしている母の様子を不思議そうに見つめる秀吉。

「ん？ああ、これね。流石にこのままじゃかわいそうだからちょっとプレゼントを作ろうと思ってね」

「プレゼント？」

「ふふっ、明日になれば分かるわよ。ほら、秀吉ももう寝なさい」

「・・・気になるのう。母上、おやすみなのじゃ」

「ええ、おやすみ」

秀吉は気にしつつもあくびをしながら自室に戻っていく。

「さて、久々に腕がなるわね」

ねねはプレゼントの準備にとりかかった。

過去編？～木下家～（後書き）

木下母は才り設定です

過去編？～プレゼント～（前書き）

暇とかを考えて、細かく区切っていきたいと思います。

過去編？～プレゼント～

―翌朝―

「英才くん、ちょっといいかしら？じつとしてね」

「？」

朝食前、ねねは椅子に座る英才の後ろに立つと動かないように言う
と、あるものを取り出した。

「母上、それは？」

「ちよつとしたプレゼントよ」

ねねは取り出した黒い布地でできたもので英才の顔、火傷部分を中
心に覆い、両方から伸びた計4本の紐を後頭部にまわして結びつけ
る。

「あ、良かったわ。ピッタリじゃない。流石私」

「こ、これは？」

「一応眼帯よ。ほら、流石にそのままじゃちょっと嫌でしょう？コ
レなら火傷も隠せるし、何より思いっきり外で遊べるわよ」

「でも、大きすぎないかしら？」

優子が指摘する通り、ねね手製の眼帯は英才の顔の右半分の口から
上の部分をほとんど包み隠しており、眼帯というよりも仮面といっ
た方がふさわしいように見えた。

「これから大きくなつていくんだから、大きめの方が都合がいいの
よ・・・って、ほら、英才くん。泣かないの！」

「うう・・・えぐっ・・・ありがとうございます・・・」

嬉しくて泣き出す英才を見て苦笑いするねね。

「はは、お主は泣き虫じゃのう」

「ホントよね」

母と同じく苦笑いする双子だった。

その日から英才は変わった。

初めは英才に対する風評のため、秀吉と優子と遊ぶだけだった。しかし、その姿を見た秀吉と優子の友人たちが輪に入り始め、一緒に遊ぶようになった。また何事にも前向きに取り組むようになった結果、英才は勉強やスポーツでズバ抜けた能力を発揮。さらにかつての日課だった読書で得た膨大な知識を元にした話は子供たちの好奇心を刺激。おかげで英才につらく当たる子供や大人はほとんどいなくなった。

一つの出会い、一つの眼帯が英才に笑顔を取り戻させた。

過去編？突然に

―数年後―

下校中。

「英、今日は何して遊ぶ？」

「そうだなあ、鬼ごっこは昨日やったし・・・缶蹴りは？」

「賛成じゃ。今日こそ姉上と英才に勝ってみせるのじゃ！」

「・・・秀吉、そのセリフは昨日も聞いたわよ？」

「うっ！ワシだって男として負けてはおれんのじゃ！」

「昨日、隣のクラスの男子に告白されてたけどね」

「ひ、英才！それを言うでない！」

「ひで〜よ〜し〜！！」

「お、落ち着くのじゃ姉上！！それに姉上にはもう英と・・・姉上、そんなに力をいれてはワシの関節が」

目の笑っていない笑顔のまま秀吉の腕関節を極める優子。秀吉は痛みに悶える。

「優子、それぐらいにしておきなつて」

どす黒いオーラを垂れ流す優子を慣れた様子でなだめる英才。

「じゃあ、僕は荷物を置いて来るから・・・って、あれは？」

英才は自分が暮らす施設が見えてきたのでランドセルを置きに行こうとしたところ、施設の前で園長と見慣れない老人が立ち話をしてるのを見て首を傾げる。

「あら、誰かしら？」

「う、腕が・・・」

秀吉を解放した優子も加わる。

「まあ、行ってみようか」

「ま、待つんじゃない！」

駆けだす英才と優子の後を必死に追う秀吉だった。

「園長、ただいま」

「こんにちは、おじさん」

「こ、こんにちはじゃ」

「おお、おかえり。秀吉君と優子ちゃんも一緒か。」

「なあ、園長。こん眼帯つけたんがそうけ？」

「ええ、そうですよ」

まじまじと英才を見つめる老人。顔に刻まれたシワや白髪はまさしく老人のそれだが、反面、身体のほうはがっしりとしているようだ。
つた。

「園長、こちらは？」

「こちらは黒木茂信さんだ。君の遠い親戚にあたる人だ」

「え？」

「つまりだね、なぜ、お見えになったかというと

君を引き取るそうだ」

「・・・・・・・・」

宣告に目を丸くする英才。

「ち、ちよつと！どうということよ！！」

「そ、そうじゃ！今まで英才を引き取ろうという者はおらんかったはずじゃ！」

「どういうことですか？・・・・・・・・」

「どうも何も、儂はお前んこつをずっと知らんでのう。てげな苦勞をしたそうじゃな、昌や他んクソツタレ共のせいで。もう心配せんでええが。儂と暮らそうやないか」

「英才君、これは決定事項だ。君にとつても悪い話じゃない。こちらも以前のようないやうに調査したんだ。その結果は申し分なかった。君も一年したら中学生、いつまでもこんなところにてはダメだ。手続きはこちらですぐにでも始めるよ」

「なんでよ・・・そんなの勝手過ぎるじゃない！」

「英才がそんなことで納得するわけがー」

「優子、秀吉。ありがとう。でもね、これでいいんだ」

「っ！！どうして！？」

「両親がいない僕にとっては避けられないことなんだ。いつまでもここで甘えるわけにはいかないんだ。それに、ここの規則で、引き取り手が現れたら出ていかなきゃならないんだ」

悲しそうに笑う英才。

「それでもワシらは嫌じゃ！！お主と離れたくないのじゃ！！」

「どうしてよ・・・英、行っちゃダメ！！」

双子はそろって英才を引き留めようと泣きながら訴える。

結局、夕方になり、園長がねねに電話をして秀吉と優子を迎えに来てもらうことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5555w/>

バカとひねくれ男と召喚獣

2011年10月24日12時58分発行